

前前世社畜、前世鬼殺
隊士、今世ウマ娘

サイレン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウマ娘×全集中の呼吸という、誰かそのうち書くだろと思っていたけど見てないなと思ひ、出来上がったものです。

目次

素晴らしき世界に今日も乾杯	1
私の中のあたしを超える	43
夢中になれるモノが　いつか君をすげえ	
やつにするんだ	70
メチャメチャやさしい人達がふいに見せ	
た	135

素晴らしき世界に今日も乾杯

どうやら私の魂は転生を繰り返すらしい。

頭痛い発言なのはちゃんと分かっているが、一度ならず二度も起きると流石にそう勘繰りたくもなる。

前前世社畜OLだった私はプツンとブレーカーが落ちたかのような突然死を体験したら、別の世界で産まれ直していた。意味が分からん。

だがしかし、漫画やラノベやアニメを好き好んで読んでいた身としてはやつふうー！とはしやぎたくなる気持ちもあつた。その後、両親が人の形をしたナニカに惨殺されてスンと表情が死んだ。

鬼滅！　ここ鬼滅！！　割とハードモード！！

なんて思つたものの、一度死を体験してるからか死への恐怖や忌避感が薄く、前世でハマつた作品の登場人物たちと絡みたいという欲望が身を焦がした私は、運良く救助された後に鬼殺隊士を目指して修行することになった。

下宿先はなんとあの煉獄家。助けてくれたのがまだ頑張っていた頃の酒柱もとい炎

柱だったのだ。これは勝つると鬼殺隊に入りたいと猛アピールした。勝った。

転生特典かは不明だがこの身体のスペックは中々のもので、全集中の呼吸というファンタジー技能も身に付き、最終選別も乗り越え、異能の鬼もバツバツサと斬り捨てていった。

憎しみとは凄いもので、鬼とは言え人型の生物を殺すのはと修行中は思っていたが、いざ相対したら何の躊躇も無く頸を斬れた。

死に晒せえええ！ つと、二度目とはいえ両親の仇に慈悲など必要ないのだ。

まあ結局は殺されたんですけどね！

原作開始時点で柱の継子まで上り詰めたが、上弦の鬼はマジで規格外だった。あれよりも更に強い鬼の始祖すらも倒すなんて、今代の柱と主人公一行は本当に凄い人たちなんだなと感心する。

原作改変の結果を生み出してしまったことに若干の焦燥がなくても無いが、悔いはない。

目の前で滂沱の涙を流しながら笑顔を見せてくれる師匠と、いずれこの世界を太陽のように照らしてくれる主人公。彼らがいれば大丈夫だ。

こうしてボーナスステージを終え、充実感を胸に今度こそ死ぬのだなと思っていた。

「何ですかこの人ではないナニカは……」

また生まれ変わってるんですけどッ!!!

獣人というやつかな？ 頭頂部から生えているケモ耳を見て私のテンションは上がった。

遂に和風ダーク・ファンタジーから純ファンタジーへの転生か！ と思ったがなんか違う。

部屋にテレビあるし、窓の外から見える風景は前前世で見慣れた現代日本と遜色ない。

もしや鬼退治のダーク・ファンタジーから東京のグールのなダーク・ファンタジーかと身構えたが、答えはテレビが齎してくれた。

この世界ではケモ耳女性をウマ娘と言うらしい。

およ、ギリギリ聴き覚えがあるぞ、前前世で。全く内容知らないけど。確か競馬を元に馬を美少女に擬人化させた作品だった筈だ。アニメやアプリが大流行していたのはなんとなく覚えているが、自分は手を伸ばさなかった作品だった。

テレビを観る。ウマ娘がレースを走っている。今世の両親曰く、レースは人気上昇中のコンテンツらしく、勝利を重ねれば億万長者も夢ではないとのこと。

……これは勝ちましたわ。

何せ自分には全集中の呼吸という裏技がある。このウマ娘という生物は人間を遙かに上回るスペックを宿しているらしいから、身に付けるのは容易では無いだろうが可能ではあるだろう。

ただのウマ娘とファンタジー技能を持つウマ娘。言うまでもなく強いのは後者。ドラッグでもないから禁忌にも触れない。

人生勝ち組確定とか最高じゃないですか！

勝ったなガハハ！ 風呂入ってくる！

という割と最低な理由で将来の目的を定め、とりあえずの第一歩であるレースの入り口とも言える日本ウマ娘トレーニングセンター学園——通称トレセン学園（中央）に入学を果たしたのだった。



トレセン学園の放課後に実施される模擬レースにて、激震が走った。

「なんだあれは」

「ハ、ハこれは……」

「速すぎる……」

目の前で行われているレース模様は、当事者からしたら絶望しかない結果を生み出している。

懸命に走っているのだろう。二位以下のウマ娘たちは齒を食いしばりながら必死に脚を回して駆け続けていた。

彼女たちはこの中央トレセン学園に入れる逸材たち。入学できたという事実だけで世代の上澄みであることは証明され、確かな自信と実力をもってこのレースに臨んでいる。そのはずなのに。

届かない。

どう頑張っても届かない、圧倒的な実力の差。

才能の違い。

10バ身を超える大差。

観戦していたトレーナーやウマ娘たちは声すら上げられない。見せ付けられた蹂躪劇に対して、業界の価値観すら揺るがされるのではないかという恐怖すら覚えた者もいた。

彼女こそ、怪物に相応しい。

ゆるりと巻かれた鹿毛の長髪を風に靡かせて、格の違いを見せ付けたそのウマ娘。

その名は——マルゼンスキー。

◇

なんか同期にバケモノいるんですけど。

えっ、あれ本当に私と同じウマ娘？ 似てるだけで実は上位種とかそんなオチはないの？ ない？ マジで？ あんなの持って生まれた才能の暴力じゃん。

……いや、それも普通か。

人でも鬼でも歴とした序列があつたんだ。ウマソウルなんていうよく分からん概念が付きまとう不思議生物ウマ娘にだって、そりゃあ才能の違いの一つや二つあるんだろう。

問題はアレが私のライバルとして立ち塞がることだ。

「マルゼンスキーですか……」

「……凄い、ね」

一緒に観戦していた同期をチラリと一瞥すると、あら、顔から血色が抜けていらつしやる。

大丈夫かなこれ？ 走ってもいないのに戦意喪失してない？ と思って周りを見回

してみれば、ポキポキポキと心が折れる音が聞こえてくるような風景が広がっていた。顔が、みんなの顔がヤバイ！

確かにマルゼンスキーはヤバイ。

自分がどの程度の実力なのか詳しくは分からないが、軽く比較しても明らかにスペックが超抜級である。

ち、違いすぎる……マシンポテンシャルが……と、思わず呟いてしまいそうなくらいにはおかしい。

ウマ娘のレースはブラッドスポーツ。

この国に於いてもシンボリ家、メジロ家などの名門と呼ばれるいわゆる「貴族」が存在しており、私を含めた一般家庭出身のウマ娘は「寒門」と区別されている。その力の差は未だ歴然で、寒門のウマ娘が最高峰レースであるG1で勝つことは殆どない。

ぶつちやけ知らないが、マルゼンスキーも貴族出のウマ娘だろう。

知識としてしか知らなかったが、まさか実力差がこんなに露骨だとは思わなんだ。黒人とアジア人だってもう少しまともな勝負するぞ？ 種族値の設計間違ってるでしょ。

三女神やる気あんのか？

死屍累々のレース場で一人楽しそうに笑っているマルゼンスキー。

周りに群がるのは観戦していたトレーナーたちで、その光景を負けた子たちは光を

失った目で見ています。

……おお、心に来る。私の精神年齢が見た目通りだったら多分絶望していただろう。憧れていたレースという夢の舞台への第一歩を無惨にも踏み散らかされたあの子たちの中で、果たして一年後もこの学園に残っているのは何人なのだろうか。

「レース参加希望の方は集まってください。15分おきに行います」

……傍観者気取ってる場合じゃない。

私の目的はなんだ？

——お金を稼ぐことである！

その為に為さねばならぬことはなんだ？

——レースに勝つことである!!

初心を忘れずに、これ大事。

私たち新入生は、まずトレーナーに選んでもらわなければレースにすら出れない身なのだ。この模擬レースで力を示せなければ、レースで賞金を得るなど夢のまた夢。

全集中の呼吸は未だ未習得だが、不完全なそれでも十分戦えるはず。

がんばるぞいつ!!

「スペックはこつちが上のはずなのに!!」

前世より強くなれる気がしないっ!

やはり鬼滅はファンタジー世界だったのかっ!

既に前世では全集中・常中を修得した年齢を超えたというのに、人間を遥かに超えるポテンシャルの筈のウマ娘の今世では、レースの最中に全集中の呼吸を一度使えるかどうか。

無理に全集中の呼吸を使おうとすると、肺が爆発しそうになったり耳から内臓が飛び出るんじゃないかと錯覚するほどだ。貧弱、肺が貧弱う……!!

まあこの時点で同期のほとんどには負けないだろうとは思う。

だが、マルゼンスキーはまだ無理だ。アレは速すぎる。昨日テレビ越しに観たメイクデビューもぶつちぎりの一位でゴールしていた。

才能で劣る現実では、身体を作り変えるくらいに覚悟が無ければ勝負にすらならない。
い。

「ふうー……」

……はつきり言おう、舐めていたと。

前世のように命が掛かってない、たかがレースと修行もそこそこで済ましてしまった。

イメージする。

目の前には倒すべき敵が一体。

——全集中・炎の呼吸

人目に付かない学園から離れた山中で、木刀を構えて息を深く吸う。

身体中の血の巡りと心臓の鼓動が速くなり、体温が上がっていく。肺を大きく膨らませ、空気を吸い込めるだけ身体に取り込んで骨と筋肉の強度を上げる。

だんっ！ と片足を踏み込んだ。

【壱ノ型・不知火】

刃に炎を纏わせて突き出された拳を避け、腕の肘から先を斬り飛ばす。

間髪入れずに息を入れて、位置が入れ替わった状態から振り返ると同時に木刀を下段に構える。

——全集中・炎の呼吸

【二ノ型・昇り炎天】

空へと弧を描く斬撃。背後から先程とは逆の腕を斬り裂いて、相手の攻撃手段を潰す。

あとは残った頸に狙いを定めるだけ。

——全集中・炎の呼吸

【参ノ型・気炎万象】

斬つ、と風切り音を残し、振り抜いた木刀を腰へと差し戻す。

同時、膝から崩折れて荒い息を吐き散らかす。

「はあっ！ はあ！ はあっ！！ きついつ！ このっ……身体、本当に、高性能になったの……っ！」

こんなんじゃない、下弦の鬼すら殺せないっ！

……血迷っていた。

トレーナーの下に戻ってレースに向けたトレーニングをする。

そうだった、私は鬼殺隊士じゃなくてウマ娘だった。

私は無事にとあるトレーナーのお眼鏡にかなってレースへの出場権を手に入れた。
た。

常にグラサンで上半身裸の状態に上着を着るといふ独特なセンスなトレーナーだが、腕は確かなのだろう。全集中の呼吸に頼らずとも、マルゼンスキーに少し遅れてデビューを果たせた。

……ところでなんだけど、ウイニングライブって何なの？

何で必死こいて走って脚を酷使させた後にダンスするの？

泣きつ面に^{エイティシックス}8 6 ツ！

とは正にこのこと。

確かに種族として見目麗しいウマ娘が歌って踊っていたら目の保養だろうが、もう少し労りの精神を持つても良いと思うんだ。

最初は意味がわからないと宇宙猫背負っていたが、そういうものだと言えれば話は早い。

ウマ娘が歌って踊ってお客さんは嬉しい。

私は賞金が手に入って嬉しい。

ワインウイんな関係というやつだ。やってやろうではないか。

そんなこんなでトレーニングを積み、全集中の呼吸を死に物狂いで身に付け、レースで連勝を繰り返していたら年が明けた。

今年からクラシック級。

トウインクル・シリーズの花形の世代。

勝負の一年が始まるなどトレーニングに向かっていたら、マルゼンスキーを見かけた。

「ごめん、あなたとはもう併走したくない」

「あつ、」

手を伸ばすもその挙動は途中で止まり、だらりと下へと降りていく。

一人レース場に取り残されたマルゼンスキーは数秒俯いたかと思うと、大きく一息吐き出して準備運動を始めた。

……えっ、いじめ？ まさかマルゼンスキーっていじめに遭ってるの？

私の知ってるマルゼンスキーは誰とでも仲良くなれるコミュ力お化けな陽キャである。事実、校内では同級生や学園職員、はたまた理事長秘書の駿川たづなさんともお喋りしている姿を見たことがあった。

そんなマルゼンスキーが今、併走を頼んだのに素気無く断られて、一人寂しく準備運動しているのだ。

見掛けてしまった以上、ここを素通りするのは心が痛む。

「併走相手を探しているのですか？」

「えっ？」

開脚して身体を伸ばしていたところに声を掛ける。

練習前に話し掛けられることを想定していなかったのか、キョトンとした顔でマルゼンスキーは此方を見上げていた。

「あなたは、ホープフルステークスで勝った……」

「こうして話すのは初めてでしたか。パーガトリーと申します」

「マルゼンスキーよ。よろしくね、パーガトリーちゃん」
「ちゃん付け……。」

自分で言うのもなんだが大人びた見た目と言葉遣いから、同期や先輩からもさん付けで呼ばれることが多いんだけど。

「私がお付き合いましたでしょうか？」

「いい、いいの？」

「はい、そろそろ貴方とも走りたいたいと思っていたところですよ」

このおよそ一年で私は全集中・常中をやや不完全ながら身に付けている。

鬼のように強くなれたわけではないが、この怪物にだって充分以上に戦える力は手に入れた。敵情視察としてはもってこいのタイミングだ。

ふふん、目に物見せてやろうではないか！

なんて一人でテンションを上げていたら、私を遥かに上回る上機嫌さのマルゼンスキーが目と鼻の先にいた。

「嬉しいわ！ 走りましょ、一緒に！」

「え、ええ」

ブンブンと握られた手が上下に振られる。

テンションバグってない？ もっと大人びた娘かと思ってたんだけど。

先程の哀愁漂う光景から一転、一瞬にして元氣とパワーを取り戻したマルゼンスキーと共にストレッチを開始する。

「この後トレーニングがあるため、一回だけでよいですか？」

「うんっ！」

程よく身体をほぐした後、二人並んでスタートラインに立つ。

「合図はお願いしてもいいですか？」

「ええ、任せてちょうだい」

膝を曲げて前傾姿勢を取る。

併走だから本気の全力全開は出さないが、最初の最初で度肝を抜いてやろうではないか。

「位置について〜」

——全集中・炎の呼吸

「よーい」

【壱ノ型——

「ドンっ！」

——不知火】

ダンッ！ と炎を燃料に最大出力で踏み出した。

「っ!？」

先頭にいる光景しか見たことがなかったマルゼンスキーが、私の後ろにいる。

見たか、これが私が編み出したスタート必勝法だ!

これがあれば例えマルゼンスキーのような化け物相手でも、スタートで押し負けることはあり得ない。

とはいえ、これだけでマルゼンスキーに勝てるかと言われれば当然、否。

後ろから襲い掛かってくるプレッシャーは、これまでのレースで感じたものとは桁違いのものだ。

「ふふふっ、誰かの後ろで走るなんて初めてだわ」

「偶には良いものですよ」

「パーガトリーちゃんが誰かの後ろを走ってるのを見たことないのだけれど、ねっ!」

まるでクラッチを踏んでギアを変えたが如き加速。私と同様に本当の全力ではないだろうが、ぶっちやけ速度は先月のG1レースを上回っている。

成る程、これが怪物の走りか。

ウマ娘には本格化と呼ばれる現象がある。詳しい理屈はよくわからないが、簡単に言えばレースに最適化した身体になった状態を指す専門用語だ。

マルゼンスキーが本格化を迎えたのはつい最近らしい。

バ鹿じゃないの？ これまでも本当の実力では無かったとは、やはり一人だけ設計を間違えてるよね？

速いし強いし加速力やバいしスタミナも普通にあるとか、これどこの『僕が考えた最強のウマ娘』なんですかねえ、つて若干僻むくらいにはステータスに隙が無い。

しかも脚質が逃げというのが希望が無い。

レースにおける走法は大きく四つに分けられる。逃げ、先行、差し、追い込みの四種類で、逃げ以外の三つはレース終盤まではバ群に囲まれている状況が少なからず存在する。

周りにウマ娘がいれば駆け引きの余地があるが、逃げにそんな小細工は通用しない。一人きりでのタイムアタックに、戦略など意味を成さないのだ。

逃げとは最初から最後まで先頭を走る、ゴリ押し of 戦術。

抜かされなければ勝ち、垂れれば負ける。

そして、私の脚質も逃げである。

第四コーナーを回り、ラストの直線。

本番でのレースならここで更に一息を入れて新たな領域に踏み込むのだが、あくまでこれは併走。

マルゼンスキーと付き合う形でゴールまで走り切り、軽く流して息を整える。

「すごく楽しかったわ！　ありがとう、パーガトリーちゃん！」

「はい、私も楽しかったです」

「あ、それで、……パーガトリーちゃん。あたしと、その、また……」

手を胸の前で合わせてもじもじとしながら此方を上目遣いでチラ見してくる。

……可愛い、なんだこの可愛い生物は？　見たことない年相応の反応にノックダウン

寸前である。

「ほん。

「トレーナーの許可が取れば、併走は構いませんよ」

その言葉を受けて、マルゼンスキーは花開いたように笑った。

「ありがとう、パーガトリーちゃん!!」

「わあっ」

思いっきり抱きつかれた。

たゆんと潰れる双丘。おおっ、なんて重厚感っ!!

「パーガトリーちゃん！」

「あつ、パーガトリーちゃん！」

「パーガトリーちゃん！」

それから二ヶ月近く、時間があればマルゼンスキーと併走するようになった。

併走どころかあの日から異常に懐かれて、チームのトレーニング以外では常に一緒にいるまでである。

さて、ここで問題です。

同期で片手の指の数もない（というか私たちだけ）無敗ウマ娘が二人並ぶとどういうことが起きるでしょうか？

しかもその片割れは怪物と称される傑物で、デビュー前から周りの少女たちの心を折ってきたウマ娘とする。

正解は、結構露骨に避けられるでした！

つらい、俺は耐えられない……！ という程ではないが、ちよつとビツクリした。

今までは普通に会話出来ていた友達が、苦笑いを浮かべながら目も合わせてくれない時があるのだ。

初めて出会したときは思わず、えっ……と、声を漏らしてしまった。

さつ、とマルゼンスキーを見たら、曖昧に笑いながら瞳には諦めが滲んでいた。

「ごめんなさい、パーガトリーちゃん」

「謝る必要はありません。……あれが貴方の日常だったのですか、マルゼンスキー？」

「……ええ、そうよ」

併走の後、落ち着いたら話がしたいと誘って知った初めての事実。

うわあ、それはキツイなあ。力を持つが故の差別とは。多分どうにもならないだろう。

「と言っても、最初はここまで露骨ではなかったのよ。酷くなったのは去年のG1——朝日杯が終わった後」

抱えた膝に顔を埋めるマルゼンスキーは、普段の快活さの一割も無い声音で続ける。

「同期の子にね、ただ楽しく走りたいただけならレースに出ないでって言われたわ」

「それは……」

思ってた以上に酷い。それは凹むわ。下手したら立ち直れないぞ。

「併走に付き合ってくれた子たちも、あたしとはもう走りたくないって」

「ああ、あれはそういうことでしたか」

「ふふっ、……あの時パーガトリーちゃんが声を掛けてくれなかったら、あたしはどうなっていたかしら」

空笑いを溢して顔を上げたマルゼンスキーは、本当にギリギリだったのかもしれない。

ふんふむ、話を振っておいてなんだけど、この話題はまずい。どう頑張っても心が抉られる未来しか見えない。

見るならもつと楽しい未来だ。

「レースは勝負です。勝者がいれば敗者もいる。そして、強いことは罪ではありません。あまり気に病みすぎではいけませんよ」

「うん、ありがとう」

「私は貴方との真剣勝負、楽しみにしていますから」

早ければ来月の弥生賞でぶつかるだろう。

マルゼンスキーとの公式対戦はこれが初となる。ここ二ヶ月の併走でマルゼンスキーの走りの感覚も掴み、全集中・常中もほぼマスターした。

異世界転生の本領を遂に発揮する時だ。

怪物退治といこうじゃないか！

「……そっか、パーガトリーちゃんは知らないんだね」

およ、なんだその反応は？

一人意気込んでいる私が恥ずかしいじゃないか。なんだ、マルゼンスキーも私なんか敵じゃないってか。

とはいえ、知らないとはどう言う意味だろうか？ 学園でレースについてそれなりに学んできたんだ、知らないことなんて無くなってきた筈だぞ。

はて、と首を傾げる。

「知らないとは一体？」

「……パーガトリーちゃんクラシック三冠を目指すのかしら？」

「そうですね、それはマルゼンスキーも同じでしょう？」

「……あたしは、出られないのよ」

「……は？」

「は？ 出られない？ 何に？ レースについて意味か？」

「……なんで？」

「クラシック登録を忘れたのですか？」

「忘れてはいないわ、でも出れないのよ」

「何故？」

「……あたしはね、外国のウマ娘扱いなの」

話をまとめるところらしい。

マルゼンスキーの母親はイギリスでクラシック三冠を取ったウマ娘。父親は日本人でマルゼンスキーも日本生まれの日本育ちだが、URA——Umarumuse Racing Associationが定めたレースの規則だと、マルゼンスキーは外国のウマ娘扱い。

そして現状、外国のウマ娘は日本で開催される荣誉ある主要レースの殆どに出場出来

ないのだ。

つまりなんだ。

マルゼンスキーは出てこないのか。

臯月賞にも。

日本ダービーにも。

菊花賞にも。

それは。

なんだ。

随分とまあ。

「巫山戯た真似をしてくれますね」

私は何の為に、血反吐を吐きながら、全集中の呼吸を身に付けたと知っているんだ。

私だつてもうウマ娘だ。

私情として賞金は欲しい。

だがウマ娘として、走りたいと、勝ちたいと、本能が叫んでいるのだ。

時代が生んだ麒麟児である、このマルゼンスキーに勝つのだと。

それがなんだ、下らない規則の所為でその舞台すら用意されないのか。

——巫山戯るな

「あたしも、パーガトリーちゃんと一緒にダービーを走りたかったなあ」

隣で声を出さずに泣く友人を。

怪物と呼ばれる、ただの女の子の無念を。

何より、私の胸に宿る熱きこの炎を。

こんな形で終わらせてたまるものか。

◇

四月。

クラシック三冠の初戦であるG1レース——皐月賞。

大観衆が集まるレース場で、マルゼンスキーは観客席から出場選手を見詰める。

（ああ、結局、パーガトリーちゃんとは走れなかったわ……）

マルゼンスキーはターフで最終調整に入っている同期の中の一人、数少ない親しい友人を見る。

パーガトリー。

毛先が紅い金髪を三つ編みでまとめた、鋭利な真紅の瞳を持つウマ娘。黒を基調とした軍服のような格好に、裾だけ炎を模したような色合いの白い羽織を肩に掛けた勝負服

は、一騎当千の戦士の風格を放っている。

ここまで全戦全勝。このレースにおいても当然の一番人気。

(パーガトリーちゃんに勝てる子はいないわね)

はつきり言つて、格が違う。

鍛え抜かれた身体から放たれる威圧感は一線を画しており、戦う前から少くない同期の心を押し折っている。

あれが寒門のウマ娘と揶揄されてきた少女とは誰も信じないだろう。名門相手でも影すら踏ませない逃げで無敗を貫き通してきたその貫禄。

それはこのレースでも変わらないだろう。

『各ウマ娘、ゲートインが完了——スタートしました』

ゲートが開くと同時、恐ろしい力が込められた踏み込みが轟き、炎が爆発する。

パーガトリーのあのロケットスタートに太刀打ち出来る者などいない。一気に先頭に躍り出て、そのままぐんぐんと速度を上げて後続を引き離していく。

稀に見るハイスピードでレースが推移する中、この数ヶ月パーガトリーと併走を繰り返してきたマルゼンスキーだけが気付いた。

(速い、あたしとの併走の時よりも更に数段階も！)

互いに全力ではないことは分かっていたが、パーガトリーの全身全霊がこれ程とは。

パーガトリーと友誼を結ぶきっかけとなったのは、本当に唐突なものだった。

本格化を迎えてレースで蹂躪という結果を生み出した後、いつも併走をしてくれていた子たちが付き合ってくれなくなった。

同期の子の心無い言葉で気持ちが落ち込んでいた時に、あちらから声を掛けてくれたのだ。

直接絡んだことは無かったが、存在は知っていた。

ジュニア級G1レース——ホープフルステークスの勝者。

顔見知り程度の関係で絡みは無かったが、自分と同じ無敗のウマ娘だ。

いつかレースで走ることもあるだろうと考えていたが、まさか併走する仲になるとは。

パーガトリーは速かった。

マルゼンスキーにとって走るというのは、楽しくて気持ち良いこと。ただそれだけで、他者を必要とするものではなかった。

その中で唯一、併走とはいえマルゼンスキーの先を走るのがパーガトリーだった。

初めてだった。誰かの背中を追うのは。

楽しかった。誰かと一緒に気持ち良く走るのは。

初めてだったのだ、同じレースを走ってみたいと思ったのは。

「パーガトリーちゃん……」

『パーガトリーが第3コーナーを抜けて第4コーナーへ突入！　ここまで変わらぬの先頭だ！　後続が速度を上げてくるが、……は、速い!!　差はこの時点で既に大差以上に広がっていますパーガトリー!』

冷徹な眼差しで先を見据えるパーガトリー。

彼女が放つ空気が更に一変したのは、第4コーナーを回ったその時だった。

「あ、あれはっ!」

マルゼンスキーが見詰める先で、景色が揺らぐ。

パーガトリーの瞳に炎が宿り、煉獄の道が拓かれる。

『最終コーナーを回って加速する、ここから更に加速するのかパーガトリー!!　二番手との差は10を超えてもう何バ身かも分からない!　圧倒的、あまりにも圧倒的だ!』

追い付けない、誰もその速さには追い付けない!　スタートからゴールまで、徹頭徹尾影すら踏ませない異次元の速さ!　そして今、一人旅を終えてゴール!　一着はパーガトリー!　後続を突き放して大差での勝利です!!』

超抜級の実力を示して勝利を掴んだパーガトリーは、息を乱しながらもジョギングをしながら静かに客席に手を振る。

『着順が確定いたしました。1着は6番パーガトリー。勝ち時計は……は?』

実況の声が途切れる。それは、あり得ないものを見たかのような呆然とした声だった。

着順掲示板の文字に、視線が吸い込まれる。

『し、失礼いたしました！ 1着は6番パーガトリー！ 勝ち時計は1分55秒1のレコード勝ち！ そしてこれは世界レコードです!! 世界レコードが出ましたあっ!!』

衝撃の結果に音が消える。

一瞬の静寂の後、爆音のような大歓声が沸き起こった。

大歓声が響き渡るターフの上で、静かに手を振るパーガトリー。その顔は無表情で、嬉しさは全く感じられない。

まるで淡々と作業を熟しているような様子であった。

彼女らしくない。

確かにパーガトリーは表情豊かな子ではないが、マルゼンスキーと併走した後は柔らかに微笑んでくれた。

だというのに、この大舞台での勝利に対して笑顔一つ見せないなんて。

その答えは、勝利会見で明らかになった。

カメラのフラッシュが絶え間無く焚かれる中で、パーガトリーは静かに佇んでいる。

『臯月賞勝利おめでとうございます！ 無敗で、更に世界レコードを出しての臯月賞勝利、今のお気持ちをお聞かせ願いますか？』

『はい』

彼女は一度だけ瞳を閉じる。

一呼吸だけ溜めて目を開いた時、その場の空気が一変していた。

『私はとても悲しいです』

『か、悲しいのですか？』

『はい。それと同時に、強い怒りを覚えています』

会見会場が騒めきに包まれる。

これは勝利会見だ。しかも無敗でここまでこれたのは、過去には神バと言われたシンザンしか存在しない。

加えて世界レコードという偉大な記録を打ち立てたというのに、パーガトリーは嬉しさどころか怒りを覚えていると言う。

動揺するな、という方が無理があった。

『い、一体なにに悲しみ、なにに怒っているのでしょうか！』

ざわざわとした小声が止まない中で、黒髪の美人女性記者が威勢良く手を挙げて質問する。

その応対に、パーガトリーは微かに口角を上げた。

『私にはここ最近仲良くなつた友がいます。彼女はレースにおいて無敗を誇り、その埒外の強さから怪物などと呼ばれています』

パーガトリーの言葉に、記者の騒めきが鎮まる。

この場において、いや、皐月賞の出走ウマ娘が決まってからのレース業界において、口を噤むことを強いられてきたその存在。

『貴方はご存知でしょうか？』

『……マルゼンスキーさんですね』

女性記者が口に出した名前に、パーガトリーは柔らかなく微笑む。

『私はこの日のためにトレーニングを重ねてきました。クラシック級のG1レースという大舞台で、最強のウマ娘に勝つ。やっとその願いが叶うと思つていたのに……』

瞬間、パーガトリーの身から凄まじい圧が迸る。

『つまらない規則に水を差されました』

『マルゼンスキーさんは外国生まれのウマ娘という扱いですからね……』

『外国のウマ娘は日本のレースの出走に制限が掛かる？ 随分とまあ巫山戯た制度です。まるで日本のウマ娘は海外では通用しないと、自ら喧伝してるようではないですか？』

タブーに触れる。パーガトリーから発露される赫怒は、全てを焼き尽くすが如き灼熱の炎。

その曠患の炎は、例え画面越しであろうと伝播する熱を宿していた。

『私はこの皐月賞に勝ちました。二位とは大差を付け、世界レコードを叩き出しました。文句を言われる余地の無い勝利を飾りました。……ですが、こう思う方は絶対にいる筈です。「マルゼンスキーがいれば違った」、「マルゼンスキーが走っていれば勝っていた」と』

『そ、それは……』

否定は出来ない。

それ程までに、マルゼンスキーというウマ娘は強過ぎるのだ。

『屈辱です。直接対決をして負けたのであれば言うことはありません。ですが、マルゼンスキーとは走れない。皐月賞でも、日本ダービーでも、菊花賞でも。そして、そのレースに勝ったとしても、私の世代はきつとこう言われ続けるのでしょう。「マルゼンスキーが走っていれば勝っていた」とっ!!』

『『『『『っ!!』』』』』

ビリビリと空間が震撼する怒声。

ただ一人のウマ娘から発せられた圧とは信じ難いこのプレッシャー。

場を覆う空気は完全に、パーガトリーに支配されていた。

『日本のウマ娘が海外で勝てないと思っっているのなら、私はその認識を覆しましょう。ジャパンカップだろうが凱旋門賞だろうが、私が勝ってみせましょう。ですが、それを信じられない方は多いでしょう。たかがクラシック三冠の初戦を勝っただけのウマ娘が、身の丈に合わない大言壮語な夢を口にしてしていると言う方は多いでしょう。ならばこそ、私の実力の証明に、彼女は試金石として相応しい』

日本の皆へ、そして世界に向けて。

パーガトリーは宣言する。

『マルゼンスキーを日本ダービーに出走させなさい。彼女が参戦できないのなら、私にとっては走る価値もありません』

『ま、まさか、出走されないのですか!?!』

『ええ。そんな決断も下せないこの国のレース業界に未来はない。そうなれば私は日本という国に見切りを付けて、世界に飛びます』

その発言に、これまでにない響めきが会場を包み込んだ。

自らの想いを言い切ったパーガトリーは、頭を下げて速やかにその場を去る。

多くの記者が彼女の名を呼び、フラッシュがこれでもかと照らされる映像を、マルゼンスキーは目を見開いて視聴していた。

「パーガトリーちゃん……っ！」

伝わってきた。パーガトリーの想いも、熱意も、覚悟も、心に宿った炎も。

嬉しかった。唯一認めているライバルが、自分の為だけに宣言してくれた言葉が。

悔しかった。どうして自分だけがああ舞台で走れないのかと。

諦めていた。いくら頑張っても未来は変えられないのだと。

だが、パーガトリーは違った。

そつと打ち明けた自分の弱音を真摯に拾い上げ、彼女が日本で掴めるだろう栄光すら賭けてマルゼンスキーとのレースを望んでくれた。

気付いたら、瞳から涙があふれて止まらなかつた。

両手で口許を押さえていても嗚咽を止められず、パーガトリーと一緒に走りたいという願いが感情を震わせる。

「マルゼンスキー」

「トレーナー……」

ずつと側にいたトレーナーが背中を摩ってくれる。人肌の温かさが、徐々にだが乱れた感情を整える。

「すまない、マルゼンスキー」

「えっ？」

トレーナーからの突然の謝罪にマルゼンスキーは顔を上げる。

「私は一度、お前がダービーで走る未来を諦めてしまった。私が不甲斐無いばかりに、お前には辛い思いをさせてしまった」

「……トレーナーがあたしの為に動いてくれていたこと、知ってるわ。だから、謝らないで」

後悔の滲んだ顔で告げられた言葉に、マルゼンスキーは慈愛すら感じる微笑みで返す。

二人とも、もう過去は見えていない。

「私は覚悟を決めたぞ。たとえトレーナーの資格を剥奪されようとも、使えるものは全て使って最後の最後まで足掻くと。お前は どうする、マルゼンスキー？」

「パーガトリーちゃんにあそこまで言わせておいて、あたしが黙っているわけないわ！

絶対に、絶対にダービーに出てやるんだから!!」

己の裡からかつてない熱が湧き上がる。

友達が目の前に聳え立っていた頑強な壁に楔を撃ち込み、その先の道を示してくれ
た。

ならば後は、壁を打ち壊すだけだ。

どんな手を使ってでも、応えなければならぬ。

涙を拭いたマルゼンスキーにはもう、皐月賞に出れなかった悔しきなどない。
日本ダービーに出走する未来しか見えていない。

「マルゼンスキー」

「ん、何かしら？」

「日本ダービーで勝つのはお前だ」

トレーナーの思わぬ言葉に、マルゼンスキーはきよとんと瞬きを繰り返す。

トレーナーの発言の意味と遠回りな気遣いが頭の奥にまで浸透して、マルゼンスキーは吹き出してしまった。

「ぷっ、うふふ、あははははははははははっ！　いくらなんでも気が早すぎるわ！」

「そんなに笑わなくてもいいでしょ……」

「ごめんなさい、つい。でも、そうね」

思いを馳せるように遠くを見ていたマルゼンスキーはくるりと振り返り、澁刺でありながら獽猛な笑みを浮かべた。

「もちのろんよ！　エンジンの違い、見せてあげるわっ！」

◇

皐月賞の後のレース業界は、いや、もっと大きく言うなら日本全体は、とんでもなく荒れた。

予想の百倍は荒れた。

ビックリするぐらい荒れた。

当時の私の方針は二つ。

皐月賞で完膚なきまでに圧勝する。

その後の会見でぶっちゃける。

……凄まじいまでのガバガバ具合には目を瞑ってほしい。コネも権力も無い寒門のウマ娘に出来ることなんて、ほぼ無いに等しいんだ。対マルゼンスキーに隠していた奥の手も披露したが、世界レコードとかマジで棚ぼた。

会見も「こんだけ言えばワンチャンあるでしょ」という気持ちである。なんならストレス発散の割合の方が多かったまでである。普通にムカついてたし。

一応、マルゼンスキーがダービーに出なかつたら日本を出るつもりはあつた。というより、あんだだけ大口叩いたら日本にいられないよね？ 恥ずかしいもん。

言いたいことだけ言って会見をブツチした後、最も早く動いたのはマルゼンスキー本人だった。

マルゼンスキーのチームトレーナーはこの業界でかなりの影響力があるのか、即日で

今回の件に関する会見を開いたのだ。

主にマルゼンスキーが喋ったのだが、これがもうね……心に突き刺さったのよ。国民の。

己の境遇に対する自身の気持ち。

パーガトリーというウマ娘と出会えた喜びと誰かと共に走る楽しさ。

蚊帳の外にされて、不条理に置いていかれる環境。

途中からはもう内容が支離滅裂だったし、なんなら最後の方は泣いてたし。

止めは締めという言葉だった。

『粹順は大外で構いません。他の娘この邪魔も一切しません。賞金もいりません。だから、私を日本ダービーに出させて下さい！』

この魂の叫びを聴き、翌日URAへ詰め寄ったレースファンは五万を優に超えた。

普段はレースに興味の薄かった層も、連日連夜放送される私たちの会見映像を見て関心を注ぎ。

伴って放映される私たちの過去レースを観てファンが増えて。

マルゼンスキーが置かれている境遇を知って激怒した。

この超弩級の荒波に乗って、URAに最前線で抗議したのはシンボリ家だった。次いでメジロ家も動き、全面戦争と相なった。

正直、この時点で想像以上にヤベエことになったと戦々恐々の思いだったが、事態はここから更に急展開を迎える。

端的に言う、UR Aという組織は結構腐っていたらしい。

保守派という悪と、改革派という正義。多分、この見方が正しい筈。

水面下ではドロドロの情報戦が日夜繰り広げられていたようで、私がこれを詳しく知ったのは後にシンポリ家の最高傑作と仲良くなつてからだ。怖えよ、貴族怖えよお。

そして、外圧が高まりに高まったこの瞬間に、改革派は一斉に立ち上がり革命を起こした。密告告発は当たり前、明確な証拠を掴まれていた幹部は首が飛ぶという血で血を洗うが如き抗争が始まったのだ。……まあ、私のウマソウルは頸を斬るのが仕事だったから、このくらいは仕方ないよね？

UR A幹部が逮捕！　なんてニュースを観た時は、寮の同室の子と一緒に……え？

と呟いてしまった。おい、意味深な眼でこつちを見るな。私は悪くない！

やむを得まい、金言を授けよう。

撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ！

とはいえ、私の会見を発端に色んなところに迷惑を掛けたのは事実。撃たれる覚悟がないのは私だった。

幸い、実家の住所まではバレてなくて安心したが、学園にはマスコミやファンが押し

掛け、トレーナーとチームメイトには滅茶苦茶不自由な思いをさせてしまった。

罪悪感がヤバイと誠心誠意頭を下げたところ、一度も笑ったところを見たことがないトレーナーが口角を上げてよくやったとお褒めの言葉をくださった。何事ですか？

え、UR Aは昔から貴族優位に立ち回っていていけ好かないと思っていた？ そう思えばうちのチームは寒門の出の子しかいない。チームメンバーも盛大に祝杯を挙げてくれた。いえーい、くたばれ保守派！

なんて盛り上がったが、世間は盛り上がり過ぎて、UR Aは燃え上がり過ぎた。

皐月賞は四月の中旬。

日本ダービーは五月の下旬。

私を含め、五月に入る頃になってフアンの間でとある不安が脳裏をよぎった。

——こんな状況で日本ダービー開催されるの？

もはやマルゼンスキーが走れるのか、とかそんなレベルじゃない懸念に私は再度焦った。

そこからは世間で湧き上がっている炎を鎮めるためにトレーナーと共に動き回る羽目になった。

皐月賞ウマ娘として、世界レコード保持者として、渦中のウマ娘として、積極的にメディアに出て世に訴えかけた。

——私は人の良心というものを信じています。

——罪の無いただの女の子を、一人だけ不幸にさせるような選択は取らないと。

——だからレースファンの皆は、見守っていてほしい。

——私たちの結末を。

綺麗事で世界は変えられないと聞いたので会場でぶつちやけたのだが、それは時と場合によるのだと知った。綺麗事大事。

ついでにマルゼンスキーが如何に天然でお茶目で可愛い女の子かをプッシュしていたのだが、お願いやめてと真つ赤な顔で本人が懇願してきたので自重した。解せぬ。

そうして、あつという間に一月が経った。

URAの職員の皆様が一体どれほどの私生活を犠牲にしたのかは想像もしたくないが、最悪の事態は回避出来たらしい。

予定通り日本ダービーの出走表が公表され、そして、世間の興奮は最高潮に達した。何故なら、そこには——

東京レース場の、ターフへと続く関係者以外立ち入り禁止の通路で、二人のウマ娘が歩いていた。

「まさか()まで大事に発展するとは思いませんでした」

「事の発端はどこかの誰かさんの会見だったと思うのだけれどね」

「腹が立ったので後先考えずに行動したことは認めます。反省はしていますが、後悔はしてません」

「……そうね、あたしも後悔はしてないわ。恥ずかしい思いはしたけれどね！」

恨みがましいと眼差しで訴えてくるが、そんなやり取りが出来ることにくすくすと笑ってしまう。

刻一刻とレース開始時間が迫る中、歩いている最中にも聞こえる地鳴りのような歓声に苦笑する。

「にしても凄いわねえ、一体どのくらい来てくれたのかしら？」

「URAの発表によると100万人くらい、正直よく分からない、だそうです」

「東京レース場の収容人数って20万人じゃなかったかしら？」

「では外に80万人いるのでしょうか」

「……ふふつ、こんな晴れ舞台は初めてだわ」

感慨深いものがあるのだろう。その声音は、今にも震えそうな感情を隠していた。

なんてことはない雑談をしながら歩いていると、視界の奥に光が覗く。

あの先が私たちにとって、ゴールでありスタートだ。

「ありがとう」

「……今更お礼ですか？」

「うん。今言っておかないと、機会が無くなっちゃうもの」

穏やかな微笑みを浮かべる相手に、私は同じように笑い返す。

「礼は不要ですよ。これは私が望んだ未来でしたから」

「それでも、言いたかったの」

「分かっていきます」

光差し込む入り口の手前。

この先にはきつと、人生で最も輝かしい光景が待っているのだろう。

ここまでの全てを糧に臨む、最高のレースが。

「さあ、行きましょう！ パーガトリーちゃん！」

「ええ、参りましょう。マルゼンスキー」

青く光り煌めくその舞台へ、私たちは遂に踏み出していく。

果たして、勝利の栄光は誰が掴むのか。

——さあ、悔いの無い走りしよう。

私の中のあたしを超える

日本ダービー。

正式名称を東京優駿という、クラシック三冠二つ目の名誉あるG1レース。

今年は何んやかんやあり一時は開催すら危ぶまれたのだが、先日本来の予定通りに出走表が公表された。URA職員の決死の残業地獄に敬礼！ なお、決して私の所為ではない。

そして、今回のダービーだけなのかそれとも今後からシステムを変えるのかは定かではないが、例年のクラシックレースにはない取組がURAより発表されたため、私とトレーナーはその準備中である。

「ト、トレーナー……どうして服をちゃんと着てるのですか!？」

「何故驚く……」

勝負服に身を包んだ私の前には、見知らぬ偉丈夫が立っていた。

ワイシャツにネクタイまで締め、下ろし立ての紺のスーツを着たグラスンの男。

私ことパーガトリーが所属するチームのトレーナーだと思われるが誰ですか貴方は

!

「どこか具合が悪いのですね。今すぐ病院の予約を」

「俺は健康そのものだ」

「そんな、ありえません。トレーナーが服を着るなんて、天変地異の前触れ……」

「張つ倒すぞ」

なんて酷いトレーナーだ！ こっちは真剣に心配しているのに!!

「半裸のnジャケットで行きましょう。どうしてもネクタイを付けたいのであれば首に直巻きなら大丈夫です」

「……はあ」

大きな溜め息を吐くトレーナー。いや、溜め息を吐きたいのはこっちだ。

私のトレーナーが胸筋と腹筋を見せびらかすのが趣味だという事実は既に世間に知れ渡っているのに、こんな大事なイベントで隠していたら風邪を疑われてしまう。

という旨の必死な説得の結果、トレーナーは半裸のnジャケットになった。良かった、これで世界の平和は守られた。

トレーナーから可哀想なナニカを見る眼差しを向けられているが知らんぷりをする
こと数分。

控え室にやって来たURA職員に案内されて、本日のメイン会場に到着した。

用意されているのは18の円形テーブルに座席が二つずつ。

その内の一つに着座した私たちは、集まっているメンバーを簡単に見回して確認。あつ、勝負服を着たマルゼンスキーが此方に小さく手を振っている。微かに見える谷間が良い。

穏やかな所作で手を振り返すと同時、会場の照明が落とされてステージにライトが灯された。

『お待たせいたしました。これより東京優駿、日本ダービーの枠順抽選会を始めます』司会者の発言に会場内から拍手が巻き起こる。

クラシックレースにおいて、今まで枠順は全てコンピュータによって自動的に決定されていた。

それが今回のダービーはまさかの公開抽選会。クリアでクリーンな組織アピールなのか、マルゼンスキーが大外で構わないとか余計なこと言っちゃったからかは分からないがそういうことらしい。

私としては枠順にそこまで拘りはなかった。これまでのレースは大外でも特に問題が無かったから。

だが、マルゼンスキーが相手となると話が変わる。なるべく内枠がいいな。

進行に従って出走ウマ娘の紹介、集まったマスコミに対して一人ずつ簡易な質疑応答

を片付ける。急遽開催されたにも関わらず、よくこんなに人が集まるものだと感心してしまふ。

「月刊トウインクルの乙名史です。パーガトリーさん！ ずばり、日本ダービーでの目標を教えてください！」

外面は完璧な淑女を保ち、内心はぼけーっと待っていたら私の番が来た。

おつ、乙名史さんだ！ 彼女は私一押しの記事さんである。テンション上がると取り繕うことがなくなるはっちゃん具合が面白い人だ。皐月賞の時もマルゼンスキーの名前を出してくれて非常に助かった。素晴らしいですつ！

質問もこう、揚げ足を取ろうとしたものではない礼儀正しいもので助かります。

「当然、1着を取ることです」

「注目されているライバルはどなたでしょうか？」

「全員強敵だと思っておりますが……そんな答えは求められていませんね。なのではつきりと言いましよう。マルゼンスキーです」

私の断言にマスコミからのフラッシュ攻撃が眩しいっ！ 目を閉じてもいいですか？

とはいえ、ここまで散々迷惑掛けちゃったからね。リップサービスくらいはしないと。なお、同期との友情はもうほぼ諦めている。

あははと空笑いを浮かべたい気持ちをぐっと抑えてると、おや……？ 乙名史さんのようすが……！

「素晴らしいですっ!! 本来ではあり得なかつたマルゼンスキーさんの日本ダービー出走! 不可能を可能としたその友情と闘争心に私はとても感動していますっ!!」

「ありがとうございます」

はい、いただきました。ノルマ達成です。

ふるふるると身体を震わせて早口で捲し立てる乙名史さんは今にも昇天しそうだ。美人なだけに残念さが際立つ。

チラリと司会者を見ると軽く手を回している。うん、この状態の乙名史さんに捕まると面倒だもんね、よく分かっているね。

「私の会見を発端に、方々にほうほうご迷惑をお掛けしましたこと、大変申し訳なく思っています。私が返せるのは、レースの結果のみです。どうか、日本ダービーの結末を見届けていただきたいと思います」

「パーガトリーさん、ありがとうございます。では、次にラツキールラさんです」司会者が無理やり切り上げて私への質問タイムが終わった。

そのまま他の出走ウマ娘たちが質問に答えていく。憧れの日本ダービーということもあって、私とマルゼンスキーというバケモノ枠がいようと気概に溢れている子が多

い。ギラギラとした「もはや敵意じゃない？」っていう目線が多数私に突き刺さっているが、これは必要経費だろう。意気消沈されてるよりかは百倍マシだ。

そして、最後の一人。

「マルゼンスキーさん、このレースを走るにあたって、今のお気持ちを教えてください！」

乙名史さんテンション振り切つとるなあ。

「とても嬉しいです。こうしてこの場に立てたこと、関係者全ての方々、レースファンの皆様に感謝しています！」

「素っ——晴らしいです!!」

乙名史さんテンション振り切つとるなあ。あのマルゼンスキーが若干引き攣っているぞ。なんなら私たち全員引いてるまでである。あつ、UR A職員に連れられて退場した。次のメイン企画までに戻れることを祈ろう。

その後マルゼンスキーの質問も終わり、ウマ娘たちはテーブルに戻っていく。

入れ替わりとして、トレーナー達が立ち上がって壇上へと向かっていった。

「では、本日のメイン、日本ダービー枠順抽選会を始めます！」

ルールを説明しよう！

トレーナー達がひたすらジャンケンしてくじを引く順番を決め、ガラスの球体の中で

風でブオンブオン舞っているくじを引いていくだけである。そこまでして公平性を示したいのか……くそめんどくさいぞ。

うちのトレーナーを始め三人一組になってジャンケンしてる。あ、負けた。また負けた。

「13番目になった」

「お疲れ様です」

ここまで徹底していると引く順番なんてどうでもいいからさつきとしてほしい。

トレーナー達があまりの風の威力にくじを掴み損ねる姿を見物しつつ、埋まっていっく稜順を考える。8稜埋まらないかなあ。

「次はチームリギル、東条トレーナー」

マルゼンスキーのチームトレーナーが呼ばれ、ガラスの球体に手を突っ込む。

どんな気持ちで見守るのが正解なのだろうか。麻雀で他人の放銃を祈るような気持ちとはどこか違うんだよなあ。

発言通りに大外を引いてしまうのか。それはそれで気は楽だが、マルゼンスキーなら更なる気合いが入って突如進化するとか普通にあり得るから怖い。これだから天才は。

まあ、これで1稜1番とかだとある意味で面白いのだが。

「マルゼンスキー、1稜1番！」

「ぶっふー！」

フラグ回収早すぎい!!

げっほごっほと咳き込みながら飲んでいたにんじんジュースをなんとか飲み干している、会場が騒然となっていた。何ともまあ……。引いた東条トレーナーも何も悪くないのに顔が青いし、マルゼンスキーも引き攣った曖昧な笑顔である。

「大丈夫か？」

「え？」

トレーナーに声を掛けられて気付く。

会場の注目が私一身に集まっている。私、何かやつちやいました？

「いえ、けっほ……んんっ、ちよつと面白くて」

「面白いか？」

「はい、だつて」

とりあえず、思ったことを言ってみよう。

「会見で泣きながら「大外で構いませんっ！」なんて言ったのに、1枠1番なんて私だつたら恥ずかしくて堪らないなど」

「パーガトリーちゃんっ!!!」

声の方を向くと真っ赤に染まった頬を膨らませたマルゼンスキーがいた。やつぱり

恥ずしかったんだな。

淑やかに微笑んで右手を振ってみると、マルゼンスキーは顔を両手で覆って俯いてしまった。天然で一々反応が可愛いとか反則だと思ふ。

会場内の雰囲気もウマ娘を除いて気持ち和やかになった。そうだよね、あのマルゼンスキーが1枠1番とか冷静に考えるとヤバいよね。

そしてもう一つ、予感がある。

「トレーナー。私、トレーナーが引く番号が分かった気がします」

「頼むから余計なことを言うな」

うちのトレーナーが頭を手で押さえるが、えてしてこういった予感とはよく当たるものなのだ。

結果、日本ダービー当日。

「8枠18番、パーガトリー！」

パドックでのお披露目でトリを飾ることになった。

……やってやろうではないか！



場内ではファンファーレが鳴り響く。

東京レース場では入場規制が掛かるほどの超満員を記録し、せめて同じ空気を体感したいレースファンは場外で携帯機器を覗いていた。

今年の東京優駿——日本ダービーは異様な盛り上がりを迎えている。

『さあ、運命の時です！ 日本ダービーのファンファーレ！ 各ウマ娘、それぞれの想いを胸にゲートへ入ります！』

その最たる理由は主に二人のウマ娘の存在。

『勝つのは世界レコード保持者か、怪物か！ はたまた新たな英雄が現れるのか！』

パーガトリーにマルゼンスキー。

前者は皐月賞の芝2000m世界レコード保持者。

後者はデビュー当時から他を圧倒し畏れられる怪物。

本来このレースでぶつかるとは思わなかった最強と最強が激突し、雌雄を決する時が来た。

交わすべき言葉はもうない。後は走りで語り合うのみ。

マルゼンスキーから温和な雰囲気が消え失せて、獰猛な笑みが浮かぶ。

レースを、走りを楽しみたい。その気持ちは今この瞬間も持っている。今までもレースで手を抜いたことはないし、自分なりに本気で挑んでいた。

だが、違つたのだ。これがマルゼンスキーが全身全霊を懸ける初めてのレースなのだと。

このレースだけは、楽しむを遥かに上回る望みがあるのだから。

——絶対に勝つ

パーガトリーから放たれる裂帛の威圧が刻一刻と強烈になる。

深くなる呼吸と集中で周りから不必要な情報が消えて、意識がレースのみに傾いていく。

全てはこの日のため。友でありライバルであるあの怪物を倒すため。

紅き双眸に炎が宿り、心が闘志で燃え上がる。

——勝つのは私だ

両端から噴き上がる熱気に全てウマ娘たちの鼓動が速くなる。

もうすぐ、あと少しで歴史に残るレースが始まる。

五月蠅いほどに響いていた歓声が鳴り止み、一瞬の静寂が訪れて——
ボタンツ、という音と共にゲートが開かれた。

『スタートしました！』

——炎の呼吸

【壱ノ型・不知火】

激烈な踏み込みの音を残して、パーガトリーがスタートを切った。

大外である不利を容易く塗り潰すロケットスタート。他者の追隨を許さないその速さで、一気に前へと躍り出る。

今までのレースであればこれでパーガトリーがハナに立ち、そのまま他を置いて逃げ続ける展開が常であった。

だが、このレースではパーガトリーはハナを譲った。

『先頭はマルゼンスキー！ 大外パーガトリーは第一コーナーに突入する時点で二番手に躍り出ました！』

実況に観客の歓声が強くなる中、パーガトリーは僅かに口角を上げてマルゼンスキーの後ろについた。

(さあ、付いてきてみなさい！)

(お望み通り！)

逃げる二人は序盤の序盤から飛ばしていく。

彼女たちが普通のウマ娘だったら、他の出走者は2400mという中距離を走りきるつもりがあるのかと己のペースを保つだろう。

しかし、先頭で鎬を削るのは時代が生んだ二人の化け物。

このまま逃げるのを見逃せば、第4コーナー時点で決して追いつけない距離を空けら

れる。

だからといって無理についていけば、スタミナを食い潰されて勝負の舞台にすら上がれない。

必滅の二択を突き付けられるレース展開。

それでもこの場に、勝ちを諦めているウマ娘などいない。

例え怪物であろうと、世界レコード保持者だろうと、勝つつもりでこのレースに挑んでいるのだ。

ならば、取れる選択は一つのみ。

『なっ!? こゝ、これは!』

『ほぼ全員が逃げる二人に食らい付こうとペースを上げていますね』

殺人的な超ハイペース。

後にそう評価される日本ダービーは、怒涛の勢いで幕を開けた。

先頭にマルゼンスキー。その後ろ、ぴったりと張り付くパーガトリー。三バ身ほど離れて後続の十六人が続く。

パーガトリーは後ろを一度だけ振り返り、視線を前に向けて笑みを深くする。

伝わってきた。絶対に逃さないという強い意志が。背後から身を焦がす熱気は、パーガトリーに更なる速さを与える。

それはマルゼンスキーも同じこと。

「さいつこうね!!」

マルゼンスキーがギアを上げて加速する。

只でさえ尋常でない速さで逃げているにも関わらず、そんな無茶無謀を平然と実行するマルゼンスキーはやはり怪物。

しかし、そんなことはもう知っているのだ。

『マルゼンスキー更に速度を上げていきます。それに追隨するパーガトリー。速い、あまりにも速い！ 恐ろしいまでのハイペースでレースが推移しています!』

『徐々にですが後続を引き離していますね。あの二人に最後まで付いていけるか、それがこのレースに勝つ最低条件になるでしょう』

『1000mの通過タイムは……5、57秒9!？ 例年のダービーより2秒近く速いレース展開です!』

——こんなペースで走っていたら持つわけがない!

そんな声無き叫びを後ろに流しながら、マルゼンスキーとパーガトリーは赤の軌跡を残してバックストレッチを駆け抜けていく。

第3コーナーに突入して、マルゼンスキーは背後からビリビリと感じる圧が強まっているのを感じ取る。

（やっぱりパーガトリーちゃんは凄いつ！ 併走の時よりもずっと速いの、引き離せる気がしない！）

マルゼンスキーは逃げウマ娘だと認識されているが、当人はそうは思っていない。これまでただ走りたいように走っていたら、いつも先頭を走っていただけなのだ。

だからといって、余裕を持って走っているわけでは無い。

このままでは負ける。マルゼンスキーはトレーナーから教えられたことを思い出した。

「領域？」

「ええ、パーガトリーが皐月賞の最終直線で見せたあの超加速の正体、だと思うわ」
領域。

ウマ娘の中でも一握りもない選ばれた存在だけが至れる至高の境地。日本においては永らく眉唾ものだと言われてきたが、数年前に現れたウマ娘——神バことシンザンがその実態を初めて言葉にしたのだ。

曰く、近年各国において名を残してきたウマ娘の殆どはその境地に至っているという。

その話を聞いて、マルゼンスキーは笑った。

「心配しないで。私なら大丈夫よ」

トレーナーはその言葉を信じてその後何か言うことは無かった。

マルゼンスキーは確信していたのだ。

不可能を可能にして友が用意してくれたこの大舞台で、己が限界を超えられない筈がないと。

ならば、これは必然だったのだ。

『第3コーナーを回って第4コーナーに突入!! 先頭は変わらずマルゼンスキーだが、パーガトリーも全く衰えない! 後続は大きく引き離されてもう厳しいか! やはり勝負はこの二人の一騎打ちなのか!!』

ホームストレッチに向かう中で、パーガトリーが背後から外れてマルゼンスキーの隣へ迫る。

二人とも分かっていた。第4コーナーを回ってからがこのレースの本番だと。

コーナーが終わると同時、横一直線に並んだ二人。

一瞬の視線の交錯。

『あはっ!』

凄絶な笑みを浮かべて、マルゼンスキーとパーガトリーはゴールへと向き直った。

目の前にあつた壁がひび割れる。

視界が開いていき、全能感が身体を浸す。

——これが、あたしの

——全集中・炎の呼吸

互いの瞳から漏れる煌めき以外の色が消える。

風の音も、脚音も、歓声も、走るのに不必要な全てが世界から消え去る。

——フルスロットルよ!!

——奥義!!

万力の力で踏み込んだ脚で地面が割れる。

瞬間、二人の脚元が爆ぜた。

【紅焰ギア／LP1211—M】

【玖ノ型・煉獄】

ドオンツ!! という爆音と共に、二人は領域に踏み込んだ。

『なっ!!? なんだこの加速は!?!』

『か、怪物……!』

啞然とした実況と解説を置き去りに、マルゼンスキーとパーガトリーは最終直線を神速の域で走り行く。

会場の盛り上がりは最高潮を超えて、狂気に満ちているかのような大歓声が鳴り響いている。あり得ないレベルで展開されるレースに、観ている者の興奮は止まるところを

知らない。

『マルゼンスキーにパーガトリー！ 走る、走る、走り抜ける!! ゴールに向かってかっ
て見たことがない速さで駆け抜ける!! まさに怪物！ 時代が産んだ麒麟児の激突！
並んで、並んで、……かわせない！ どちらも一步も譲らないデッドヒート!! どち
らが勝つのか全く分からない！ 東京が二人への大歓声で揺れているぞ!!』

耳が壊れるような爆音の中、ゴールに向かう二人には互いの存在だけが其処にあつ
た。

気持ちが良い。

友と一緒に、ライバルと一緒に、命すら削るような走りがこんなにも気持ちが良いと
は。

ずっとこのまま、永遠に走っていたい。

でも、一瞬だった。

気付けば、ゴールが目の前にあつた。あと少しで二人はゴールを駆け抜けるだろう。
もうレースは終わってしまった。

ならば、勝敗を付けなければならぬ。

『あああああああああああッッ!!』

絶叫にも近い声を上げる二人は全速力で地を駆ける。

本当の全力全開を、全身全霊を出し切って走り抜ける。
だが、それでも。

『互いに絶対に先は譲らないと走る!! 異次元の速さは残像すら見えるかの如き神速!!
どっちだ、どっちが勝つんだ!? ゴールを先に駆け抜けるのはマルゼンスキーか、
パーガトリーか!』

——差が広がらない!!

驚愕と納得。

それでこそ唯一の宿敵。

そして、この展開になることを、パーガトリーは信じていた。

マルゼンスキーなら必ず、己の限界を踏み越えて、瞬く間に進化すると。

だからこそ、決めていた。

決着を、最後の一步に賭けることを。

パーガトリーは息を吸う。

筋肉の繊維一本一本、血管の一筋一筋まで、呼吸をもって空気を巡らせる。

力を脚だけに溜めて、溜めて。

一息に爆発させる。

「っ!!!」

空気を切り裂く炎雷が迸った。

『そして今、二人並んでゴールツ!!! どっちだ、どっちが勝ったのか!? 私の目には同時にしか見えなかったが!!』

『私にもはつきりとは……どちらかが体勢有利とも見えませんでした』

大歓声が鳴り響く東京レース場。

減速した後に倒れ込むように地に伏したパーガトリーとマルゼンスキーは、息も絶え絶えに着順掲示板へと視線を向ける。

後続もゴールも続々と駆け抜けて、全ての出走者がターフの上で止まった。

気付けば、レース場は静寂に包まれていた。

誰もが息を飲んで掲示板を見つめている。一番上に光る番号は1番か、18番か。

最後のウマ娘がゴールを抜けて、着順掲示板には3着以下の結果が表示された。

1着と2着の部分に表示が出ない。『写真』の文字が点灯する。

『これは……写真判定です。1着と2着の結果は写真判定となりました。一体どちらが勝ったのか!』

実況の言葉に会場は微かに騒めく。

各々が自分が応援したウマ娘の勝利を信じて、両手を合わせて祈るように待っている。

各ウマ娘の息を整える音だけが木霊する。

永遠とも感じる時間が流れて、一分近く。

遂に結果が点灯し、ワアツツツ!! と会場が沸いた。

一番上には、『18』の文字が輝いていた。

『着順が確定しました!・1着は18番、パーガトリー!! 勝ち時計は2分20秒4!!

またしても世界レコードです!! なんとというウマ娘か、パーガトリー!! 最強の怪物を破り、世界レコードを二度叩き出し、無敗での二冠を達成しました!!』

歓声という名の絶叫が観客から爆発する。世紀の瞬間に立ち会えた喜びを全身で表すかのような轟きは、日本全体に広がっていた。

「ハア、ハア……ハア……」

現実を認識したパーガトリーは伏せていた身体に鞭を打って、ゆらゆらと立ち上がる。

観客の方を向いて、二本の脚でしっかりと地面を踏み締めた。

そして、

勝利を、栄光を掴み取った。

初めて見るパーガトリーのパフォーマン스에レース場は静まり、次の瞬間には天を劈くような大歓声が東京を揺るがしたのだった。

◇

勝つつ——たあああああ……

全て出し切った。気力なんてもう一雫も残っていない。

今にも座り込んでしまいそうだが、ここに来たら根性で立ち続けようじゃないか。

てかうるさつ！ 何これ、走ってた時もこんな感じだったの？ 音とか消え去つてた

から分らないわ。

「うぐつ、うう……」

よく聞こえるようになったウマ耳を畳もうとしたら、すぐ側で鼻を嚙る音が聞こえた。

「……終わっちゃった……ダービー、終わっちゃった……」

視線を向けると着順掲示板を見ながらマルゼンスキーが呆然としており、小声で何かを呟いていた。

声を掛けようかと足を踏み出したその時だった。

「うああああああああんっ!!! 終わっちゃった、終わっちゃったよお……っ!!!」
まさかのギャン泣き!?

予想外の反応に面食らうも、マルゼンスキーの発言の意味を理解して苦笑してしま
う。

「もうそんなに泣かないでください。可愛い顔が台無しですよ」

「だって、だってえ、楽しかったのに……ずっと、ずっと走っていたのに……ぐ
すっ」

「……まったく、貴方らしいですね」

負けたことではなく、レースが終わってしまったことに泣くとは。

マルゼンスキーがこのレースに賭けていた想いはきつと、誰にも理解出来ないだろ
う。その立場にいたのは日本において、彼女しかいないのだから。

手を貸してマルゼンスキーを立ち上がらせる。

「ううっ、あつ、パーガトリーちゃん。おめでどう!」

「ありがとうございます」

「あーあ、負けちゃった。絶対に勝ちたかったのに、負けちゃった……えぐっ、ぐすっ」
「情緒が不安定過ぎますね……」

よしよしと抱き締めてマルゼンスキーの背中を撫でる。その光景を見て観客が更に

叫ぶが、もう何やっても歓声が大きくなりそうだから気にしない。

「勝てると思っただのになあ」

「私こそ驚きです。最後の瞬間まで差は無かったんですから」

マルゼンスキーの規格外さには本当にビックリする。全集中・常中を身に付けてこの結果なのだ。これで純粹培養の現地ウマ娘なのだから才能とは残酷だと心底思う。

今ならネタで……かわしきれない!? 玖ノ型・煉獄を使っているのに! マルゼンスキー、なんて強さだ!?! と述懐できるが、走ってる時にそんな思考の余地は無かった。

ただただ走ることが気持ち良かった。この思考に塗りつぶされていたら、私は負けていたかもしれない。

マルゼンスキーもそう思っていたのだろう。

赤く腫らした目で此方を見上げてきた。

「最後のあれって、やっぱり狙ってたの?」

「ええ。奥の手というのは、取っておくものなんですよ」

「はあ……。領域が奥の手じゃ無かったなんて、パーガトリーちゃんは凄いなあ」

あれは雷の呼吸の教えの一つだ。

自分の身体の寸法や筋肉の形を全て認識した上で、呼吸を巡らせることで発揮できる刹那的超加速。貪欲に力を求めた果てに得た力である。

皐月賞で切り札を見せたのはこの状況を作り出すため。マルゼンスキーの全身全霊を真つ向から捻じ伏せるための布石。

切り札は先に見せるな。見せるならさらに奥の手を持って、つてね。

「ちよつと、二人だけで盛り上がらないでくれる？」

「ラツキールーラ」

「はあ、全く。とんでもない世代に生まれちゃったよホント」

3着に入ったラツキールーラを先頭に、呆れながらも笑顔で祝福の拍手をしてくれる同期のみんな。

「でも、後悔はないよ。これが正解だったんだね。私も、胸を張ってダービーを走り切れた」

「その節はご迷惑をお掛けしました」

「謝らないですよ。謝るならこつち。二人とも、冷たくしてごめんね」

「……ふふつ、ではこれでおあいこですね」

「うん、そうしよう」

そうして、みんなで手を振りながらレース場を後にする。

関係者用通路で未だに聞こえる歓声に苦笑して、控え室への道を歩いた。

「改めて。パーガトリー、おめでとう。あんたマジで凄いね」

「ふふん、そうでしょ！ パーガトリーちゃんは凄いだから！」

「なんであんたが自慢げなのよ」

鼻息荒く胸を張るマルゼンスキーにラツキールーラが呆れていた。

良かった、諦めていた同期との友情が芽生え始めたことにかなり安堵する。

「にしても、パーガトリーはなんでそんなに速いわけ？ 名門の血を引いてるわけじゃないんでしょ？」

「そうですね。どうやって速くなったかは企業秘密ですが、何故かはレース以外で客観的に証明出来ませよ」

「へえ、何それ。今度教えてよ」

「あたしも！ あたしにも教えてよ！」

「はいはい、分かりましたよ」

仔犬かな？ という感じで戯れついてくるマルゼンスキーを宥めて、私たちは控え室へとたどり着く。

「さあてと、んじやウイニングライブ頑張りますか」

「そうね、頑張りましょ」

乗り気な二人を見て、私は改めて思う。

やっぱりウイニングライブはもつとウマ娘へ労りの精神を持つべき行事だと。キツ

イんだよ、色々と……。

後日、トレセン学園の教室の一つで、パンツ！ ドバアンツツツ!! という爆発音が鳴り響いた。

それを見たウマ娘たちに、お前はウマ娘ではない別のナニカだとヤベエ奴を見る目で言われて、大層不服そうな顔をしたダービーウマ娘がいたそうだ。

夢中になれるモノが いつか君をすげえやつにするんだ

その日見た光景を、今でも鮮明に覚えている。

普段は寡黙という言葉が似合う父親が、珍しく興奮した様子で笑顔を浮かべていた。

「今度の日本ダービーはきつと歴史に残るレースになる。だから見に行こうー」

幼かった自分は日本ダービーが何かもよく分かっていたが、大好きな父親とお出かけができることに喜んでいた。

約束した休日。

早朝も早朝。寝ぼけ眼をこすつて向かった先には人、人、ウマ娘、人。世界にはこんなにも人が一杯いるのかとびつくり仰天した記憶がある。

その群衆を父親に抱っこされながら掻き分けて進み、入場券が買えたとはしゃぐ父親につられて笑い、レース場の観客席の最前列にまで乗り込んでいった。

今だから分かるが、当時の父親は運が神がかっていたのだろう。あの伝説の日本ダービーで最前列を確保するなど、並大抵の幸運では掴み取れなかったのだから。

なぜあんなにも必死だったのかと大きくなってから聞いたなら、ウマ娘である自分にど

うしても生で見せたかったと語られた。父親の自分への愛がとても感じられたし、そのお陰で夢を抱けたのだから心の底から感謝した。

これから観るのは日本ダービーというレースだと父親から説明を受けていた。

レースというものはテレビで観たことがあるから知っている。自分と同じウマ娘がゴールを目指して走る競技だ。

知識としてはあるが、特段思い入れがあるわけではなかった。ウマ娘なので走ることは好きだが、レースに対して強い憧れを抱いたことはなかった。

観客席の最前列に着いてまず思ったことは「うるさい！」だった。

雑音というレベルを遥かに超えた騒ぎ声に堪らず耳を倒して我慢していたが、正直この時点で帰りたいと思っていたことは父親には内緒にしている。

一体何が始まるのだろうかときよろきよろし始めた頃、これまでの歓声は序の口と言わんばかりの大音声が世界に轟いた。耳が壊れたと思った。

反射的に父親を見ると、父親の視線の先には赤い服を着たウマ娘がいた。周りの叫び声から、名前はマルゼンスキーだと分かった。

彼女の退場から続々とウマ娘が姿を見せたが、そこからは少しだけ落ち着いていた。

なぜあのウマ娘だけ声が大きかったのだろうかと疑問に思い始めた頃、またしても爆音のような大歓声が轟いた。耳が壊れたと思った。

学習していたので目の前のステージに目を向けたところ、黒い服に炎のような白い羽織を着たウマ娘が登場していた。

そのウマ娘が父親の目的だったのか、周りと一緒にになって名前を叫んでいる。パーガトリーと言うらしい。

何が何だかわけが分からなかったが、とりあえず応援するウマ娘が決まった瞬間だった。

出走者のお披露目が終わって、ようやく本番のレースが始まるらしい。

先程ステージに現れたウマ娘たちがゲートに入っていくのを見守る中で、突如として空気が変わったことを感じ取る。

ゾワリと身体が震えた。その感覚が「戦慄」だと知らなかったが、誰が原因かはウマ娘の本能で理解できた。

パーガトリーとマルゼンスキー。

あの二人はなにかおかしい。

当時の自分ではそうとしか表現出来なかったが、今言うのならこうだろう——格が違う。

その直感は当たっていた。

ゲートが開いてレースがスタートする。大歓声が鳴り響く中、その二人が先頭で走っ

ていた。

速かった。自分とは比べることすら烏滸がましい程に速かった。気付けば周りの雑音が耳に入らないくらい夢中になっていた。

あつという間に向こう側に行つて、あつという間に目の前に戻つてきた。

ゴールまでの最後の直線。

パーガトリーとマルゼンスキーが横に並んだ瞬間、世界が変わつた。

踏み込んだ足は音を置き去りにし、赤の軌跡を残して目の前を駆け抜ける。

離れているはずなのに、明確に伝わってきた。

熱が。

炎が。

闘志が。

魂の叫びが。

自分の中に眠っていた何かが叩き起こされる感覚。

心が、感情が揺さぶられて、大声を出さずにはいられなかった。

瞬きの間に二人はゴールしていて、集まっていた人は固唾を飲んで掲示板を見詰めている。観ていただけなのに、自分の心臓がドクンドクンと鳴っていた。

パーガトリーは18、マルゼンスキーは1。

レースよりも長い時間が流れたように感じた頃、一番上に番号が点灯する。

——18

「つつつ!!!」

見た瞬間、父親と一緒に叫んでいた。何を叫んだのかは覚えていない。とにかく心のままに声を出していた。

そして、憧憬を見た。

パーガトリーが天を掴み取る姿。

その日見た光景を、今でも鮮明に覚えている。

あんなふうになりたい。

あの人みたいに、このレースを走ってみたい。

あの人みたいに、みんなに夢を、希望を、勇気を、感動を与えられるウマ娘になりたい。

パーガトリーに憧れた。

パーガトリーが成し遂げた偉業に心が震えた。

無敗の三冠ウマ娘になりたいと思った。

その日から、夢に向かって走っていくことを決めた。

元トレーナーだった父親に指導してもらい、厳しいトレーニングにも泣き言一つ言わ

ず取り組み、努力の甲斐あって中央トレセン学園に入学することができた。

校門の前で校舎を見上げて、決意の一步目を踏み出す。

あの日見た憧憬の姿を、自分の手で掴み取る為。

そうして一人のウマ娘——ミホノブルボンは、トウインクル・シリーズに名乗りを上げたのだった。

◇

今年の日本ダービーも、最高潮の盛り上がりを迎えていた。

『逃げる逃げるミホノブルボンが逃げる！ 残り400！ ここからはミホノブルボン未知の世界!! 現在2位のライスシャワーとの差は4バ身！ 先を行くミホノブルボンを差そうと加速するが中々距離が縮まらない!! 残り200！ おそらく勝てるだろう！ おそらく勝てるだろう！ ミホノブルボン！ 2400を遂に逃げ切りゴールツ!! 6戦6勝！ 去年のトウカイテイオーに続いて、またもや無敗の二冠達成であります!!』

東京レース場が大歓声が響き渡る。

ミホノブルボン。

寒門出のウマ娘で本来の脚質はスプリンターであるにも関わらず、クラシック三冠を夢見て挑戦を続け、遂には無敗での二冠を達成した。

まるでドラマのようなシンデレラストーリーを駆け上がるミホノブルボンの人気は絶頂を迎えており、彼女を讚える歓声が絶え間無く鳴り響いている。

レースファンはミホノブルボンに夢を見ていた。

去年のトウカイテイオーが故障で成し遂げられなかった三冠の夢を。

皇帝シンボリドルフ以来の無敗の三冠を。

「ミホノブルボンさん！ 日本ダービー勝利、おめでとうございます!! 無敗での二冠達成、今のお気持ちをお教えしてください」

「はい。とても嬉しいです」

表情一つ変えずにそう言い切るミホノブルボンに、記者は慣れた様子で矢継ぎ早に質問を続ける。

ミホノブルボンは正確なラップタイムを刻む逃げと、喜怒哀楽を見せない無機質な表情などから「サイボーグ」と呼ばれ親しまれていた。取材に対しても同様の対応であるため、この時に至るまでに記者も世間も扱い方は心得ていたのだ。

その後も順調に勝利会見は進み、終了時間が迫ってきた。

「では、ミホノブルボンさん。菊花賞への意気込みをお願いします」

恐らくこれが最後の質問になるだろう。

記者一同がそう思いながら、ミホノブルボンの言葉を一字一句聞き逃さないように準備していた。

そんな心情など露知らず、ミホノブルボンは淡々と口を開く。

「はい。私は、このままの成長では菊花賞で100%負けると師匠に言われています。なので、この五ヶ月でより一層のトレーニングに励み、無敗での三冠を手にしたいと思っています」

ミホノブルボンのこの発言に、記者は漏れなく固まった。

聞き間違いか？

それとも自分の耳がおかしくなったのか？

全員がそう思ったので一瞬前の記憶を思い返してみたが、結論は変わらなかった。

今、ミホノブルボンは、堂々とした敗北宣言をした。

厳密に言えば宣言ではなくただの予想なのだが、このような場で走ってもいないレースの敗北を語るウマ娘は過去に存在しない。

この状況で何を言えば良いのだろうか……？

その反応にミホノブルボンは無表情のまま小首を傾げて、後ろで見守っていた世界的にも有名になったトレーナーは頭を手で押さえていた。

「月刊トウインクルの乙名史です！ 負けると予想していることは、既にライバルとなるウマ娘を把握しているということでしょうか？」

何とも言えない微妙な空気が流れる中で、いち早く動揺から立ち直った黒髪美人女性記者が威勢良く手を挙げる。

ミホノブルボンは素早くそちらへと視線を走らせた。

「はい。その通りです」

「どなたが立ち塞がるのか、教えていただくことはできますか？」

「はい。ライスシャワーです」

飛び出た名前に記者たちからは騒めきが生まれた。

ライスシャワー。

今回の日本ダービーでも2着と実力を伸ばしているが、未だに重賞での勝利がないウマ娘だ。この時点ではノーマークと言うのは過言だが、ミホノブルボンのライバルたり得ると思っていた者はごく僅かだろう。

もはや会見時間など気にしていられなくなった記者は、ここぞとばかりに前のめりになった。

「なぜライスシャワーなのでしょうか？」

「はい。彼女は生粋のステイヤーだと師匠が言っていました。まだ原石とのことです

が、磨かれればあのメジロマックイーンをも超える可能性があると言っていました」

「げ、現役最強のステイヤーと名高いあのメジロマックイーンをですか?」

「はい。師匠はそう言っていました」

新たに放り込まれた爆弾に会見会場が騒がしくなる中、一人の記者が恐る恐る手を挙げた。

「あのー、先程から仰っている師匠とはどなたのことなのでしょう? 確かミホノブルボンさんは、トレーナーのことをマスターとお呼びしていたと思うのですが……」

実は誰もが思っていたが聞きそびれていた内容に、ミホノブルボンへ視線が集中する。

この質問に対して、ミホノブルボンのウマ耳がぴくんと跳ねた。

言っているのか自分で判断出来なかったのだろう。これまでのように即答せずに、そのまま背後を振り返ってトレーナーを見詰めていた。

「……構わん」

「了解しました」

ぶっきらぼうに告げられた許可を得て、ミホノブルボンは前を向く。

「師匠の名前はパーガトリーと申します」

「「「「パ、パーガトリー!!」「」」」」

「はい」

「ここ一番の驚愕を露わにした記者に対して、あくまで淡々とした態度でミホノブルボンは繰り返した。」

「私の憧れであり、『原点にして頂点』、『ワールドブレイカー』などの異名を持つパーガトリーが、私の師匠です」

◇

「ミホノブルボン。私が今、何を思っているのか分かりますか？」

「いいえ。分かりません」

「ミホノブルボン。私のことは内緒にしておいてほしいと言ったこと、覚えていますか？」

「はい。覚えています」

「では、なぜ日本ダービーの勝利会見で私の名前を出したのですか？」

「はい。マスターの許可があつたからです」

「そうですか。最後に、結論として誰が悪いと思えますか？」

「はい。分かりません」

こやつめ、ハハハ。

「いーたーいーでーすーいーいー」

ソファアに座っているミホノブルボンのこめかみに後ろからぐりぐりと軽く拳を当てて、私は小さく溜め息を吐いた。

傍にあるテーブルには乱雑に開かれたレース情報誌が多数あり、内容は先日の出来事がまとめられたものばかりだ。ミホノブルボン、日本ダービー、パーガトリー、最強帰還、師弟関係、後継者などなど、水を得た魚のように各社が好き放題書いている。だから嫌だったのに。

とりあえずぐりぐり攻撃を止めてミホノブルボンの隣に座ると、感情の薄い大きな瞳がまっすぐとこちらを見詰めてきた。

穢れを知らない純真無垢さに負けてミホノブルボンの頭を撫でてあげると、むふーっ、と尻尾をぶんぶんと振りながら、僅かに表情を和らげて身体ごと寄せてくる。犬みたいで可愛いんだよなあ、この子。

ミホノブルボンとの出会いは割と最近だ。

ここ数年はたまに帰国するが、基本的にはマルゼンスキーと一緒に海外レースを荒らし回っていた。

アメリカもヨーロッパも堪能したし、次は何処に行こうかなんて話していた頃に、ト

レーナーから連絡があったのだ。

「おや珍しい、と思いつながら話を聞いたところ、才能があるわけではないが、とある子が私に憧れて無敗の三冠を目指している。ギリギリで難しそうだから手を貸してほしい。」というものだった。

「散々好き勝手やらせてもらっている身としては断る理由が無く、マルゼンスキーも「チヨベリグじゃない！」と快諾してくれたので即日で帰国したのだ。

ちなみに「チヨベリグ」とは「超ベリーグッド」の意味で、私が知る限りマルゼンスキーは五年以上使い続けている最新鋭の流行語である。

閑話休題。

トレセン学園に戻って紹介されたのがこのミホノブルボン。

身体付きはマルゼンスキー並みに成熟した魅惑ボディーのだが、しばらく一緒にいて分かったことは二つ。

心は幼女！ 性格は犬！ その名はミホノブルボン!!

……母性が、無いはずの母性がくすぐられるうっ！

つい過保護になってしまふような気持ちを抑えておよそ一ヶ月弱。トレーニングを見守ってきたが、なるほど、トレーナーの懸念もよく分かる。

集中して目を凝らすと、ミホノブルボンの肌を超えた内部が透き通って視えてきた。

筋肉、骨、内臓を見透かして、その人のあらゆる肉體情報を把握できるこの力。通称は確か透き通る世界、だったかな？ いやー、便利だわホント。

修験者みたいな修行の果てによりやく修得したけど、その甲斐はあったというものだ。

……まあ、元はと言えばマルゼンスキーが全ての原因なんだけど。

なんであの子は全集中の呼吸の片鱗を独力で掴めちゃうの？

どうしてもパーガトリーちゃんに勝ちたかったの！ じゃないのマジで。

クラシック期最後のレースだった有《font:ul40》馬《font》記念で、全集中の呼吸を織り交ぜたマルゼンスキーの領域に力負けした時は、流石の私も冷静さを欠こうとしていた。

だからといって、一度知ってしまったマルゼンスキーをそのまま放置も出来ない。未完成の全集中の呼吸など危険極まりないからやむを得ず伝授したところ、まあ、……うん。推して知るべしってやつだね。究極体が超究極体になった時のあの絶望感よ。おめえ、まだ上があんのか……！

春のシニア三冠の天皇賞春は距離適性の差でなんとか取れたが、大阪杯と二度目の宝塚記念は負けたよそりゃ。

足りない、速さが足りないっ!!

海外遠征の決定打になったよね、うん。名目は凱旋門賞取りに行きますだったけど、ぶっちゃけ修行が主目的だった。標高5,000m級とかもう登りたくない。

とまあ一先ず思い出は他所に追いやって、改めてミホノブルボンの身体を観察する。脚質はスプリンター。短距離なら天性の才があるが、マイル以上となると出力が落ちるだろう。外付けでスタミナを増設しなければ中距離ですら勝負にならないところを、トレーナーの手腕でここまでやってきた、といったところだ。

大分身体に負荷が掛かってるなあ。一旦小休止を挟まないと壊れる可能性大である。

しかし、目標は日本ダービーより更に600mも長い菊花賞。

なんだかんだウマ娘想いなトレーナーは、ミホノブルボンの熱意を汲んでノータイムで坂路ダツシユを命じることだろう。

だが、壊れるほどの練習はさせない。なのに、ミホノブルボンは現状壊れかけではないが、その一歩手前ぐらいには迫っている。

分かり難いんだよなあ、この子。

表情や態度は勿論のこと、日常生活やトレーニング中ですら己の不調を他人が察せないレベルで抑え込めるのだ。この短期間でよく分かった。

総評として、根性はある。身体もかなり頑丈。マイル以上の才能はあまり無かったが、中距離であれば日本ダービーを制するスタミナが増設し終わっている。ただし肉体

としては限界に近い、と。

うーん、難しい。

しかも同期に才能あるステイヤーがいるとなれば更に厳しい。

「パーガトリー」

「トレーナー、私とミホノブルボンに三ヶ月ください。それでも可能性は三割を切るでしようが」

「頼めるか？」

「はい」

ミホノブルボンの頭から手を離すと、露骨にしよぼんとするウマ耳とウマ尻尾が目に入った。

……………。

わしやわしやわしやわしや。

「むふーっ」

「……………パーガトリー」

「はっ!？」

いけない、自然と手が動いていた。

だって可愛いんだもん。もはや遠い記憶だが、蟲柱様の継子ちゃんを思い出す。外見

も在り方もあまり似てはいないんだけど、どうしてか連想してしまう。結局お人形みたいな作り笑顔しか見ることはできなかったが、あの子はちゃんと心のままに生きることができたのだろうか。

……らしくなくセンチメンタルになってしまった。

こほんっ。

「では、明日から頑張りますよ！」

「今日からではないのか？」

「当然です。今日はやる必要があります」

夕焼けが眩しい時間帯。

がちやり、とチーム室の扉が開いた。

「パーガトリー様、買い出し終わりました！」

「今日はブルボンちゃんのお祝いと言ったら、にんじんがタダになったんですよ！」

「パーガトリーお姉様！ 私料理が得意なので、ブルボン先輩のために頑張りますね！」

「皆さん、ありがとうございます」

後輩であるチームメンバーの子たちが意気揚々と戻ってきた。

何人かわたしに様付けしている子がいるが、数年前からそう呼ばれ始めているのはや何も言うまい。マルゼンスキーも私と一緒にいるとき限定で様付けされることが

あるが、基本的にはそう呼ばれないんだよなあ。不思議。

そんなわけでミホノブルボンとトレーナーを隔離した後、キッチンを占領した私たちはエプロンを付けて準備完了。

「今夜はミホノブルボンの日本ダービー勝利を祝う宴です。抜かりなく用意しましょう」

「「おーっ！」」

ふふん、私にも女子力があることを証明してやろうではないか！

一人だけ除け者にされたと拗ねる幼女を必死に宥めた翌日から、私はミホノブルボンへ本格的な修行を開始した。

初手必殺として同期にも心から引かれた爆音伴う宴会芸（大）を披露したところ、ミホノブルボンはエラーを起こしてフリーズした。

尊敬と信頼が心地良い無垢な眼差しに怯えが映ったのが私の心に致命傷を与えてきたが、ミホノブルボンが本当に勝ちたいのであればその覚悟を問わなければならない。

無敗の三冠とは、そう易々と取れる称号ではないのだから。果たして、ミホノブルボンの瞳には決意が灯っていた。

「オペレーション」「三冠獲得」におけるラストミッション「全集中の呼吸の修得」。オー

ダー承りました、師匠」

ラ、ラストミツションなんて言葉を、まさか現実で聴けるなんて……!?

おっ—おお、おっ—おお、おっ—おお、アーアーアー♪ と、頭の中の合唱団が

BGMを奏で始めて私のテンションは上がった。

でも、そのオペレーションにおける本当のラストミツションは菊花賞で勝つことでは？ なんて無粋な感想を抱いたりもしたが、ミホノブルボンがやる気になってくれたのであれば話は早い。

日本ダービーまでは基本的にトレーナーに任せていたが、ここからは私のターン！

透き通る世界を利用したマルゼンスキーもイチオシのマツサージでミホノブルボンの身体から疲労を抜き取った後、夏合宿期間は富士の山に籠ることにした。免許はすでに取つてあるのだ。マルゼンスキーと一緒に「だがあえて加速するう!!」ごっつこで遊んだのは良い思い出である。良い子は絶対に真似しないように。

まずは空気の薄い環境で、深くゆつくりと息を吸い、長く息を吐くことだけを命じた。

フィクションでも何でもなく、血液中の酸素濃度を上げる方法として深呼吸が重要だと、前前世でも鬼滅ブームに併せて医学的に証明されていた。血液中の酸素濃度が上がれば細胞の活性化に繋がり、病気とも無縁になれると。事実、私は健康そのものだし、マルゼンスキーに至っては肉体としてはそれほど頑丈ではなかったのに、全集中の呼吸修

得後は故障したことがない。筋肉、血管、神経に骨……はよく分からないが、とにかく丈夫になったのだらう、うん。

呼吸に慣れてきたら、あとはもうひたすらに走り込むだけとなる。近道などない。

限界まで走らせたならマツサージして回復。

ご飯を一杯食べさせたら深呼吸しながら瞑想。たまに寝てる。

消化が終わったらまた限界まで走らせてマツサージ。

ペットボトルに破裂させる気概で息を吹き込む。

一日の最後は気絶するように寝る。

基本的にはこれの無限ループだ。私の時はこれに加えて炎の呼吸の剣技を組み合わせていたが、ミホノブルボンには必要ないだろう。

地獄の修行もしばらく経って、夏の終わりも近付いた頃。

木陰で山路を走るミホノブルボンを見守っていたところ、慣れ親しんだ気配が近付いてきた。

「パーガトリーちゃん、久しぶりね」

「ええ、お久しぶりです。マルゼンスキー」

はあい、とマブイチャンネーの風格を醸し出したマルゼンスキーが差し入れを持ってやってきた。この場所を知っているのはトレーナーとマルゼンスキーだけなので、訪問

者も限られているから驚きはない。

「どんな感じかしら?」

「付け焼き刃よりはマシ、程度ですね」

「手厳しいわねえ」

身体の成長を待っていたとはいえ、私だって年単位でやつと修得したし、マルゼンスキーですら独力で半年、完全にものにする為の私の指導で三ヶ月はかかったのだ。私以上だがマルゼンスキーには遥かに劣る才能のミホノブルボンが、いくら私が付きつきりとはいえ数ヶ月で身に付く筈がない。

ミホノブルボンの肺を見透かせば確かに強靱なものに進化はしているが、隣の怪物に比べたらまだまだ。

結論として、菊花賞には間に合わないだろう。

まあ未完成だとしても有用だということはマルゼンスキーが証明している。この怪物が規格外というだけかもしれないが。

「にしても、よく来れましたね。リギルの合宿中では?」

「今日はオフよ。大変だったんだから。パーガトリーちゃんのところ遊びに行くって言ったら、みんな付いてこようとして」

「シンボリルドルフもですか?」

「むしろルドルフちゃんが一番厄介だったもの。グラスちゃんとエルちゃんは「トウギヤザーしたいですっ!」なんてすっごく可愛く言うから、心が痛んだわ」

きつとグラスワンダーは顔を真っ赤にしながら言ったんだらうなあ……。

マルゼンスキーのツボを押さえた一世一代の決意が手に取るように分かる。ごめんよ、二人とも。

現状、全集中の呼吸は周知していない。

これは決して、私のアドバンテージが揺らぐからといった個人的な理由ではない。事情を知っているトレーナーやマルゼンスキーと相談して決めたことだ。

理由は主に二つ。

一つ目は、単純に修得には危険が伴うから。実はこれ、加減を誤れば肺を損傷する可能性があるのだ。基本的には私が付き添っていない状況での修得は推奨できない。……マルゼンスキー? 隣のこれは例外だよ?

二つ目は、ウマ娘たちのレースに懸ける夢や希望を安易に諦めさせないためだ。

最初、トレーナーからこの旨を聞いた時は首を傾げたが、詳細を聞いて成程と理解した。

マルゼンスキーやシンボリルドルフといった、時代を代表する限られたウマ娘が至れる極地として「領域」と呼ばれる状態がある。

この領域について知っている者は、多くはないがいけないわけではない。神バことシンザンが領域に至れた際に、その時から活動している中堅以上の中央トレーナーであれば誰もが存在自体は知っている。当時、緘口令も敷かれていたわけではなかったので、担当ウマ娘に伝えてしまった者もいた。

これが悲劇を生むことになった。

領域の存在を知ったウマ娘が、自分では領域に至れないと悟った時、途轍もない挫折を味わうことになったのだ。中には無理して領域に踏み込もうとして、取り返しの付かない怪我を負ったウマ娘もいた。

これを受けてトレーナーたちの間で、領域については安易に口外しないことが不文律となつたらしい。

トレーナー曰く、全集中の呼吸は広まつたらもつと性質が悪いらしい。

私ことパーガトリーというウマ娘は、才能でいえばいいとこ下の上。

そんな私が残してきた数々の記録——日本史上初の無敗のクラシック三冠、日本初の凱旋門賞ウマ娘、全距離G1制覇、シニア級一年を終えて日本でのG1を10勝、その他海外レースの数多のトロフィー。……なにか？ マルゼンスキーも無敗の三冠以外はほぼ一緒だから！

つまり何が言いたいのかというと、全集中の呼吸さえ修得できたなら、私と同じ世界

に至れる。しかも全集中の呼吸を修めるのに、特別な才能は必要ない。

もしこの事実が広まったら、じゃあ私でも、と思うウマ娘は山ほどいるだろう。たとえそれが超ハイリスクだとしても、だ。

起こり得る悲劇は想像に難くない。肺を損傷して走ることすら困難になる。そもそも修得できず、自分には資格が無かったと挑戦もせずに諦めるなどなど。

こうした経緯があつて、全集中の呼吸を一般に広めないことは私たちの間での約束事となつた。

この縛りを緩めるのは、才能溢れるウマ娘が競争バ生命を失いかねない故障を負つた時としている。才能の如何、この場合の才能とは肺が如何に頑丈かだが、これについては私の一存だ。修得が難しい子に話を持ち掛けて失敗した場合、責任を負うことができないから。

ちなみに、私とマルゼンスキー以外に全集中の呼吸を修得している子はあと二人いて、絶対に他言するなど言い含めている。

じゃあなんでミホノブルボンはokなの？ と聞かれると、……うん。明確な理由は特にない。ぶつちやけるとチームメンバーへの最悪だ。

大前提として、うちのチームに入れるのは寒門（今では差別用語）出の子のみだ。これは表に出してはいないがトレーナーの方針なので、私が口出しすることはない。

案の定、うちのチームに入ってくる子で、私の強さの秘訣を教えてほしいと嘆願する子は大勢いた。

そんな子たちはまずトレーナーが扱く。もちろん故障などはさせないが、限界まで見極めて扱く。

大抵の子はこの時点で合わないとチームを脱退するから、無敗の三冠を出したチームにしては小規模なのだ。今残っている子はミホノブルボン含めて普通に優秀で、重賞は取ってるし、なんならG1の冠をかぶっている子もいる。あとは私の信者かな？ とうくらしいに私に憧れているらしい子も頑張る傾向があるかな。

トレーナー式ブートキャンプを乗り越えた子で、それでも知りたいという子も当然いた。

そんな子たちに見せるのが、初手必殺の宴会芸（大）である。
全員遠い目になった。

一応、そこまで乗り越えた子たちには聞いたんだよ？ こうなりたいですか？ っ
て。

こんこんこんこんこんこんと念入りにブツを叩いた後、みんな私をウマ娘ではないナニカを見る目で遠慮するんだもん。

だからチームの子で伝授するのは、意外なことにミホノブルボンが初である。

「新たな無敗の三冠が生まれるかどうか、ね。ふふっ、楽しみだわ」

「どうなるかは分かりませんが」

「パーガトリーちゃんのお弟子だもの。きつと最高に熱いレースになるわ！」

「……そうですね。私もそう願っています」

最高に熱いレース、ね……。

恐らくそれが、ミホノブルボンが限界を超えられるかどうかの分水嶺になるだろう。

本当なら自分自身で気付いて殻を破るのが一番なのだが、ミホノブルボンには難しいはずだ。

最後の仕上げは走らせることでも、呼吸の精度を上げることでもない。

言葉を尽くすこと。

これが、ミホノブルボンにとって最も力になる。

改めて思う、変わった子だなあ。

「ふふっ。全く、困った愛弟子です」

とりあえず、帰り際マルゼンスキーに宴会芸（小）を披露してもらった。

ミホノブルボンは遠い目になった。



10月下旬の日曜日。

京都レース場には入場規制が敷かれるほどの人が押し寄せ、レースが始まる前にも関わらず異様な熱気に満ちていた。

クラシック三冠。最後の冠であるG1レース——菊花賞。

最も強いウマ娘が勝つとされる名誉あるレースで、新たな伝説が生まれる瞬間を見ようと日本中が盛り上がっていた。

「ブルボン、調子はどうだ？」

「システム点検完了、オールグリーン。問題ありません、マスター」

「そうか。なら行ってこい」

「はい。マスター」

最終確認を終わらせたトレーナーをしばらく見詰めた後、ミホノブルボンはその後ろに控えていたパーガトリーに視線をずらす。

無言の眼差しを受けたパーガトリーは、一步前に踏み出してミホノブルボンに近付いた。

「私が言ったこと、覚えていますか？」

「はい。もちろんです、師匠」

「では、私から最後に一つだけ。ミホノブルボン、貴方が夢を掴み取る姿を、私に見せてください」

無機質な瞳に確かな意志が宿り、ミホノブルボンは力強く頷いた。

「オーダー承りました、師匠。この手に無敗の三冠の夢を、掴んできます」

『最も強いウマ娘が勝つと言われる菊花賞！ 栄冠を手にするのは果たして誰になるのか！』

レースの始まりが迫るにあたり、観客の興奮はどんどんと大きくなる。

実況の声すらもかき消されそうな歓声の中で、ターフの上に立った18人のウマ娘は最後の調整に入っていた。

(遂に、ここまで来ました)

透き通る青空を無意識に眺めながら、ミホノブルボンは少しだけ感慨に耽る。

3分。たったの3分だ。

レースが始まってその時間が経つ頃には、菊花の冠をかぶる当代最強のウマ娘が決まっている。

その冠を、勝利を、無敗の三冠を手にする為に、ここまで駆け抜けてきた。

「ブルボンさん」

声とともに即座に気持ち切り替えて、ミホノブルボンは振り返った。

そこに立っていたのは黒と青が目を引きウマ娘で、このレースにおける最強のライバル。

「ライス」

ライスシャワー。

世界最強に等しいウマ娘が認めた漆黒のステイヤー。普段はおどおどとした弱気な面が印象に残る彼女だが、今だけは周りを、否、ミホノブルボンを食い千切らんばかりの圧を放っていた。

「ライス、負けないよ。ブルボンさんに、勝つから」

堂々とした宣戦布告に、ミホノブルボンは淡々と返す。

「いいえ。勝つのは私です」

その返答に、ライスシャワーは満足気に口角を上げて離れていく。

ライスシャワーはこのレースに、全てを懸けて臨んでいた。

ミホノブルボンが余計なことを言った所為だが、ライスシャワーへの注目度はこれまでのレースの比ではない。あのパーガトリーが認めたというこの一点が、ウマ娘にとつてどれだけの名誉か。知らぬ者は日本を超えて世界にすらいはないと言える。

嬉しかった。同期の最強に、ライバル足り得ると認められたことが。

だからこそ、全力を尽くすことが礼儀だと、ライスシャワーはそう考えた。

このレースに勝てば、ミホノブルボンに勝てば、何かが変わる気がする。

自分が勝つことで、観てくれたみんなに新たな希望を与えたい。

己の名前であるライスシャワーのように、祝福を齎したい。

鍛錬は積んできた。

気概はかつてない程に満ちて溢れている。

——勝つ、ブルボンさんに勝つんだ！

背を向けたライスシャワーを見届けて、ミホノブルボンは瞳を閉じて深くゆっくりと呼吸する。

全集中の呼吸の修得は、この五ヶ月で成し遂げることは出来なかった。

だが、分かる。数ヶ月前の自分とは明らかに違うと。走り切れないと散々言われたこの菊花の舞台でも、十全に駆け抜けられると。

次に目を開いたとき、ミホノブルボンは静謐なる闘志を帯びていた。

そして、戦いの火蓋が切られる。

『3番人気は5枠10番、マチカネタンホイザ！ 前走のカシオペアステークスでは、シニア級もいる中で2位と好成績を残しています』

紹介されたマチカネタンホイザは普段であれば人懐っこい笑顔で観客席に手を振つ

ていたが、今日ばかりは気合いの入りようが違うのか真剣な眼差しで前だけを見詰めていた。

『2番人気は4枠8番、ライスシャワー！「ワールドブレイカー」と名高い日本が誇る最強のウマ娘、パーガトリーが認めるステイヤーです。人気は2位ですが、この菊花賞における優勝候補と言っても過言ではありません！』

説明混じりの実況に、小さくない歓声が響き渡る。

日本ダービーを終えて、ライスシャワーは一躍有名ウマ娘となった。重賞での勝利こそないものの根強いファンも増えて応援の声が強くなり、伴ってレース場の熱気が刻一刻と高まっていく。

ライスシャワーはゲートに入る前に観客席に一礼だけして、鋭い眼光で前へ向き直った。

最後に、大本命がゲートへと歩いていく。

『さあ、お待たせいたしました。当代最強の登場です』

その一言で、レース場のボルテージは一気に最高潮へ至る。

『7戦7勝！ ここまで無敗のクラシック二冠ウマ娘！』

菊花賞の前哨戦である京都新聞杯でも勝利を飾り、揺るぎない強さを示した世代最強のスターウマ娘。

『4 枠 7 番、ミホノブルボン!!』

地を揺るがす大歓声が京都に迸る。

肌寒い季節を吹き飛ばすような熱気と鼓膜が破れそうな程の爆音に、応援に来ていたウマ娘たちが面食らったように目を見開いて耳をぺたんと倒した。

レース場に足を運んだミホノブルボンのファンの思いはただ一つ。

無敗の三冠を。

トウカイテイオーが成し遂げられなかった夢を。

皇帝シンボリルドルフ以来の偉業の達成を。

『彼女の師匠であるパーガトリーも成し遂げた無敗の三冠を懸けて、ここ、京都でクラシック最後の戦いに挑みます!』

役者は揃った。

ファンファアレーが鳴り止み、18人のウマ娘のゲートインが完了する。

『クラシックロードの終着点、菊花賞!』

高まる緊張を抑えて、各々がスタート体勢に入って。

ガコンツ、と音がなった。

『今、スタートしました!』

機械的なまでの理想的なスタート。

観客の誰もが思っていた。メイクデビュール以来出遅れもなく、ミホノブルボンは常に先頭で走っていた。だからこのレースでもそうだろうと。

だが、ミホノブルボンはハナを譲った。

『先頭はキョーエイボーガン！ ハナに立ったのはキョーエイボーガンです！ 凄まじい速さで先頭に躍り出ました！』

波乱の始まりに各所から響めきが起こり、驚嘆にも似た歓声がレース場に響いた。

二番手に付いたミホノブルボンはあくまで冷静にキョーエイボーガンの後ろを走り、その後ろは3バ身ほど空いて三位以降が縦に長い形で続く。

『先頭はキョーエイボーガン、その後ろはミホノブルボン、メイショウセントロ、マチカネタンホイザ、ライスシャワーと続き、以降は縦に伸びた展開です』

観客の真前の直線を走ると大きな歓声が響くが、各ウマ娘たちに余裕はない。

(私が勝つには、これしかないっ！)

キョーエイボーガンは分かっていた。まともにぶつかればミホノブルボンには勝てない。

同じ逃げ脚質同士が争った時、勝利するのは単純明快、総合力が高い方だ。距離適性も関係するが、ほとんどの場合において運や戦略に左右されない。日本が誇る化け物二人がそれを何度も証明してきた。

総合力において、キョーエイボーガンはミホノブルボンに勝てない。特にスタミナが圧倒的に不足していた。

それでも勝つ為には賭けるしかないのだ。己のスタミナがゴールまで切れないことを。

最近では【異次元の逃亡者】と呼ばれるサイレンススズカが確立した戦術である大逃げ。

キョーエイボーガンが打った戦術はそれとは明らかに異なる。名付けるのであれば破滅逃げだ。

キョーエイボーガンがハナに立ち、ミホノブルボンが二番手になる。

この展開をはつきりと読み、期待していたウマ娘は一人いた。

その被害を一身に受けることになったのはマチカネタンホイザだった。

(ひいひいっ!!) 怖い怖い怖いッ! なんて、ライスさん私のことっ!)

ダンダンダンダンッ! と蹄鉄の音を鳴らし、恐ろしいプレッシャーで背後にピツタリと付くライスシャワーに、マチカネタンホイザは明らかに困惑した。

ライスシャワーのことは最大限に警戒していた。マチカネタンホイザ自身も長距離を走れる自信があつたが、日本ダービーの件でその隠れた実力の証明がされたのだから当たり前だ。

ミホノブルボンとライスシャワー。菊花賞はこの二人の激突だと、前評判でもそうなっていた。

だからこそ付け入る隙がそこにはあると、マチカネタンホイザは考えていた。

だが実際には、先頭を走るのはミホノブルボンではなくキヨーエイボーガンで。

優勝候補のライスシャワーは何故かミホノブルボンではなくマチカネタンホイザをマークしている。

予想外の連続でマチカネタンホイザは冷静さを失い、本来のペースを乱され加速していく。掛かってしまった。いや、意図的に掛からせられたのだ。

『1000mの通過タイムは59秒1。まずまずのタイムでレースは進んでいきます』

『菊花賞はまだ2000ありますからね。ゴールまでスタミナが保てばよいですが……』

第1コーナーに突入する時点では順位は変わらずだったが、第2コーナーを曲がる頃には3位と4位にマチカネタンホイザとライスシャワーが上がっていた。

前後で熾烈な展開が繰り広げられている中、ミホノブルボンだけは一人ラップタイムを守って走っている。

先頭ではないが、大きな問題ではない。元々出力可能な最高速度を維持して走り切るのがミホノブルボンの戦術だ。

前にいるキョーエイボーガンも徐々に脚が鈍ってきており、最終コーナーに入る頃には抜かせるだろう。

頭の奥に残る嫌な予感にさえ目を瞑れば、順調にことは進んでいた。

怒涛の勢いで始まったレースも気付けば半ばを超えて終盤戦。ここからが本番と各ウマ娘が速度を上げていく。

『淀の坂を越えて最終コーナーに入ります！ キョーエイボーガンはもう苦しいか！ 必死の形相で走っています！』

(捉えました)

思った以上にキョーエイボーガンは粘った。坂路で抜き去れるかとも思ったが、結局はここまで来てしまった。

下り坂で嫌でも加速する状況。ミホノブルボンはハナを奪い取ると決めた。

この時、ミホノブルボンは三つのミスを犯した。

ミホノブルボンは盛大に出遅れたメイクデビュー以来、先頭を譲ったことがない。つまり、公式戦で自分以外の逃げウマ娘をまともに抜いた経験がないのだ。

知っているのは過去のレース映像。何度観たかも数えていない最強と謳われる憧れの走り。

パーガトリーとマルゼンスキーが相手と並ぶ時、必ず外から回っていた。

だからミホノブルボンにとっての正解はそれで、固定観念と化したものだった。

一つ目のミスは、キョーエイボーガンの状態も考えずに迷いなく外から抜こうとしたこと。

二つ目のミスは、キョーエイボーガンがああ怪物たちと同じ動きをすると無意識に定義したこと。

最後の一つは、キョーエイボーガンの執念を考慮していなかったこと。

『さあ並んだ！ ミホノブルボンがキョーエイボーガンと並んだぞ！ ここから一気に抜き去ってしまうのか！』

「うあああああああああッッ!!」

隣にミホノブルボンが並んだ瞬間、キョーエイボーガンは叫んだ。それは文字通り、最後の力を振り絞った走りだった。

本来の想定なら、ミホノブルボンはコーナーの突入と同時に抜き去るつもりだったが、坂の勢いも利用してキョーエイボーガンは脅威的な粘りでミホノブルボンとコーナーを並走したのだ。

加えて、キョーエイボーガンは走ることに全神経を注いでいた為、コーナリングが疎かになった。外から抜くことを選んだミホノブルボンは、道連れとなる形で大きく回らざるを得なくなった。

(ここ)だっ!!)

「っ!？」

千載一遇の好機。

後ろから立ち昇る莫大なる威圧と青の波動。

『(ここ)でライスシャワーが来た! マチカネタンホイザを一瞬で抜き去り、空いた大内へと駆け抜けるっ!』

マチカネタンホイザの驚愕を余所に、ここまで無理矢理加速させ続けた彼女をかわしてライスシャワーはロングスパートに入った。

空いた空間は横幅二人分。普通のウマ娘なら突っ込めば遠心力に負け、接触を起こして降着となるだろう。

ライスシャワーを支えるのは無限とも思えるスタミナと強靱な肉体、レースにおける闘争心とここぞと言う場面での度胸だ。瞬間最高速度こそ末脚自慢の超抜級ウマ娘たちに一步劣るが、精神と肉体に物言わせた無理を押し通す力を秘めていた。

ギチギチと軋む身体に一喝して、ライスシャワーは大内へと切り込んだ。

「ツツツ!! アアッ!」

無謀とも言える賭けに勝ったライスシャワーが最終コーナーを曲がり切った時、先頭を走っていたミホノブルボンが目と鼻の先にいた。

『最終コーナーを回って先頭はミホノブルボン！ だが2位に上がったライスシャワーとの差は2バ身もない！ 菊花の直線は短いぞ！ ミホノブルボンは逃げ切れるのか！！』

ホームストレッチに入るウマ娘たち。白熱するレース展開に歓声が響き渡る。

ミホノブルボンは自分がミスをしたと気付いた。削られたリードとスタミナは、この最終局面においてはあまりにも致命的。

ダンッ！ と大きな足音が聞こえる。

ミホノブルボンを千切らんとする獰猛な気迫。

(差し切るっ!!)

青き炎が瞳に灯り、ライスシャワーは更なる加速をしてみせた。

『並んだ！ ライスシャワーがミホノブルボンと並んだ！ その勢いは止まらないっ!!
ライスシャワーかわした！ ライスシャワーかわした!! ライスシャワーが遂にミホノブルボンを置いて一歩抜け出した!!』

ワアッ!!? と、レース場が沸き上がる。

その絶叫はライスシャワーを応援する声でもあり、ミホノブルボンが抜かされたことへの悲鳴でもあった。

ミホノブルボンの目に動揺はない。

ただ、納得だけがあった。

ライスシャワーが一步前を進んだその瞬間、

ミホノブルボンの脳裏に師との記憶が過ったからだ。

「ミホノブルボン。貴方が菊花賞で勝つ為に最も大切なことは、トレニングを積むことでも、全集中の呼吸を身に付けることでもありません。何か分かりますか？」

「……いいえ。分かりません」

パーガトリーとの夏合宿最終日。

大事な話があると走り込む前に呼ばれたミホノブルボンは、木陰でパーガトリーと向き合っていた。

予想していた答えにパーガトリーは僅かにだが微笑んで、ミホノブルボンの胸の真ん中に優しく拳を当てる。

「貴方にとって最も大切なこと。それは、心を燃やすことです」

「心を、燃やす……」

パーガトリーから伝わる体温は、温かいのと同時にとても熱く感じた。

「貴方は何事も数値でとらえて、今まで走り抜けてきました。レースにはタイムがあるのですから、それは間違いではありません。何分何秒でゴールできれば、今回の出走者

には負けない。その考えは正しく、事実、貴方は勝ち続けてきた」

ですが、とパーガトリーは続ける。

「それは相手が限界を超えてこないことが前提です。言ってしまったら、貴方の戦術は格下殺し。自分より強い相手と当たった時、絶対に勝てないのです」

限界を超えるなど、口では簡単に言える。

しかし実際に為すためには、身を削る努力が、自身の全てを費やす覚悟が必要となる。そう易々と成し遂げられるものではない。

だが、パーガトリーは知っていた。

ライバルという存在は、容易く限界を超えてくるということを。

「貴方は私の日本ダービーを観たのですよね？」

「はい」

「それならば、一つ問題です。あの時、マルゼンスキーは私とほぼ同着の2分20秒でゴールしました。では、あのレース前のマルゼンスキーの2400自己ベストは、何秒だったと思いますか？」

質問に対し、ミホノブルボンは簡単に頭を回す。

2400mを2分20秒というのは、現実を知った今であればどれだけイカれた記録か理解できていた。ミホノブルボンの日本ダービー勝ち時計が2分27秒台なのだ。

世界レベルで化け物と呼ばれてもさもありなんとしか思えない。

ミホノブルボンの当時の自己ベストはダービーとほぼ同じ。マルゼンスキーの怪物具合と、話の流れである限界を超えてそのタイムだと考慮して、結論を導き出した。

「2分22秒台かと予測します」

「大外れです。正解は2分26秒台です」

「は？」

突き返された答えに思わず声が漏れた。

パーガトリーが言ったことが本当なら、マルゼンスキーは本番で6秒を縮めたということだが、にわかには信じ難い。

G1を走るウマ娘は、1000mを60秒あれば走れる。そこから単純計算で秒速が導き出せる。

16.6m。これが1秒で走れる距離だ。

つまりマルゼンスキーは、日本ダービーで己の限界を超えて、約100mもの距離を踏み潰したと言うのだ。

尋常ではない真実に鳥肌が立ち、未だ夏だというのにミホノブルボンは寒気すら感じた。

「まあ、マルゼンスキーは例えとしては適切ではありませんね。……私ですら偶にドン

引きするので」

遠い目をするパーガトリーに、いや貴方がた二人ともおかしいです、と喉まで言葉が出かかったが、ミホノブルボンは何とか飲み込んだ。

「話を戻しますと、ライバルとは限界を超えてくるものなのです。そして、ライスシャワーはその典型でしょう。彼女は貴方とは逆の性質、いわゆる格上殺しを得意とするウマ娘ですね」

相手が強ければ強い程、実力以上の力を発揮する稀有な才能。

これまでは単純な地力が伴っていなかったが、夏を超えて無視し得ないレベルにまで成長を遂げているだろう。クラシック期において、八月を乗り越えて急激な進化を果たすウマ娘は多くいるのだ。

総合的に判断して、ミホノブルボンの勝ち目は薄い。

ただでさえミホノブルボンの適性距離外であつて相手の得意距離だというのに、本番で限界まで超えられたら手の出しようがないから。

だからこそ、殻を破らなければならない。

「ミホノブルボン。貴方にも、譲れない願いや、叶えたい夢があるのでしよう？ 何を想つてこのトウインクル・シリーズに挑戦したのか、それは貴方だけが知っています」
胸に置いていた手を頭に運んで、パーガトリーはミホノブルボンを優しく撫でる。

「そういつた想いを焚べて、心を燃やしなさい。貴方は苦手なのでしようが、大丈夫です。今は燻っているだけ。貴方にだって、素晴らしい信念があるのですから」

慈愛に満ちた微笑みを最後に、ミホノブルボンは現実へと帰ってくる。

緩慢になった時間感覚の中で、ミホノブルボンはライスシャワーの背中を見た。

小さく、そして大きな背中。

どこか憧憬を想起させる、凜々しいその姿。

彼女が発する輝きを見て、胸の真ん中に火を投げ入れられた気分だった。

——ああ、そうだ。そうだった。

どうして忘れていたのだろうか。

憧憬だけが目に焼き付いて、気持ちだが、心が疎かになっていたのだろうか。

無敗の三冠になりたいと、夢を抱いたのは結果だ。

パーガトリーに憧れたのは、その強さではなく在り方が理想だったからだ。

色褪せてしまった初心は、もつと子供っぽい落書きみたいなものだった。

——みんなに夢を、希望を、勇気を、感動を与えられるウマ娘になりたい！

ドクンツ！ と、心臓が激しく鼓動する。

身体の内中の奥底に生まれた火種は、一瞬で灼熱の炎へと昇華する。

その炎熱は血潮を伝って四肢に流れ、全細胞が猛り、唸り、咆哮を上げた。

——何の為にここに来たのか？

無敗の三冠になる為に。そうではない。

譲れない願いや、叶えたい夢を、その先に待つ未来を掴み取る為に。それも違う。

——このレースを観た人たちに、夢を、希望を、勇気を、感動を与えたいと思つたからだ！

燃やせ、燃やせ。

雑念を、想いを、全てを焚べて、心を燃やせ。

原初の憧れの光景は、決して師一人から生み出されたものではない。

掛け替えの無いライバルがいたから、あれほどまでに熱く滾るものだったのだ。

その二人の胸にあつた願いはただ一つ。

勝ちたい。

このライバルに勝ちたい！

勝つ。勝つ！

——私は、勝ちたいツツツ！！

ビキ、ビキキツ、と太腿から音が鳴る。

抑えていた、否、枷によって抑えられていた限界を超え、極限のその先に向かおうと

脚が心に応えていた。

かつてない感情のうねり、肉体の躍動。

全身に熱が行き渡ったその時、碧眼の中心に炎が灯る。

万力の力で芝を蹴る瞬間、シイイイッ！ と鋭い呼吸音を響かせ、ミホノブルボンは眦を釣り上げた。

「——勝つのは、私だあああああああああああああああああああああああ
あツツツ!!!」

ダアンツッ！ という音を置き去りにして、ミホノブルボンは猛々しく吼えた。

「「「「ツツツ?!」」」」

突如として発露された凄まじい覇気に、走っているウマ娘全員が震えた。行手阻む存在全てを燃やし尽くさんとするその炎熱は、10 m以上離れた最下位を走るウマ娘にすら届いたのだから。

最も近くでその雄叫びを耳にしたライスシャワーは、驚愕を上回る未知に対して理解が追い付いていなかった。

——えっ、今のブルボンさん……?」

刹那の間でそう認識したが、全く信じられなかった。

だからライスシャワーは、一度だけ視線を横にずらした。

その一瞬で、ミホノブルボンは隣を走っていた。

『なっ!! 並んだ!!』 ミホノブルボンがライスシャワーと並んだっ!! 死んでいない、ミホノブルボンはまだ死んでいないぞっ!!』

驚愕を大いに孕んだ実況に、日本中が喝采を上げて揺れ動く。

ウマ娘のレースに精通している者ほど、ミホノブルボンの走りに驚天動地の思いを抱いた。逃げウマ娘が後続に捉えられ、一度は完全に抜かされたというのに、そこから一瞬で持ち直すなど殆ど前例が見当たらない。余力を残していたのであれば分からなくもないが、ミホノブルボンにそんな様子は欠片も見受けられなかったのだから尚更だ。いつものミホノブルボンは淡々と、表情すら変えずに走り切っていた。

だが今は違う。必死の形相で、闘志を剥き出しにし、このレースに全身全霊を懸けて挑んでいた。

そこには無敗の三冠に手を掛けた絶対王者としての風格はなく、ただ一人のウマ娘が貪欲に勝利を欲するありのままの姿があった。

その横顔を間近で見たライスシャワーの心境は、一言では到底言い表せない。

驚愕を覚えた。

衝撃を受けた。

疑問が浮かんだ。

畏怖を抱いた。

ただ、何よりも大きく占めた感情は歓喜であった。

——すごい！ やっぱりブルボンさんはすごい!!

ライスシャワーは菊花賞に臨むにあたって、誰よりも準備してきた。

ミホノブルボンを入念に調べ、観察し、研究した。ラップタイムは、最高速度は、何を得意として何を苦手としているのか。調査できるものは全て網羅した。

他の出走者についても調査を怠らなかつた。同じ逃げ脚質のキヨーエイボーガンなら、勝利を諦めない故に大逃げを選択すると。自分とミホノブルボンが潰し合った時、漁夫の利を得られる可能性があるのはマチカネタンホイザただ一人だと。

可能性を想定し、あらゆるパターンで自分の走りを完成させ、最後には全員を差し切つてゴールする。

全てはミホノブルボンに勝つ為に。

その一心を胸に、今日という決戦の日まで準備してきたのだ。

ライスシャワーの目論みは、ミホノブルボンが転けたら全部が無駄になるものだった。

長距離が不向きなのは分かっていた。

もしかしたら途中で力尽きてしまう可能性があることも理解していた。

それでも、ライスシャワーはミホノブルボンを信じていた。

ミホノブルボンならば必ず、一番でゴールを走り抜けると。

最後の直線で差し切れると思った。

一步抜きん出た時、勝ったと思った。

このままゴールまで走り抜けると、勝利を確信した。

そんな雑念を、ライスシャワーは瞬時に振り払った。

——負けない……

業火の如きミホノブルボンの闘志に感化され、ライスシャワーの瞳に宿る炎も燦然と燃え上がる。

——勝つ……

世界から色彩が消え去って、モノクロの中で紺碧の煌めきだけがライスシャワーから零れ出る。

——ライスが、勝つんだッ!!

ダンッ! と激烈な踏み込みで、ライスシャワーはミホノブルボンと疾走する。

この土壇場において更なる飛躍を遂げたライスシャワーは、時代を代表する数少ないウマ娘しか辿り着けない世界——領域へと踏み込んだ。

『残り200!!』 ミホノブルボンとライスシャワー!! まさにデッドヒート! 譲らな

あツツツ!!!」

だからどうしたと、湧き上がる弱音を胆力だけで捻じ伏せた。

そして、長きに渡った勝負は遂に終わりを迎える。

『残り100! まだだ、まだかわせない!! ミホノブルボンかライスシャワーか!!
ライスシャワーかミホノブルボンか!! 並んで、並んで、並んだままゴールを駆け抜けたツ!!』

死力を尽くした激走に、感情を爆発させた大喝采がレース場に轟いた。

ミホノブルボンとライスシャワーはそのまま30m以上を駆け抜けたが、速度が落ちて本能がもう大丈夫だと囁いたその時に、力尽きたように前から倒れ伏した。その光景に少なくない悲鳴が上がったが、すぐさま駆け付けた医療班に対して震えながら手を振る仕草を見て観客は安堵する。

息も絶え絶えの二人は闘志を纏ったまま、着順掲示板だけを見詰めていた。

『今、18人のウマ娘がゴールを駆け抜けました。3着は10番マチカネタンホイザ。4着は2番メイキングテシオ。5着は18番ダイイチジヨイフル。1着と2着はまだ示されてっ! 失礼いたしました。写真の文字が出ました。決着は写真判定となりません』

写真の文字を見て観客席は騒めきに満ちて、少ないこの時間で近くのと自らの予想

を口々に語り合う。

ミホノブルボンの勝利を信じて疑わない者。

ライスシャワーの勝利を祈っている者。

最後の走りにただただ感動して涙を流す者。

多種多様な想いが巡る中で、当事者であるミホノブルボンとライスシャワーは荒々しい息を整えながら仰向けに転がっていた。

「はあ、はあ、はあ、……ライス……」

「はあ、はあ、えっ、なに、ブルボンさん？」

話しかけられたライスシャワーはちよつと驚きながらも、隣で空を見上げていたミホノブルボンへ顔を向ける。

ミホノブルボンの口元には、晴れやかな微笑が浮かんでいた。

「ありがとうございます。ハア……貴方の、お陰で、……私は、大切なことを思い出せました」

「えっ、……う、うん。よく分からないけど、よかったねブルボンさん」

「はい」

根が善良なライスシャワーは、意味は分からなくともミホノブルボンにとって喜ばしいことがあったのが嬉しくて笑顔になる。

とはいえ、勝敗の判決を待つ身でもあるのでそれ以降の会話は無く、結果を受け入れる準備を始めた。

互いに震える脚に活を入れて立ち上がり、着順掲示板に視線を固める。

ライスシャワーは無意識のうちに両手を前で組んで緊張と戦つて。

ミホノブルボンは瞳に強い意志を宿しながら粛々とした態度を保つ。

やがて全員のゴールから一分経ち、更にそこから三十秒ほど経つて、それでもまだ出ない結果にレース場は騒然となった。

『長い、ですね。すでに一分は経っているでしょうか?』

『そうですね。それほどに接戦でした。ですが、これはもしかすると……』

何人かは遅過ぎる判決にまさかの可能性を思い、固唾を飲んで掲示板を見詰めて。

光の文字が点灯した瞬間、ワアツ!!? と声が響き渡った。

『なっ!!? こゝ、これは!』

『驚きました……』

実況と解説の声音の意味を、観戦していた全員が理解した。

『同着! 同着です!! 7番ミホノブルボン、8番ライスシャワー! 二人が同着で1』

着!! 菊花賞を制したのはミホノブルボンとライスシャワー、二人のウマ娘です!!』

実況の言葉に一瞬だけ京都レース場は静まり返り、瞬きの後には歓声が沸き起こる。

『そして、そしてッ!』

加えてこの結果には、もう一つの偉業が含まれていた。

『今ここに! パーガトリ、シンボリルドルフに並ぶ、無敗の三冠ウマ娘が誕生いたしました! ミホノブルボン! 無敗の三冠達成ですッ!!』

叫ぶように告げられた歴史的偉業に、しん、と刹那の静寂が訪れる。

「「「「——ッッッ!!」」」」

そして、その意味を理解できた瞬間、京都が、日本が、今日一番の大喝采に包まれたのであった。

「「……………」」

この結末に、ミホノブルボンとライスシャワーは暫し呆然として、自然と視線が絡まった。

「「…………ふふっ」」

鳩が豆鉄砲を食ったような顔とは、まさにこのことを言うのだろう。

相手の顔を見て互いに同じことを思った二人は、小さく笑ってしまう。

気付いたら緊張が解けて、固まっていた表情筋が蘇っていた。

「おめでとう、ブルボンさん!」

「ライスも、おめでとうございます」

互いの健闘を讃えあつて、握手を交わす。

どちらも全身全霊を尽くした結果に不満は無く、心から相手を祝福していた。

この儀式を経て、やつと二人の中で菊花賞を勝利したという実感が湧いてくる。

現在進行形で耳が壊れるのではないかという大歓声が鼓膜を叩いているのだが、その

声よりもライバルとの触れ合いの方が気持ち整理できるとは不思議なものだ。

その時ふと、ミホノブルボンは悪戯を思い付いた子供のよう口角を上げた。

「ライス、一つお願いがあります」

「え? どうしたの?」

「はい。実はずっと、やりたかったことがあるのです」

ライスシャワーのウマ耳に顔を寄せて、ミホノブルボンは小声でお願いを口にする。

聞いたライスシャワーは一瞬だけ目を見開いて、恥ずかしそうに顔を赤く染めた。

「え、ライスもやるの?」

「はい。お願いです」

「うー……、ライスなんかやってもいいのかな?」

「駄目な理由がありません。私一人でやる方が違和感があるでしょう。しかし、どうしても嫌だと言うのなら諦めます」

諦めます、と言ったわりには露骨にシユンと落ち込むウマ耳を見て、ライスシャワーは覚悟を決めた。

「やるやるやるよ！　ライスもやるから！」

「ありがとうございます」

ピコン、と即座に立ち上がるウマ耳。

ライスシャワーはどうしてか騙された気分になるが、この後を考えたらそんな思いは彼方へと吹き飛んだ。

すーっ、はーっ、と大きく深呼吸して、ミホノブルボンとライスシャワーは並んで観客席へと身体を向ける。

何かが始まることを察した観客の視線が集まる中で、二人は一度だけ視線を合わせた。

先程とは違う意味でドキドキと緊張する空間で、二人はゆっくりと右手を上げて。

グツ、と天を掴み取るパフォーマンスをした。

『あ、あれは！』

『パーガトリーさんの、勝利ポーズ……』

世界的にも有名なその立ち姿。

正統なる後継者と噂されるミホノブルボンと、そのライバルであるライスシャワー。

二人の勇姿を目に焼き付けた観衆は、再びの大歓声をもって勝者を祝福するのであった。



うおおおおおおおおお！ 勝ったあああああああああああああああああ！！

うちの子が勝ったあああああああああああああああああああ！！

「きやあああああああああ！！ ブルボンちゃんがやったわあああああああああ

！！」

「ブルボンせんばあああああああいつ！！」

「ブルボンちゃんが勝ちましたよパーガトリー様！！」

「ええ、本当に見事です」

内心はチームの子たちのように狂喜乱舞しているが頑張って外面を取り繕い、うちの子ことミホノブルボンの勝利を見届けた。

同着という結果だが、そこまで持ち込めたのも奇跡みたいなものだ。我が事のように嬉しい。いや本当に嬉しい。自分が三冠達成した時より断然嬉しい。

「ブ、ブルボンッ、……ぐすつ、よくやったな」

「……え？ トレーナー泣いてます？」

「泣いてなどいない」

「いや泣いてますよね？」

一緒に観戦していたトレーナーが男泣きしてるっ!?

気持ちは分かるが、普段は表情一つ崩さないトレーナーがこんな風になるとは……ミホノブルボン、恐ろしい子っ！

……あれ？ でも待てよ？

トレーナー、私が無敗の三冠取った時泣いてないよね？ 表情一つ動かさなかったよね？ よくやった、くらいしか言われた記憶無いんですけど？ なんなら皐月賞のいざこざでURR A幹部がしょっ引かれた時の方が感情豊かだった気がするんですけど！ 何たる差別!! これは訴訟も辞さない。

いつか何らかの方法で報いを受けさせてやると誓いを立てて、一周回って冷静になったので改めて先程のレースを振り返ってみた。

ライスシャワーがヤバかった。これに尽きる。

ミホノブルボンは最終コーナーで明らかにミスをしたが、結果だけ見るとあれはしてよかつたミスだ。あの無駄なコーナリングのお陰で、ライスシャワーはあの瞬間に仕掛けてくれた。

雑な言い方だが、ミホノブルボンの覚醒条件はライスシャワーに抜かれることだったので。ゴールまで200m以上を残した状況でその条件を満たしてくれたために同着へ持ち込めたが、あれが残り50mとかだったら流石に負けていただろう。

観客席でミホノブルボンの覚醒を見た時、正直私は勝ったと思った。

そしたらライスシャワーが、刹那の間で領域に踏み込んでいた。

……ちよつと何言ってるか分からない。

甘く見ていたつもりはないが、闘争心の塊みたいな子だ。

なんて言うかこう、「絶対に勝つと決めたレースにおいては必ず勝利する」みたいな、因果逆転のスキルでも持つてるんじゃないの？　と思うくらいには怒涛の展開だった。

あの手のタイプは私やマルゼンスキーのように地力で押し潰すか、シンボリルドルフのように戦略を用いてそもそも勝負の舞台に上がらせずに畷め潰すかの二択くらいしか確実に勝つ方法はないのに、よく同着まで持ち込めたよホント。

私の勝利ポーズとして定着した格好を披露するミホノブルボンとライスシャワーを見届けて、よく聴こえるようになったウマ耳が壊れそうな大音量が響き渡る中、私たちはそそくさと移動する。控え室に戻った時に誰もいなかったら、あの可愛い幼女が拗ねちやうからね。

「パーガトリー。お前は先に出迎えてやってくれ」

「それがいいですパーガトリー様！」

「ブルボンちゃんも喜んでくれます」

「行つてあげてください、パーガトリーお姉様」

ターフへと続く関係者用通路の前で、トレーナーとチームの子たちにそう言われた。

うーん、同期との触れ合いも大事だとは思うが、この空気で「いやいいよ」とかは言いにいく。

「分かりました。皆さんはアイシングの用意をお願いします」

「分かっている」

みんなと別れた後、私は一人ミホノブルボンを出迎える為に、関係者用通路を進んで半ばあたりで壁際に立つて存在感を消してみる。——絶！

壁の花に徹していた私だが、しばらくして帰ってきた出走ウマ娘たちはみんな目をまん丸にしてこちらを見ていた。うん、気配を消す方法とか知らないからね。当然気付くよね。

とりあえず微笑みながら会釈すると、100%の確率で停止直立お疲れ様です!! の三連コンボを決めてきた。もしかして私に対しては頭を90度以上下げなければならぬという暗黙の了解があったりする? 私のこと何処ぞの頭無惨様だと勘違いしてない? それは嫌過ぎるんですけど!? 3着の子なんか鼻血出して他の子たちに手

足持たれて運ばれていったけど本当に大丈夫？

ドタバタとめちやくちや心配になる子が通り過ぎた後、ようやく待ち人が現れた。

「師匠」

「うえっ!? パツ、パパパパパーガトリー様っ!? お、おおおおお疲れ様ですっ!!」

「お帰りなさい、ミホノブルボン。お疲れ様です、ライスシャワー」

ライスシャワーお前もか。

というか、おでこが膝にくっ付いてるよね? ここまでで一番の角度だよ君が。正面に立っているのに頭頂部どころか後頭部しか見えないこの不思議よ。

「ライスシャワー。菊花賞勝利、おめでとうございます。貴方がミホノブルボンのライバルで良かったです」

本当はうちの幼女の所為で無用な注目を浴びさせてしまったことを改めて謝罪したかったのだが、この様子だと恐縮されて終わってしまうだろう。仕方ないからまたの機会にするか。

頭を下げた状態で固まっていたライスシャワーはぴくんとウマ耳を震わせて、こちらを恐る恐る見上げてきた。……私ってそんなに怖い?

「あの、その、……」

「どうしましたか?」

きよとんとした顔に小首を傾げる。

この子、オンとオフの差が激し過ぎて、ミホノブルボンとは違う意味で分かりにくいんだよなあ。普段はおどおどしてるかと思えば、ミホノブルボンと一緒にアイキャンフライごっこ——風に飛ばされて高い木に引つかかったライスシャワーの帽子を、ミホノブルボンがライスシャワーを上に向けて取ろうとしたらしい。提案者だった幼女に説教した——といった大胆なことも仕出かすからね。

「パーガトリ様」

「はい」

「ありがとうございます」

えっ？ 何のお礼？ あまりにも真剣な謝意に私の首が90度曲がりそうになる。掘り下げてもよいのだが、生憎時間がそんなにない。

「私こそ。ありがとうございます、ライスシャワー」

「では、ライスは失礼いたします。ブルボンさん、また後で」

「はい」

たたたと走り、横を通り過ぎる前にまた一礼してライスシャワーは去っていった。

「師匠」

「ミホノブルボン、お疲れ様です」

「はい」

直立不動で返事をしたミホノブルボンは、一呼吸だけ溜めて口を開いた。

「師匠。オペレーション「三冠獲得」、達成いたしました」

「ええ、おめでとうございます。どうですか、感想は？」

「……よく、分かりません。嬉しいのだと、思います」

「ふふつ。きつともう少し時間が経てば、実感できますよ」

「師匠もそうだったのですか？」

「どうでしょう。私はそこまで無敗の三冠にこだわっていただけではないので。ただ負けたくない、勝ちたいと思っただけですからね」

無敗の三冠は私にとってはただの結果だ。出るからには勝つ、くらいしか考えていなかった。最初の動機が賞金目的という不純さだからね。私のキャラが美化され過ぎて、もうそんな裏話できないけど。墓まで持つて行くよ。

「師匠。私はこのレースで、私の本当の夢を思い出しました」

「本当の夢、ですか？」

「はい。私は、……その、師匠のように……」

ちよつと俯いて口をもによもによとさせるミホノブルボン。めつちや可愛い。顔も若干紅いので、改めて言葉にするのは恥ずかしい類の青い夢なのかな？ ……私のように

に、という発言が気になるが。

にしても、本当の夢、ねえ……。

私知ってるこの子の夢は、無敗の三冠になりたいというものだ。トウインクル・シリーズに挑むウマ娘なら誰もが思い描く理想であり、ミホノブルボンはその夢を掴み取ったばかりである。

なのに、実は本当の夢は別にあつたと。……え、これ以上なんてそうそう無いけど？
もしかして凱旋門賞も取りたいのかな、と思つた頃、ミホノブルボンはこちらを真っ直ぐに見詰めていた。

「私の夢は、師匠のように、レースを観たみんなに、夢を、希望を、勇気を、感動を与えられる、そんなウマ娘になることです！」

「……………」

……めちやくちや恥ずかしいこと言うなこの幼女はっ!?

予想外過ぎて固まっちゃつたよ！ 私が！ いやこの子もやつぱり恥ずかしかったのかプルプル震えてるけどね！

あ、ヤバい。ちよつと顔が熱くなつてる気がする。血流すら少しは操作可能な私にこれほどの精神的ダメージを与えるとは。ミホノブルボン、やはり恐ろしい子ッ!!

「……………全く、貴方は本当に可愛い、……………いえ、困つた愛弟子ですね」

苦笑しつつ、つい撫でたくなつたのでミホノブルボンの頭に手を置く。さらさらと流れる髪に合わせて手を動かすと、ミホノブルボンはされるがままに受け入れてくれた。ウマ尻尾がぶんぶん振られている。

「師匠。最後に一つ、いいでしょうか？」

「はい、なんですか？ そろそろウイニングライブなので、これで最後ですよ？」

「……私は、師匠のように、ちゃんとできたのでしょうか？」

何を、とは聞かない。聞くまでも無い。

あの大歓声が答えだ。

今日のレースを観て、走ったウマ娘たちを見て、夢を掴み取ったミホノブルボンを見て、きっと多くの人の世界が変わっただろう。

伝えたい言葉は決まっていた。

「ええ、立派にできましたよ」

ミホノブルボンは嬉しそうに笑った。

今まで見たことのない、無邪気な子供のような笑みだった。

メチヤメチヤやさしい人達がふいに見せた

①理事長とたづなさん

その日、日本に、世界に、激震が走った。

『偽りの直線』フォルスストレイトを抜けてパーガトリーが更に加速する！ もはや独走！ 一人旅！ これがああ凱旋門の舞台だと私が信じられません!! 見よ世界！ これが日本のウマ娘だ!!』

生中継される映像に合わせて実況が興奮を露わにするが、彼女を窘められる者は日本には存在しないだろう。それほどまでに、映し出されている光景は胸を熱くさせるものだった。

風に吹かれるのは裾を炎に模した白の羽織。

装飾の一切を省いた無骨な黒の軍服。

金の赤に彩られた髪を後ろに流して走る、日本が誇る最強のウマ娘が一人。

『今、ここに！』日本の歴史上初の凱旋門賞ウマ娘が！ 誕生いたしましたっ!!
パーガトリー!! 遠い異国の最も栄誉あるレースで、他を圧倒して見事1着を勝ち取り

ました!!』

ここが住宅街であつたなら、真夜中にも関わらず家という家から歓声が漏れていることだろう。

中央トレセン学園においても、この日だけはと開放された寮の食堂でウマ娘たちが騒ぎまくり、トレーナーたちも学園の食堂に集まつて飲めや歌えや踊れやと羽目を外しまくっていた。

理事長室においても、それは変わらない。

「感激ツ！ たづなよ、遂に日本のウマ娘が!!」

「ええ！ 流石パーガトリーさんです！」

勝利ツ！ の文字が輝く扇子を広げたトレセン学園理事長の秋川やよいと、その秘書である駿川たづなもまた、慎ましやかな宴会を開いていた。

今後二度とこの部屋に持ち込まないであろう酒と肴を嗜みつつ、文字通り天を掴み取るパフォーマンスでファンに応えるウマ娘の雄姿を見届ける。

「驚嘆ツ……すでに息を整えている」

「タイムもレースレコードではありませんが、全力ではなかつたのでしよう。マルゼンスキーさんと平然と張り合っているため勘違いされていますが、パーガトリーさんはどちらかと言えばパワータイプ。洋芝で起伏が激しいレース場ですが、彼女であればものと

もしないでしょう。2400良バ場なら、パーガトリーさんであれば2分25秒台は妥当かと」

「傑物ッ！、これほどの逸材だったとは……」
パーガトリー。

彼女がこれまでに打ち立てた偉業と歴史は、はたから聞けば創作の話だと決め付けられてしまうような非現実的なものばかりだ。

正直に言うと、やよいもたづなも最初からパーガトリーに注目していたわけではなかった。

なにせ彼女の世代には「怪物」と称される、正真正銘の最強が存在したから。

この世代は良くも悪くもその怪物——マルゼンスキーが代名詞になるだろうと、ジュニア期時点では疑いもしていなかったのだ。

ウマ娘のレースはブラッドスポーツ。

こと「走る」という単純作業においては、生まれる以前の才能が、血筋が大きく関係する。現に日本のレース業界においても、栄光あるG1レースでは殆どが昔から存在する名門が勝ち続けていた。

神バことシンザンも、怪物と称されるマルゼンスキーも、母親が実力あるウマ娘。マルゼンスキーの母親に至っては、ただでさえ日本より優秀とされるレース先進国出身の

ウマ娘であり、その国でクラシック三冠を達成するような埒外の実力を持っていたのだ。

マルゼンスキーは同期どころか日本全体を見ても格が違う。もはや世界レベルと言っても過言ではなかった。

その常識に待ったをかけ、ものの見事にぶち壊したのがパーガトリーだ。

「疑問ッ！ たづなよ、君でも彼女の強さの秘訣が分からないのかッ？」

「……申し訳ありません。練習風景をたまに観察してはいたのですが、特段変わったことはありませんでした」

「うむむむむむむっ……」

思わず唸り声が漏れるやよいだが、たづなとしても気持ちはおおいに共感できた。

パーガトリーは色々とおかしい。

母親はウマ娘ではあるが公式レースに出走した経験はなく、パーガトリー自身も入学時点では言ってしまうほど普通だったのだ。基準は満たしていたために合格となったが、芽が出るかは難しいだろうと当時の書類にはメモが残されていた。

だが、蓋を開けてみればどういふことか。メイクデビュー、オープン戦と危なげなく勝利を重ね、ジュニア期最後のレースであるG1のホープフルステークスすら無敗のまま勝つてみせたのだ。

この頃からやよいとたづなは、首を傾げつつもパーガトリーの素晴らしい活躍を応援していた。血筋という壁を乗り越えたパーガトリーには、新たな可能性を期待せずにはいられなかったから。

年が明けてからは同期で孤立気味であったマルゼンスキーと親しくしている場面も目撃するようになり、個人的にマルゼンスキーと仲の良かったたづなとしてもパーガトリーに感謝することが多くなった。

そんな微笑ましい事情が様変わりしたのは、言わずもがな皐月賞である。

「切替ッ！ 今日のはめでたき日！ たづなよ、無礼講だ！」

「はい！ ですが、飲み過ぎはダメですよ」

拭えない疑問はあるが、今ばかりは嬉しさや感動が遥かに上回る。

思い出に浸るのは良いが頭を悩ませるのは止めようと、やよいとたづなは静かに酒宴を楽しむことにした。

「パーガトリーさん、本当に凱旋門賞を取ってしまいましたね」

「天晴ッ！ 皐月賞の会見での言葉を現実としてくれた！ 第2コーナーを回った時点で、私は勝利を確信した！」

「奇遇ですね、私もです」

恐らく、日本人の多くはパーガトリーがゴールする前のどこかの段階でこう思っただ

ろう。あつ、勝ったな、と。

くいつ、とワイングラスを傾けて追加を注ぐたづなは、やや頬を赤らめて若干遠い目をした。

「臯月賞。……あの時は本当に大変でした」

「……うむ、本当に大変であつた」

同意を示すやよいはしみじみと呟く。いつもの二字熟語が出ない程度には憔悴する記憶が脳裏を駆け巡るのでなるべく思い出さないようにしているのだが、アルコールが入った今は愚痴らずにはいられない。

「あと5年のはかかるだろう改革を一気に押し進められたのは幸いでしたが、あの一ヶ月は生きた心地がしませんでしたよ」

「好機ッ！ あの時勢を逃せば革命がさらに遠のいただろう。結果だけ見れば最高に近い形で終わったが、本当に疲れた……」

「パーガトリーさんがそれまでのレースで切り札を隠していたことも驚きでしたが、まさかあんな真似をするなんて。故意であつたのなら無理な話とは分かっていますが、事前に相談してほしかったです」

「無力ッ！ ……我々は、彼女の信頼を勝ち得てはいなかった」

あの時、パーガトリーが壊そうとしたのは規則だ。それに縛られて動けないやよいや

たづなに頼るといふ選択肢は、最初からなかったのだろう。

二人は会見後も不甲斐ないと落ち込む暇さえなかった。日本ダービーまでの一日一日が激動の日々であつたからだ。

結局、パーガトリーと落ち着いて話せたのは、日本ダービーが終わつた後であつた。

その後もしばらくはパーガトリーにまつわる思い出話に花が咲き、そうすると自然と話題になるウマ娘へと主題が移つていく。

「私、ジュニア期の頃は、マルゼンスキーさんが放つておけなかつたんです」

「……推察。自分と重ねていたのだろう」

「そうですね。あの頃のマルゼンスキーさんは、私よりも救いのない状況でしたけど」

強過ぎるといふのは虚しいものだ、真に知つてゐる者は多くない。

他者からすれば贅沢どころか反感を買う物言いではあるが、こればかりは体験した者にしか理解できない感情だろう。

マルゼンスキーは更に酷い状況下に置かれていた。競い合えるライバルはいない。それどころか周りからは畏怖すら抱かれて併走すら断られる始末。加えて、規則の所為でウマ娘の皆が憧れるレースにすら出走できない。

あの環境で表面上だけでも明るく過ごせたのは、ひとえにマルゼンスキーの元来の明るさが大きな要因であつただろう。普通の子であれば、走ることを嫌いになつても何ら

おかしくなかった。

「でも、パーガトリーさんのお陰でマルゼンスキーさんは救われました。あの二人が同じ国で、しかも同期として出会えたのは奇跡と言ってもいいでしょう」

「感謝ッ！ 三女神のお導きかもしれない」

「……私には、微笑んでくれなかったのに」

仄暗い声音で呟かれたその言葉に、やよいはビクリと震えて冷や汗を流した。

（失態ッ!? 浮かれ過ぎていたかッ!）

さりげなく一瞥すると、光を失った瞳でダバダバとグラスにワインを注いで口に流し込んでいた。たづながいた。

やっちまったあー!! と、やよいは気軽に発言した過去の己を頭の中でぶん殴る。衝撃ッ!? と断末魔の叫びをあげて爆発四散する愚かな分身を茶毘に伏して、この場の空気を如何にして回復させるかに思考の全てを巡らせた。

（不覚ッ! 普段であればたづなも過ぎたことと流せたのであろうが、やはりアルコールが入るとダメであったか! あの二人が眩し過ぎるのも原因ではあるのだが……）

世代で唯一最強と呼ばれるウマ娘にとって、パーガトリーとマルゼンスキーの関係性は魅惑の猛毒だ。

大抵の場合、その最強にはライバルが存在しない。いれば呼称が変わっているだろ

う。文字通り、最も強いからこそその最強だ。

故に孤独。

切磋琢磨して力を高め合う友がない。

魂から熱く燃えるようなレースに焦がれていても、隣を走るライバルがない。

走れば栄光と歓声が包んでくれるが、心に空いた穴が埋められることがない。

時が経つと共に少しずつレースへの情熱を失っていき、まだ身体は動くというのに引退する。その運命を辿るウマ娘は少なからずいたのだ。

そんなウマ娘から見て、至高の実力を持ちつつ、同期でライバルというパーガトリーとマルゼンスキーは羨望以外の何ものでもない。ウマ娘だつて感情ある人間なのだ、羨ましくて妬ましくて仕方ないのだろう。

やよいいではその気持ちを中心に理解できず、所詮は想像の範疇だ。下手な慰めは逆効果だと、己の本能が警鐘を鳴らしていた。

(無力ツ!! 私ほんと無力なのだっ!)

やよいいが己の不甲斐無さに一人打ちのめされていた時、テレビの映像が会見会場へと切り替わった。

どうやらゴールからそれなりに時間が経っていたらしく、画面の中央には歴史的偉業を成し遂げたウマ娘——パーガトリーが立っていた。

『月刊トウインクルの乙名史です。パーガトリーさん、おめでとうございます！ 日本
のウマ娘初の凱旋門賞勝利!! 今のお気持ちをお聞かせください』

パーガトリーの勝利を信じて日本から現地に飛んだ記者がいの一番にそう質問する。
どうやってその権利を勝ち取ったのかは定かではないが、レースレコードまで叩き出さ
れたのであれば、いくらパーガトリーが現地から見えて極東の島国出身のウマ娘であらう
と丁重に扱わざるを得ないのだろう。

やよいとたづなも自然と会見を注視していた。先程までの濁った空気も薄れており、
やよいは内心安堵の気持ちに包まれていたのだ。

次の瞬間までは。

『そうですね、拍子抜けしました。調整にもなりませんでした』

「ぶっふ!」

げっほごっほと咳き込んで、やよいとたづなは一時呼吸困難に陥った。

『なんと、やはりそうだったのですね! 洋芝やレース場に不慣れな所為かとも思っ
ていましたが、パーガトリーさんにしては控えめなタイムだと感じていました!』

『理解を示していただき、とても嬉しいです』

——おいっ!!

まさかの記者便乗に、やよいとたづなは声無き声で叫んだ。

あの女性記者は記事のクオリティや記者としてのスタンスは手放しで誉められるのだが、自分に正直過ぎて暴走するのがたまに瑕だった。今回はそれが最悪な形で表に出たケースだろう。

会場は騒然となっているのに、そんなことは知らんとばかりにパーガトリーは言葉を紡ぎ続けた。

『レース前、他の出走者に言われました。極東のウマ娘など、この凱旋門の舞台に相応しくない。とつとと田舎に帰れ、と』

『何か言い争っているのは分かりましたが、そのような内容だったのですね』

『はい。当然言い返しましたが、同時に期待もしていたのです』

『期待とは?』

『世界の中心を名乗るウマ娘の実力とは、いったいどれほどのものなのだろうと。ですがまあ、蓋を開けてみればこの結果……』

パーガトリーはわざとらしく手を顔に寄せて、口元を隠した。

『笑いを堪えるのが大変でしたよ』

——キレッキレ過ぎる!!

祝杯を放り投げて、一気に酔いが醒めたやよいとたづなは頭を抱えた。

「悪癖ッ! ……否、一概に悪いわけではないのだが、彼女のあれは影響力があり過ぎ

るっ!!」

「相当頭にキテるのでしよう。これさえ無ければ、本当に優等生なのですが。ちょうど一年ほど前のあの会見も大変だったのに……」

はああああ、と特大の溜息を吐き出して、二人はとある事件を振り返る。

実はパーガトリーは皐月賞以外でも、勝利会見でやらかしたことがあった。実際にやらかしたのは記者の一人なのだが、パーガトリーの逆鱗に触れたらどうなるのかを関係者に知らしめた事件に発展した。

パーガトリーはクラシック期において、菊花賞に挑む前にスプリンターズステークスに出走している。当然のように1着を取ったのだが、その勝利会見でバカな記者がこう質問したのだ。

——ドーピング疑惑が出ていますが、どうなのでしょうか？

その場にいた者は一人残らずこう述懐している。身体の震えが止まらなかったと。

第一として、パーガトリーはドーピングなどしていない。そもそも、皐月賞のいざこざでURAが大衆からの信用を失ったばかりなのだ。ドーピング検査をしていないわけがなく、後日客観的にも証明された。

その記者が所属する会社は昔からゴシップ記事が多く、根も葉もない話を大袈裟に記載することで業界では有名だった。目の上のたんこぶ以外のなにものでもなく、腐敗し

ていたURRの置き土産の代表格であっただろう。

結論を言うと、その会社は半年を待たずに消えた。正確には社名を含めて内部が一新されたのだが、実質的には無くなったのと同義だった。

パーガトリーは初手必殺の手を打った。

「カメラを持つ方、その記者を映しなさい」

その命令に歯向かう者はいなかった。

パーガトリーは淡々とした口調であったが、身の毛もよだつ怒気は映像越しでも伝わるほどだった。

会社名と記者の名前をもう一度名乗らせ、疑惑についてははっきりと否定した上で、パーガトリーは死刑宣告を下す。

「先程の発言はレースに挑む私たちウマ娘と、レースに関わる全ての方々を侮辱したものです。——もし次があれば、よく考えてから口を開いてください」

その場にいた者で、言外に含まれたメッセージに気付けなかった者はいなかった。

——貴方たちに次などない。

パーガトリーは日本ダービーを勝利した時点で、国民的スターにまで駆け上つていく。

そんな彼女を敵に回せばどうなるかなんて、火を見るよりも明らかであった。全国民

が敵になったと言っても過言ではない。

その会社はあらゆる方面から叩かれた。埃が出ない組織など存在しないとばかりに不正が暴かれ、真つ白な幹部を除いて上層部は全員が肅清された。元々がほぼ真つ黒だったことも合わさって、トカゲの尻尾切りなど許さない民衆の怒りがその会社を燃やし尽くしたのだ。

不買運動などするまでもなく売り上げは下がり切り、もはや倒産する結末しか残されていないとなったが、そこに救いの手を差し伸べたのもパーガトリーだった。

やよいとたづなは、舞台裏を知っている。

「パーガトリーさんはもう少し自身の影響力を考慮してから発言すべきです」

「美德……。彼女の魅力的な点でもあるが、あの時は後処理が大変だったのも事実。件の会社の新社長と菊花賞の後に場をセッティングするのも一苦労だった」

「そのお陰で民間最大のウマ娘福祉事業が生まれたことは喜ばしいのですが……」
「僥倖ッ！ まだ発足して一年だが、素晴らしい仕組みが生まれた！ 苦労の甲斐はあったであろう！」

会見という形で件の会社の新社長が、レース業界の代表として登壇したパーガトリーに謝罪。

頭を下げるだけなら誰でも出来る、とパーガトリーが反論。

誠意として、生活に困窮しているウマ娘がいる家庭に対しての福祉事業の展開を表。

パーガトリーが活動に期待して、クラシック三冠を達成して得た特別賞与である一億円を寄付。

みんなもよろしくね！ 的な感じでパーガトリーが締めた。

これ全部、事前に台本を作って実行したのだ。

やよいとたづなは橋渡し役兼脚本家として協力したが、ことの発端はパーガトリーに相談されたからである。

意識すると「やっっちゃったぜ☆ ……どうしましょう？」であった。

たづなは説教した。

「ウマ娘が生まれた家庭が抱える問題や、育児放棄の現状を伝えられたのが大きかったですね」

「力作ッ！ あのプレゼン資料はURA全面協力！ まさに渾身の出来ッ！ 初の無敗の三冠ウマ娘が生まれた瞬間だったからこそ、関心も大きかった！」

意外と知られていないが、一般家庭に生まれたウマ娘は厳しい環境で生活していることが多い。

パーガトリーのように母親がウマ娘であればまだ普通に暮らせることもあるが、両親

共にヒトである場合は中々に悲惨だ。

ウマ娘とヒトでは身体のバ力りきが違う。時速60kmで走れる脚があることから分かる通り、単純に力がヒトとは比較にならない。赤子であっても、ヒトの大人を容易く傷付ける身体能力を有している。

また、家計的な面で見れば食費が異常に高くなる。子供であろうと食べようと思えば大人のヒトより何倍も食べられるし、燃費が悪いウマ娘は逆にそれくらい食べないと栄養失調に陥ってしまう。確かな収入が無い家庭において、これは致命的でもあった。

結果、生活に困窮する。

離婚して片親になる確率も割と高く、最悪な場合は育児放棄で孤児となるケースも少なくない。URAが運営する孤児院が各所に存在するのはこれが理由だ。

トウインクルシリーズという光の側面が強過ぎて、こういった影の現実は広く認知されていなかった。実際、パーガトリーもその時に初めて詳細な数字を知ったらしく、悲しげに表情を歪ませていた。

「会見前はどうか転ぶか不安でしたが、パーガトリーさんが一億もの大金を寄付してくれました。お陰で寄付金や企業の協賛も増えて、なんとか軌道に乗れました。こういった面でも、彼女の影響力は計り知れませんが」

「危惧ッ！ いわばあれは権力ッ！ 彼女がああの出来事を経て歪まないか不安であった

が、無用に振り翳すことはなかった！」

「そうですね。基本的には清廉潔白を体现した方なので。……このように、逆鱗に触れさえしなければですが」

画面に視線を戻せば、海外勢のプライドをベコベコに叩き潰して心無しかすつきりしているパーガトリーが映っていた。

『ああ、最後に一つ』

——頼むから余計なこと言わないで!!

やよいとたづなの願いは、届かない。

『もし日本のウマ娘と勝負したいのであれば、11月の終わりに日本で開催されるジャパンカップに出走して下さい。私は出ませんが、私の唯一のライバルがもてなします』

『よ』

「……………」

来月末までの多忙が決定した瞬間である。

きつとこの発言の影響は、トレセン学園やURAでは留まらない。航空会社や観光事業、下手をすれば政府などをも巻き込む日本全体の多忙を生み出しただろう。

やよいとたづなは新たなワイングラスに酒を注ぎ、自棄になったように呷った。

「好機ツ!! 日本はまだレースにおいては後進国! このチャンスを逃す道理はないツ

!! すでに賽は投げられたッ! たづなよ、頼りにしているぞッ!!」

「はいっ、頑張りましょう!!」

二人は今どき、珍しいほどに善性の心を持っていた。

即座に切り替えて、レース業界のために身を粉にする覚悟を決めていた。

だがそれはそれとして、パーガトリーに説教することだけは確定事項となっていた。

後日、トレセン学園理事長室で正座する世界最強のウマ娘がいたらしいが、それはまた別の話。

② シンボリドルフ

——全てのウマ娘が幸せに暮らせる世界を。

それが、シンボリドルフが夢見る世界。

だがそれは、シンボリドルフがウマ娘の模範としての皇帝となつてから抱いた夢である。

幼少の頃は、シンボリドルフは気性難として有名だった。

シンボリ家という名家の中の名家に生まれ、両親から直接帝王学を学んで育つたシンボリドルフは、獅子と呼ぶに相応しい傲慢さを宿していた。

幼馴染であるシリウスシンボリを所構わず連れ回し、しかしレースになれば自分に並び立つ者を決して許さない。

シンボリドルフは生まれた瞬間から、自身が最強であると確信していた。頂点が自分で、それ以外は下。

なまじ身体能力と知能が他とは隔絶した実力を秘めたシンボリ家の最高傑作であったことも、その認識を助長していただろう。

トレセン学園に入学しても、その気持ちは変わらなかつた。

同期になるであろうウマ娘にも負ける気はせず、優秀な先達に対してもいずれは自分が超えるという未来を疑いすらしない。

神バと称されるシンザンであろうと。

怪物と称されるマルゼンスキーであろうと。

シンボリドルフは彼女たちを踏み台としてしか見ていなかった。

その傲慢が揺らいだのは、デビューを一年後に控えた年の皐月賞を観た時だ。

真の最強が、其処には君臨していた。

パーガトリー。

後にシンボリドルフが理想と掲げる、世界最強のウマ娘。

レースを観て、心から圧倒されたのは初めてだった。

身が震えるほどの赫怒を見たのは初めてだった。

想いには、世界を変える力があるのだと実感したのは初めてだった。

マルゼンスキーが下らない規則の所為で、多くのレースに出走制限が掛かっていることは知っていた。

実家の伝手もあつたし、組織として半ば腐っていたURAへ隔意を抱いていたシンボリドルフも、実は規則の改正のために行動していたのだ。決してマルゼンスキーの為という殊勝な心掛けではなく、いつか訪れる怪物退治の機会を得る為というものではあつたが。

マルゼンスキーがクラシック期になるまでには間に合わなかつたのだが、あと何年か後には変えられるだろう予定であつた。

そんなシンボリドルフですら不可能だったことを、パーガトリーはいとも容易くやってのけたのだ。

冷静になつてシンボリドルフの身を焦がしたのは、屈辱に塗れた怒りであつた。

自分が他人に圧倒され、あまつさえ一抹の恐怖を抱いたなど、許されることではない。

シンボリドルフは衝動に従つてパーガトリーに突撃しようとしたが、その後のレース業界は荒れに荒れて行動が縛られてしまった。実家が騒動の中心へといの一番に介入したからであり、URAの膿を取り除く絶好の機会であつたためにシンボリドルフ

も協力せざるを得なかったのだ。

思えばこれが、シンボリルドルフが他人に振り回された初めての出来事だったであろう。その事実にも腹が立って仕方がなかったのだが。

最強vs最強の日本ダービーが終わって、ようやく時間が取れたシンボリルドルフは真っ先に行動した。

マルゼンスキーと共にレース場にいたパーガトリーは、想像よりも遥かに穏やかなウマ娘であった。

「あら、ルドルフちゃん」

「マルゼンスキー、この子は？」

「シンボリルドルフちゃん。来年デビュー予定のうちの後輩ちゃんよー」

「ほう、この子があのシンボリ家の最高傑作ですか」

初めて見る眼差しをしていた。

ただの後輩を見る目。シンボリ家の最高傑作と知っているのにも関わらず、興味も関心も薄く、取るに足らないウマ娘を見るような紅の瞳。

「初めまして、パーガトリーさん。私はシンボリルドルフと申します。一つお願いがあるのですが、私とも併走をしていただけませんか？」

その無関心は、シンボリルドルフの低い沸点を超えるには充分だった。

「ルドルフちゃん、いきなりそんなこと言ったら」

「マルゼン、少し黙っていてくれないか」

「……はあ、これはダメね」

大きく溜め息を吐いたマルゼンスキーは、パーガトリーへと手を合わせた。

「パーガトリーちゃん！」

「私は別に構いませんよ」

「よろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします」

微笑を浮かべて立ち上がったパーガトリーは、側においていた自身のバッグを漁り始める。

「ああ、ありました」

「なんですか、それは？」

「特注の蹄鉄シューズです。持ってみますか？ 重いので気を付けてくださいね」

手渡された蹄鉄シューズを持った瞬間、シンボリルドルフの手が重力に負けた。

「っ!？」

「片方だけで20kgあります。本当はもつと重いものが欲しいのですが、今の技術ではこれが限界とのことで」

まるで重さを感じさせずにシューズを持ち上げたパーガトリーは、黙々と履き替えて立ち上がる。

その光景を見て顛顛に青筋が走ったのはシンボリドルフだ。

「……何のつもりですか？」

「私と貴方が併走するのでしょうか？ ではハンデが必要です。ああ、それと」

やや幼さが残るシンボリドルフの双眸が鋭利になる一方で、パーガトリーは余裕の態度を崩さない。

「敬語が苦手であれば、崩していただいて結構ですよ」

「……いえ、よろしくお願ひします」

バチバチに覇気を撒き散らすシンボリドルフと、はたから見たら内心が一切見透かせないパーガトリー。

そんな二人を見て、マルゼンスキーは薄く笑った。

「これでドルフちゃんが少ないは丸くなるかしら」

スタートラインに並んだ二人。

シンボリドルフに対して、パーガトリーは一言だけ告げる。

「シンボリドルフ、今回は分かりやすくしますので」

「……」

無言のまま一瞥だけしたシンボリルドルフは、研ぎ澄ました集中力を發揮して前だけを見つめ直した。

パーガトリーの言葉の意味は定かではないが、シンボリルドルフにとっては関係ない。衝動のままに勝負を仕掛けてしまったが、あそこまで虚仮にされて黙ってなどいられなかった。

(その余裕に満ちた表情を変えてやる！)

「位置について、よーいどんっ！」

マルゼンスキーの声を合図に、シンボリルドルフは最高のスタートを切った。

隣のパーガトリーは動かなかった。

(——巫山戯るなッ!!)

重りを付けてなおハンデが必要だという判断にシンボリルドルフは気が狂いそうな怒りを抱き、激情に従って加速する。

そして、シンボリルドルフが十歩先んじたその時だった。

「——領域展開」

ダアンツッ！ という爆発音と共に聞こえた小さな眩き。

次の瞬間、シンボリルドルフの視界が煉獄に覆い尽くされた。

「ツツツ!!？」

肌を焼くような猛烈な熱さが背後から襲い掛かる。

未知の現象に対し、シンボリルドルフの身体は震えが止まらなくなった。

(なんだこれはなんだこれはなんだこれはっ!?)

ビリビリと突き刺さる埒外の威圧。

湧き上がるのはどうしようもない強烈な恐怖と、いち早くこの場から離れたいという

願望だけ。

シンボリルドルフは己のペースなどを忘れて、スタート直後から全力疾走をする羽目になった。

「はあ、はあ、はあ、はあっ!!」

走る、走る、恐怖に囚われて遮二無二に走る。

瞬間速度なら今までで一番速い。未だに本格化を迎えてないウマ娘とは信じられない速度で直線を駆けている。

なのに、背後から付いてくる気配は弱くなるどころか着実に強くなっていた。

——怖い

——怖いっ!

——私の後ろから離れてくれッ!!

「あああああああああああッ!!?」

永遠とも思える時間が過ぎて、シンボリドルフは視界の先にゴールを見た。

絶叫を上げながら最後の直線を走り抜けて、ゴールを越えた先でもその脚を止めず、背後の気配が完全になくなったタイミングでシンボリドルフはようやく止まった。

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！」

雨を浴びたかのように汗が噴き出て、肺がかつてないほどに暴れて荒い呼吸を繰り返す。

膝に突いた手の震えが止まらず、シンボリドルフはその場から一步も動けない。

少し遠くから、声が聞こえた。

「お疲れ様、パーガトリーちゃん」

「パーガトリーちゃん、ではありません。マルゼンスキー、これは本来貴方の役目ですよ」

「うう、ごめんなさい……あたし、どうしてもこういうのは苦手なの」

「チームの後輩を指導、いえ、あの子の場合は躰に近いですか。それを行うのは先輩の責務です。しばらくは貴方との併走はなしです」

「そんなあ〜っ!!」

「いやいやいやーっ！ とひたすらに駄々を捏ねるマルゼンスキーと、片手で素気無く押し返すパーガトリー。」

シンボリルドルフは眼中にも入っていない。

言葉にされずとも理解した生まれて初めての扱いに、ギリツ、と奥歯を噛み締めた。

(私は負けたのか……)

これまで一度だって、心から敗北した経験などない。

だが今は、全身が訴えている。

あの人は、自分とは次元が違う領域に存在するのだと。

(……いや、そもそも勝ち負けじゃない。勝負にすらなっていないっ！)

十分に手加減された上で、魂から屈服させられた。

少し先の未来で過去を思い返した時、シンボリルドルフを構成していた精神性が罅割

れ、楔が打ち込まれた瞬間はまさにこの時だっただろう。

その事実気付いたのは、もう少し経ってからだったが。

「……何をした」

パーガトリーを睨み付けるシンボリルドルフは、もやは意地だけで動いていた。

「併走で、何をした？」

「今の貴方を知る資格はありません」

「……それは、私が弱いから、ですか……？」

「端的に言えばそうです」

遠慮の無い宣告にシンボリルドルフは拳を握り締め、逃げるようにパーガトリーに背を向ける。

零れそうになる涙をプライドだけで押し留め、その場を離れようと歩を進めた。

「シンボリルドルフ」

名前を呼ばれても、振り返ることもできない。

染み付いた最低限の礼儀として脚だけ止めたシンボリルドルフは、黙したまま次の言葉を待った。

「貴方は何の為に走るのですか？」

「……？」

質問の意味が理解できない。

ウマ娘が走るのに理由が必要なのか。

シンボリルドルフの疑問を置いて、パーガトリーは最後に付け加えた。

「答えが見つかったら、また走りましょう」

◇

パーガトリーと併走した日から、マルゼンスキーから容赦が無くなり始めた。

「今日からちよびつと厳しくするから、お覚悟ね♪」

パーガトリーとの併走を禁止されたことが余程堪えているのか、不機嫌ではないがシンボリルドルフへの対応がかなり雑になった気がする。

今までのマルゼンスキーも強かったが、無意識のうちにブレーキを掛けていたのだろう。パーガトリーが息を吸うように行える意識の切り替えをマルゼンスキーなりに体得した結果、シンボリルドルフは日々の練習でも疲れ果てることが多くなった。

シンボリルドルフは気付く。

(マルゼン、日本ダービー以降の実力が明らかにおかしい)

元々が怪物と呼ばれる実力が、埒外の飛躍を遂げて最早化け物だ。

本番のレースでは更に研ぎ澄まされるのだと思うと、肌が粟立って思わず両腕を摩擦たほどである。

そんなマルゼンスキーを、小細工無しの実力で真っ向から捻じ伏せたのがパーガトリーだ。

強大な相手である。

才能ではなく、努力だけで天才を超えた領域を走る求道者である。

自身の同期にそんな存在がいたらどう思うのだろうか。シンボリルドルフにはまだ分からない。

——貴方は何の為に走るのですか？

パーガトリーの質問と、マルゼンスキーに対して生まれた疑問。

シンボリルドルフは生まれて初めて、他人に純粹な問いを投げ掛けた。

「マルゼン」

「……ん、何かしら？」

最近練習後に消えるマルゼンスキーを追って辿り着いたのは、トレセン学園の中でも外れにある樹々が生い茂った一帯だった。

その中心地、座り心地が悪そうな岩石の上で精神統一をしていたマルゼンスキーを見上げるシンボリルドルフは、とりあえず疑問を口にする。

「こんな場所で何をしているんだ？」

「ちよつとした実験みたいなものよん♪」

軽々しく飛び降りて着地するマルゼンスキーは、理由を明け透けに話すつもりはないらしい。

シンボリルドルフとしても興味はあるが、一先ずは些事と切り捨てた。

パーガトリーと同じくマルゼンスキーもまた化け物。独自の鍛錬法があるのだろう。

「それでルドルフちゃん、わざわざあたしを追いかけたのかしら？」

「気付いていたのか？」

「モチのロンよ♪ ルドルフちゃんがストーカーだなんて、エツチスケツチワンタツチ
だわ！」

何語？ と喉まで出かかった言葉を飲み込んで、シンボリルドルフは早速本題へと移
る。

「聞きたいことがある」

「あら、いいわよ。なんでもござれ〜！」

頭が痛い気がした。

「……マルゼンはパーガトリーさんのことを、どう思っているんだ？」

「唯一無二の親友だと思ってるわ」

「そういうことではなく、レースで競う相手としてだ。マルゼンは、その……不安などは
ないのか？」

「……歩きながら話しましょうか」

そう言つてゆつくりと歩くマルゼンスキーの隣に並んで、シンボリルドルフは答えを
促す。

「ルドルフちゃんの言う不安は、このままずっと勝てないんじゃないかっていう不安か

っ？」

「……そうだと思う」

シンボリルドルフは自分でもよく分かっていない。漠然と出た言葉が不安だった。

一応の確認を終えたマルゼンスキーはくすりと微笑み、梢から覗く夕陽に目を細める。

「ルドルフちゃんは来年デビューよね？」

「ああ、その予定だ」

「同期だと思う子で、あなたより強い子、もしくは同等の子はいるかしら？」

主題から逸れた質問に思えたが、シンボリルドルフは考える間もなく即答する。

「いない。少なくとも、マルゼンやパーガトリーさん程のウマ娘はいない」

「まあ、そうでしょうね。ルドルフちゃんは今の時点でジュニア級の重賞に手が届き得

る実力だもの」

「それがどうかしたのか？」

シンボリルドルフにとって、それは当然のことだ。

シンボリ家のウマ娘として。

シンボリルドルフというウマ娘として。

勝つことが当たり前なのである。

マルゼンスキーはシンボリルドルフの顔を見詰めた。

その瞳は寂しげで、哀れみすら含んでいるように見えた。

「これは経験談として聞いてほしいわ」

「……言ってくれ」

「あなたは間違いなく一人になるわ。気付いた時には、あなたの隣を走っているライバルは誰もいない。ジュニア期までのあたしと同じように」

先輩の無情な宣告に、シンボリルドルフは怯まない。

「私はそれを望んでいる」

「……ふふつ。すごいわね、ルドルフちゃん。あたしはきつと、耐えられなかった」

そう言うマルゼンスキーは、やっぱり寂しげに微笑んだ。

「レースに勝つことは当然嬉しいわ。あたしだって最初は嬉しい以外のことは感じなかった。地元の人々に中央で走ってほしいって言われてここに来たし、重賞で勝った時もちゃんと嬉しかった」

でもね、とマルゼンスキーは続けた。

「いつしか嬉しいと同時に虚しさを覚えたわ。あたしと一緒に走った子たちの顔を見て、戸惑いも抱いた」

——どうしてそんな顔をするの？

——どうしてそんな目で見るの？

——あたしはただ、楽しく走りたいたけなのに

「あたしにも悪い面はあったわ。相手を見ずに、一人で走っていたもの。それだけで楽しかった時もあったのね」

自嘲するようであっけらかんと言えるのは、パーガトリーという存在がいてこそだ。「朝日杯が終わった後、ちよつと落ち込むことがあったのだけれど、そんな時にパーガトリーちゃんと出会ったわ」

マルゼンスキーは本当に嬉しそうに笑った。

「初めて併走した時なんかはもうオドロキ桃の木！ お互い本当の全力ではなかったけど、あたしよりも速い子は初めて見たもの！」

それでね、と興奮収まらないという様子で、マルゼンスキーは捲し立てるようにパーガトリーとの思い出を話す。見ているだけで嬉しいことや楽しいことが伝わってくるような話振りであった。

ふと、何故だか分からないが、シンボリドルフは羨ましいと思った。

そんな事を思った自分に、少しだけ驚いた。

「その後はルドルフちゃんも知ってるわよね？ 皐月賞で世界レコードを叩き出して、その勝利会見でぶつちやけて、色々あった結果、あたしは日本ダービーを走れた」

生い茂る樹々を抜け、二人はそのまま寮への道へと歩く。

マルゼンスキーは一人暮らしなので若干遠回りだが、話も途中なのでシンボリドル

フは何も言わずにそのまま進んだ。

「あの時初めて、絶対に勝つという確固たる気持ちで走ったわ。結果は負けちゃったけど、悔いはない。パーガトリーちゃんとはこれから何度も走るけれど、あれ以上に楽しいレースはきつともうないわね」

それにね、とマルゼンスキーは加える。

表情を見て、シンボリドルフは瞠目した。

マルゼンスキーが口元に刻んだのは、今まで見たことがない獯猛な笑み。

彼女もまた、本能に従うウマ娘なのだど理解した瞬間だった。

「知らなかったの。あたしは結構負けず嫌いで、超えたいと思う壁があることに喜びを感じるなんてね」

これが答え。

マルゼンスキーはパーガトリーがいることに不安など砂粒も抱いていない。

ただただ嬉しく、ただただ楽しい。

好きなことを全力で頑張れるという気持ちだが、これほどまでに幸せなものだなんて。

マルゼンスキーの言葉で、シンボリドルフは一つの答えを得た。

あとはもう一つ、パーガトリーからの問いに対しての自分の答えだ。

「ちなみにだが、マルゼンスキーは何の為に走る？」

「そんなの今も昔も変わらないわ。楽しいから走るのよ。もちろん、あたしの走る姿が誰かの憧れになってくれたら嬉しいけどね」

真つ直ぐで捻りのない、真理のような答え。

ウマ娘なら当然の答えであるし、シンボリルドルフもそうだと思っていた。

だが、パーガトリーにあんな質問を投げかけられて考えた時、疑問も覚えてしまった。

——本当に自分は、楽しくて走っているのか？

——走りたいから走っているのか？

——勝利が当たり前だと思っていることを、自分は本当に楽しんでいるのか？

堂々巡りで思考が混乱しているのだろうシンボリルドルフを見て、マルゼンスキーは微笑を浮かべていた。

「別にパーガトリーちゃんはルドルフちゃんを否定したいとか、そんなことは考えてないわよ。ルドルフちゃんは賞金にも名声にも興味無さそうだし、あたしみたいな本能に忠実なウマ娘にも見えなかったから、ただ気になったんじゃないかしら」

「……そんなものだろうか」

マルゼンスキーの助言を聞き終えて、寮へと辿り着いたシンボリルドルフは背後へと向き直る。

「ありがとう、マルゼン」

「これも先輩の役目だわ。おやすみなさい、ルドルフちゃん」
「ああ、おやすみ」

それから、しばらくの時が経った。

宝塚記念ではクラシック級のウマ娘で史上初の勝利をパーガトリーが飾り、世間でのレースに対する盛り上がりは衰える様子がない。ウマ娘のレースはこれまでも人気コンテンツではあったが、ここ最近の熱気は凄まじく、もはや日常生活の一部として浸透していると言えた。

例年通りなら夏は体調面も考慮してレースへの熱は下がるもののだが、たとえパーガトリーがいなくとも各地で開催されているレースはほとんどが満員。かつてない好景気に、新生URAもここぞとばかり失った信用と真つ白なお金を稼いでいた。顔見知りの役員は良い意味でウハウハであった。

全国的にお祭り騒ぎと言っても過言ではない情勢の中。

対して、シンボリルドルフの表情は浮かれるとは真逆で懊悩の影が差していた。

「私は何の為に走る……」

マルゼンスキーとの会話の後も大した進展も無いまま、気付けば夏も終わりを迎えていた。

不幸中の幸いは、パーガトリーが色々と忙し過ぎてあれ以来会えていないことだろう。

これほどの長期間があっても答えが出ていないのはシンボリドルフ的には許容できないのだが、自分の中でしつくりと来る答えが出ないのもまた真実。

(レースに勝ちたい。これは私もそう思っている。だが何故？ と問われると、私が勝つのが当たり前だからという回答が真つ先に浮かぶ)

自分は上位者であるという生粋の傲慢と、己に對して嘘をつけない真面目さが同居して、明確な答えが導けない。

(賞金には興味が無い。名誉なら手に入れたいという想いもあるが、これはシンボリ家の名に恥じないようにという考えが強い)

レースに勝って得たいもの、これが漠然として形を成していない。

「パーガトリーさんは何の為に走っているのだろうか……」

今日は秋のG1レース第一弾であるスプリンターズステークスの日。

クラシックデイスタンスが本領と思われていたパーガトリーが出走を表明していた。

最近の話題はもっぱらそれで、今朝からレース場が超満員であることをメディアが度々流している。

シンボリドルフも観戦の為にテレビの前で準備していた。

思えば、ここからだつたのだ。

皇帝シンボルドルフが、目指すべき姿を未来に見据えたのは。

スプリンターズステークスでは案の定と言うべきか、パーガトリーが圧勝した。

そして、パーガトリーは世間を揺るがす出来事を引き起こす。

パーガトリーの対応は決して過激ではなかったのだが、穏便に済ませる気もなかったのだろう。結果的に、一つの企業が消滅して生まれ変わった。

その間に前人未踏の記録を、神バことシンザンですら達成できなかった無敗のクラシック三冠を手に入れた。

極め付けは11月の終わり。これまで一度も日本のウマ娘が勝てていなかったジャパンカップで、パーガトリーは外国からの刺客に影すら踏ませず大差勝ちしたのだ。

シンボルドルフは思う。

この短い期間でパーガトリーが成し遂げた数々の偉業を。

礼儀を弁えない悪徳記者を排除し、レースに挑むウマ娘の誇りを守った。

生きることすら苦しむ幼きウマ娘たちに、救いの手が差し伸べられる仕組みを創り上げた。

失いかけていた日本のウマ娘の誇りを、世界を圧倒して取り戻してくれた。

まさに英雄。

かくあるべしという理想の姿。

——それに比べて、自分はなんだ？

「ツツ!!？」

シンボリルドルフの胸の内に湧き上がった感情、それは羞恥であった。

ただ名家に生まれただけの、何も成し遂げていない小娘。それが今のシンボリルドルフだ。

だというのに、自身が頂点であるなどと幼少の頃から思い上がり、他者を踏み台としてしか見られない愚か者。

恥ずかしい。

恥ずかしくて仕方がない。

シンボリルドルフというウマ娘は、こんなにもちつぽけで無様で恥ずかしい存在なのだ、魂から思い知らされた。

「……変わらなければ」

醜く残るプライドを原動力に、シンボリルドルフは決意する。

それすら出来ないのであれば、道化以下の唾棄すべき存在へと成り下がってしまうから。

自分は一体、何を目指すべきなのか。

その答えは探すまでもない。

「パーガトリーさんのように、私もならなければならぬ」

その時、シンボルドルフはあの時の問いの意味を、パーガトリーの言葉の真意を理解する。

パーガトリーは、継いでくれる者を探していたのだ。

「パーガトリーさんは、ウマ娘の誇りを、幸せを守る為に走っているのか」
ならば自分も、続いていかなければ。

その瞬間、シンボルドルフの視界が暗れ渡って透き通っていく。

漠然としていた未来が光り輝き、新たな世界への道標が現れていた。

——これが、私が走る意味！

答えは得た。

叶えたい、否、叶えなければならぬ夢を得た。

辛抱堪らず、シンボルドルフは学園を駆ける。

この気持ちで、この願いを、一番に伝えたい相手がいたから。

「パーガトリーさんっ!!」

「おや、貴方は……」

目の前で泰然と佇む、自身が理想と掲げたウマ娘。

彼女を前に、シンボリルドルフは堂々と宣言しなければならない。

「あの時の問いの答えが出ました」

「あの時の………聞かせてもらえますか？」

パーガトリーは思案げに瞬きを繰り返し、シンボリルドルフの表情を見て微笑を浮かべた。

——ああ、私は間違っていないかったんだ。

「私の走る理由は——」

確信と共に、シンボリルドルフはその決意を口にするのであった。

③ シンデレラグレイ

ファン感謝祭で炎の呼吸の剣舞を披露したら、剣術指南役として剣客浪漫譚（人気漫画）の実写映画スタツフになった件について。

「パーガトリー様、本日はありがとうございます！ 今後ともよろしくお願いいたします！」

「いえ、私も貴重な体験をさせていただきました。送っていただきありがとうございます」

頼むから様付けはやめてくれ。トレセン学園の後輩でもない人に面と向かって言われ始めたらもう終わりなんよ。

というお小言を胸に秘め、車を降りて運転手のウマ娘スタッフに礼を述べた。明らかに歳上なのだが、どうしてここまで畏まるのか。

いやまあね、私もやり過ぎた感はあるのよ？　なんか出来そうだからって原作再現の九連撃をやる必要は無かった気もするよ？　でもやってみたかったんだって。透き通る世界を体得してから、イメージさえ出来れば身体がそう動くようになったし。ただ、あれをやってから役者の方々とスタッフのみんなの態度がもう凄い。私は至高の御方ではないよ？

まあ、やっちゃったもんは仕方がないか。主演俳優は一端の剣士に育て上げよう。大丈夫、マルゼンスキーにもやったことあるから。

送迎車を駐車場を出るまで手を振って見送った後、背後の目的地——中京レース場へと向かう。

何をしに来たかと言えば、ローカルシリーズ地　方を盛り上げる為の活動といったところだ。

私とマルゼンスキーは、名誉生徒会役員のな立場でシンボリルドルフの補佐をしている。
る。

理由は単純、……なんでシンボリルドルフしか役員いないの？　組織として欠陥じゃ

ない？ まあ、あの子もあの子で在校生から畏れられているから、やむを得ない事態ではあるのだが。

幅広い生徒会活動の一環として、中央以外のレースも活気付けようという取り組みが存在する。

生徒会活動とは一体……？ 学園モノ創作でよく見るタイプの、生徒会の権力強過ぎい！ とはちよつと違う。勿論その側面もあるが、どちらかと言えば社畜うツ！ である。

働きたくないでござる、働きたくないでござるうつ！ と駄々を捏ねるのは簡単だが簡単じゃない。キャラ付けをミスっただけだ。

初めは私も遠回しに断ったんだよ？ そんな私のような庶民が生徒会活動なんて恐れ多いと。

そしたらマルゼンスキーがまあ駄々を捏ねた。いやいやいやいやーっ！ と。多分、私のやりたくないという気持ちを察したのだろう。あの子、要所要所でめっちゃめっちゃ勤が良いからね。

結局根負けしてこの始末よ。レースの賞金を得て働かないことを目標としてたのに、どうしてこうなった？

トウインクルシリーズ

中 央は私とマルゼンスキーの時代で不動の人気を獲得している。

シンボリルドルフが一線を退いてからは少し落ち着いたかもしれないが、低迷することはないだろう。自分の推しという存在は必ずいるものだし、そろそろタマモクロスが完全開花する頃合いだ。あの子は次代の最強に相応しい。

伴って地方にも注目は集まっているのだが、いかんせん設備や環境が整っていない。付随してウマ娘の成長が中途半端。これはトレーナー及びウマ娘のやる気の問題だろう。

解決方法は「レースの花形は中央」という染み付いた意識の改革だが、問題は山積みだ。前途多難、一難去ってまた一難。ぶっちゃけありえない♪

なんてニチアサ名曲を脳内再生したら、関係者席へと辿り着いた。

レースによってはコミケばりに混む観客席とは違い、ここはいわゆるVIP席なので楽と言えば楽だ。なお、居心地が良いとは言わない。

何故なら……。

「遅れました」

「「パーガトリー様、お疲れ様ですっ!!」」

軍隊かな？ 同伴していた子たちが一斉に立ち上がり、一糸乱れぬ挨拶を受けて目が死にそうになる。

「お疲れ様です」

もう無理だ、諦めよう。後輩の子たちは好きに呼んでくれ。

「パーガトリーちゃん、お疲れー」

「パーガトリーさん、お疲れ様です」

前の席で振り向いて手を振ってくるマルゼンスキーと、何故か中央の階段半ばで立っているシンボルドルフ。

そして、一番低い場所で呆然と立っている見知らぬ男性が一人。

「パツ、パーガトリーっ?!?!」

ふむ、反応的に関係者、地方のトレーナーかな？ 良い言い方がないのだが、一般人は私のことをさん付けか様付けで呼ぶ。家族以外で私を呼び捨てするのは、ウマ娘のトレーナーと先輩世代やラツキールラといった数少ない同期ぐらいだ。

「ひいつ?!?!」

はて、どういう状況だろうか？ 疑問を口にする前に、推定トレーナーさんが露骨に怯え始めた。私、この現象よく知ってる。

「パーガトリー様を呼び捨てで呼ぶなど、何様のつもりですか?!」

違うんよ、そんな反応は求めてないんよ。呼び捨てでもなんの問題もないんよ。

敵意をダダ漏れにして、推定トレーナーさんを睨みつける十人以上のウマ娘。親の仇みたいな目で見ないであげて、可哀想でしょ。

すっかり恐怖で縮こまっている推定トレーナーさんの助け船を出せるのは私だけである。

「皆さん、落ち着いてください。あと、席に座ってください」

私の言葉に渋々だが従ってくれるみんな。うん、疲れる。

「それで、これはどういう状況ですか？ そちらの方は？」

「はい。私からご説明いたします」

代表してシンボリドルフが説明してくれた。

彼の名前は北原稔。カサマツトレセン学園に所属するトレーナーであり、彼が担当するウマ娘——オグリキャップの実力が国内最高水準と判明したため、中央ヘスカウトをしている。とのことらしい。

ほおん、そんな強い子がいたのか。此処に来た目的と正反対のことをしてる点に目を瞑つていいのかは分からないが、シンボリドルフとマルゼンスキーが認めているならいいのだろう。

「話は分かりました」

あまりない展開だがとりあえず受け入れて、まず思ったことを口に出す。

「それで、オグリキャップは何処にいるのですか？」

「彼女は今、ウイニングライブを行っているかと」

「うん？ 何故本人がいない場でスカウトの話をしているのですか？」

隠れて聞き耳を立てているウマ娘が一人いるためもしかしたらその子かとも思ったが、どうやらオグリキャップではないらしい。

私が知らないだけでこれが正しいスカウト方法なのか？ いや、流石に違うでしょ。当人への意思確認をしないでどうするというのがか。

首を傾げたところ、シンボリドルフは若干バツの悪い顔で私から視線を外した。

「……時間もないため、北原トレーナーから伝えてもらおうかと」

「……シンボリドルフ、例え話をします」

最近マシンになってきたかと思っていたが、この皇帝様は相変わらずだわ。

王は人の心が分からない！

「貴方は地方を走るウマ娘です。ライバルと切磋琢磨してレースを走っていたら、トレーナーがいきなり「中央に行け！」と言ってきました。……どう思いますか？」

「……中央に行けるのは嬉しいが、何故私の意見を聞かないのだと思います」

「貴方が今、オグリキャップにしていることは概ねそういうことです」

これが弾丸論破というやつか、気持ちが良いわけでもないし何よりめんどくさい。シンボリドルフがめんどくさい。ガチの貴族思考で、生まれ付いた傲慢が見え隠れしているこの子は時折マジでめんどくさい。

黙り込んでしまった皇帝様。やべえ、どうしよう。

「はあい、ちゆうもーく！」

こんな時はマルゼンスキーの出番だ。場を繋げる能力のレベルが私とは比較にならない。

「北原トレーナー、いきなりこんな話してごめんなさいね。後で連絡するから、後日オグリキャップちゃんと一緒にお時間貰えないかしら？」

「は、はい、分かりました」

「ルドルフちゃん、そういうことでいいわよね？」

「あ、ああ、それで構わない」

「はい、決まりー！ それじゃあ、北原トレーナーはオグリキャップちゃんのところに行つてあげてください。そっちにいる子と一緒にね？」

ビクツ！ と物陰からウマ耳が見えたと思つたら、瞬速で立ち上がった。

「すみませんすみません盗み聞きしててすみませんっ!!」

「ベルノ!? ああつ、この子は俺が担当している子でして……」

「ベルノライトと申しますっ!!」

赤べこも壊れるような超速のお辞儀連打。正直、見慣れている。私とマルゼンスキーに会つたウマ娘にとつての儀式みたいなものだど認識しているくらいには見慣れ過ぎ

ている。

あらあらまああと、軽やかに返して応対するマルゼンスキー。流石は自称みんなの先輩です。

そんなこんなでその場は解散し、北原トレーナーと約束を取り付けて後日。

「私も来る必要があつたのですか？」

「モチのロンよ♪ パーガトリーちゃんがいるといないとじゃ説得力が違うわ」

「ああ、私もパーガトリーさんがいてくれると助かります」

圧迫面接の間違いでは？ 自分で言うのもあれだけど、日本の現役ウマ娘で五本の指に入るよ私たち。

だけど、皇帝と天然に任せるのもそれはそれで怖い。というか、マルゼンスキーはこういう場では基本的に傍観を決め込むから、実質的にはシンボリルドルフのみだ。うん、やっぱり軋轢を生みそうで怖い。

なぜ私が中間管理職みたいな葛藤をしなければならぬのか？ 映画撮影が終わったら海外にとんずらしてやる！

前向きな決心を固めたところでカサマツトレセン学園に到着した。

事前に話がつっていたのか理事長直々のお出迎えを受け、社交辞令を少々交わして本丸へ。

「こちらになります」

「ありがとうございます」

「では、私はこれで。何かあればご連絡ください」

応接室へと案内された私たちは理事長と別れ、学園内では立派な扉の前に立つ。

「では、打ち合わせの通り、基本的には私が主導する」

「分かりました」

「がつてん承知の助♪」

マルゼンスキー絶対喋る気ないよね？

「失礼します」

先行き不安のまま、シンボリドルフは堂々と扉を開けて入室する。この子の辞書に遠慮という言葉は載っていない。

中にいたのは四人。北原トレーナーとベルノライト、芦毛のウマ娘がオグリキャップだろう。

もう一人の存在には若干驚いた。

「六平^{むさか}トレーナー？」

「おう、邪魔するぜ」

六平トレーナーこと六平銀次郎さんは、中央トレセン学園において重鎮の中の重鎮、

ベテランの中のベテラントレーナーだ。常に研鑽が求められる中央トレーナーという職を、60歳を超えて活躍してる時点で化け物である。私自身はあまり絡んだことがないのだが。

そんな六平トレーナーが何故この場にいるのだろうか？

「パーガトリーさん。六平トレーナーと北原トレーナーは叔父と甥のご関係です」

知ってるなら事前に教えといてくれよ。

「この場に同席することは知りませんでした……」

いや知らなかったんかい。

想定外の事態だったが、特に動揺はしない。むしろいてくれてありがたいだ。

これなら一方的な対話にはならないだろう。

「俺はあくまで立会人だ。基本的にはお前たちで話し合ってくれ」

「承知いたしました。では、早速本題に入りましょう」

失礼します、と私たちも席に着いて三人と向かい合う。真ん中はシンボリドルフと

オグリキャップという形だ。六平トレーナーは誕生日席で見守っている。

「こうして対面するのは初めてだな。私はシンボリドルフ。知っていると思うがこち

らの二人は」

「パーガトリーと申します」

「マルゼンスキーよ」

「オグリキャップ、北原トレーナー、ベルノライト、今日は時間をとってくれてありがとう」

「いや、私は三人とも知らないが？」

「ええッ!?!」

おお、マジか。

無難に自己紹介したが、オグリキャップの返答に北原トレーナーとベルノライトが素っ頓狂な声が上がった。というか声を出してないだけで、私含めて全員が驚いている。

この年代のウマ娘、しかもレースに生きるウマ娘が、皇帝シンボリドルフはおろか私やマルゼンスキーすら知らないとは。自意識過剰ではないが初めて見た。

何となく初見でそんな気はしてたが、どんだけ世間に興味がないんだ。ちよつと不安になるレベルである。

気付けばベルノライトがオグリキャップの両肩を鷲掴みにして、がつくんがつくと前後に振り回していた。

「オ、オグリちゃんっ!? 本当に、本当に知らないの!? 【皇帝】シンボリドルフさん、

【スーパーカー】マルゼンスキーさん、【ワールドブレイカー】、【原点にして頂点】パー

ガトリー様だよ!!」

「う、うん、知らない」

やめてくれ……その異名は私に効く。出来れば面と向かって言わないでほしい。それは様付けよりキツイんだ。

無垢な発言で私のHPを削りつつ、ベルノライトはオグリキャップをぶん回す。

「現代日本のウマ娘でこの三人を知らないなんてオグリちゃんだけだよ!! オグリちゃん本当に地球人っ!?!」

それは言い過ぎじゃない? この子意外と容赦無いな。

当のオグリキャップは友達からの言葉の暴力にガチ凹みし、話し合い前から意気消沈していた。

まあまあと北原トレーナーがベルノライトを何とか宥めて、やっと本題に入ること
に。

「単刀直入に言おう。オグリキャップ、君を中央ヘスカウトしたい」

「中央とは何だ?」

「……語弊もあるだろうが、簡単に言うと、現状日本で一番強いウマ娘たちが集まるところだ」

この子の説得大変そうだなー。

北原トレーナーは何も言わなかったのだろうか? 同じことを思ったのだろうかシン

ボリルドルフも流し目をしていたが、彼は頭を押さえていた。成程、オグリキャップの問題だな。

だが意外なことに、オグリキャップは少しだけ目を輝かせた。

「強いウマ娘……楽しんでそうだ」

おつ、これは脈アリかな？

「オグリキャップ、私たちは君の実力を高く評価している。中央に来て、最強を目指してみないか？」

シンボリルドルフも同じ感想を抱いたのかそう攻めてみる。

オグリキャップは少し固まって、北原トレーナーへと顔を向けた。

「キタハラも中央に行くのか？」

「いや、俺は……」

オグリキャップの無邪気な眼差しに、北原トレーナーは口籠もって下を向く。

……そういうことね。

「俺は中央のトレーナーライセンスを持ってないんだ。だから俺は、中央には行けない。行くならオグリ一人だ」

「じゃあ私も行かない」

オグリキャップの即答に、一番動揺したのは北原トレーナーだ。

「キタハラと一緒に東海ダービーで勝つ。それが私たちの夢だ」

無垢な子供のような宣言に、北原トレーナーは顔に苦渋と喜びを滲ませた。……ふんふむ、一気に複雑になってきたな。

シンボリルドルフは冷徹に状況の見極めに入っている。方向性を模索しているのだろう。

正直、ここからひっくり返すのは難しいが、場合によってはいける可能性もある。

まず必要なのは、オグリキャップというウマ娘がどういうウマ娘なのか探ることだ。

「それは残念だ。だが、私としてはもう少しだけ話をしたい。よいだろうか？」

「ああ、構わない」

ここで初手を間違えるとスカウトは失敗するだろうが、シンボリルドルフなら問題ない。

「東海ダービーについては私も知っている。名古屋レース場で開催されるダート2000の歴史あるレースだ。オグリキャップはずっと前から東海ダービーを走リたかったのか？」

「いや。キタハラやマーチが言っていたから、私も走りたいと思った」

だろうね。私たちを知らないくらいだ。特定のレースに思い入れがあるとは思えなかった。

マーチというのが誰かは分からないが、多分同級生のライバルだろう。

「子供の頃からの夢というわけではないのかな？」

「ああ、カサマツに入ってから知った」

「そうなのか。では、一つ聞きたいことがある」

どうやらシンボリドルドルが思い描いた絵図は、私と違いは無いようだ。

「オグリキャップ、君はどうしてレースを走るのだろうか？ 私が思うに、君には大望が

あるわけではなく、名誉や賞金にも興味が無さそうだ。だから少し、気になってね」

ここで得られる答えによって、スカウトの行方が決まる。

シンボリドルドルの問いに、オグリキャップは束の間の時間沈思して、答えを口にした。

「私は小さい頃、膝がすごく悪かった。歩くことも、立つことにも苦労した」

大切な思い出を振り返るオグリキャップは、優しいな笑みを浮かべる。

「今こうして私が走れているのは、お母さんが毎日何時間もマツサージしてくれたお陰だ。私にとっては、走れるということが奇跡なんだ」

かけがえのない宝物を見せるような、そんな笑顔でオグリキャップは締め括った。

「だから私は走るんだ」

「……そうなのか。話してくれてありがとう、オグリキャップ」

この良い話の雰囲気と思うのは気分的に微妙だが、私はワンチャンあるなと思った。オグリキャップに中央で走りたいと思わせることさえ出来れば、可能性はあるはず。魂から揺さぶるような衝撃があれば……。

そして、シンボリルドルフは――

「最後に私から言えるのはこれだけです。北原トレーナー、どうか、オグリキャップにとって『一番の選択』を考えてあげてください」

皇帝としてそう告げた。

――は？



「「「「ツ?!!」」」」

瞬間、室内の空気が一変する。

パーガトリーが突如として荒々しい圧を放ったからだ、即座に理解できたのはマルゼンスキーだけであった。

見なくとも分かる。虎の尾を踏んだのだと。

「シンボリルドルフ。貴方の言う「オグリキャップにとって一番の選択」とは、一体何を

指し示しているのですか？」

「……え？」

矛先が自身に向いていると思っていなかったためにシンボリドルフは呆然と呟くが、返答を待つことなくパーガトリーは続けた。

「パーガトリーというウマ娘にとつて一番の選択を。そんなことを言われても、私には何が正解かなど分かりません。私はこれまでの人生において、たくさんの失敗を経験しています。好き勝手に生きてきましたので、それはこれからも変わらないでしょう。人間とはそういうものだと思っています」

静かに、ゆつくりと紡がれる言葉。

口調や声音は冷静そのものだが、滲む気配は苛烈な炎を幻視されるほどの怒気だ。

張り詰めた空間に耐性の無いベルノライトと北原は、パーガトリーが発する強烈な圧に震えが止まらなくなっていた。

「シンボリドルフ、貴方は違うのですか？ 貴方はこれまでの人生において一度の失敗も無く、常に一番の選択を選んで生きてきたのですか？」

「……いいえ、私も多くの失敗を経験しています」

「では、自分の一番の選択も選べていない貴方が、どうして会ったばかりの他人であるオグリキャップの一番の選択を、知っているかのような口振りで話したのですか？」

「……………」

「貴方が先ほど口にした一番の選択とは、誰が考えたもので、誰にとつての一番の選択なのですか？」

「……………」

「質問に答えなさい、シンボルドルフ」

「…………私が考えた、私にとつての一番の選択です」

重苦しく吐き出された言葉を聞いて、パーガトリーは一息だけ漏らして怒気を散らす。

平然としていたマルゼンスキーを除いて全身にのし掛かっていた重圧から解放された面々は、思い出したように息を吸って呼吸を整えた。

立会人の立場で同席していた六平は冷や汗一つ流すだけだったが、内心では舌を巻くほかない。

（これがパーガトリー。世界最強のウマ娘の一角か……俺も長いことこの業界にいるが、これほどのウマ娘は初めて見た）

歴戦の経験を持つ六平ですら気圧されかねないこの風格。近くであらあまあまあと微笑むマルゼンスキーも同格だが、意識が切り替わった時に放たれる圧の酷烈さはパーガトリーに軍配が上がるだろう。

とんでもない奴が生まれたものだど六平が感心する中で、パーガトリーは数秒だけ瞑目した後、シンボリドルフへと向き直った。

「シンボリドルフ。私は偉ぶって講釈を垂れるのはするのもされるのも嫌いです。ですが、貴方には必要だと思いました。あくまで私の個人的な意見ですが、聞くつもりはありますか？」

「お願いいたします」

迷う素振りすら見せず、シンボリドルフは頭を下げた。

殊勝とも言えるその態度を見て、パーガトリーは前に座る三人に視線を合わせる。

「北原トレーナー、少しだけお時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

「は、はい。それは構わないんですが……」

「オグリキャップとベルノライトも、構わないですか？」

「ああ、問題ない」

「はい、大丈夫です！」

「六平トレーナーもよろしいでしょうか？」

「構わん」

「ありがとうございます」

先ほどまで怒気を纏っていた者と同一人物だとは思えない淑やかな微笑みにオグリ

キヤップは面食らうも、目の前のウマ娘が只者ではないことだけはこの短い間で理解できた。

あれあたしは？ と首を傾げているマルゼンスキーを置いて、パーガトリーは顔を上げていたシンボリドルドルフへと視線を戻す。

「シンボリドルドルフ、貴方は以前言っていましたよね。なんでも気楽に相談してほしいけれど、皇帝という立場が皆を萎縮させてしまうと。それを変えるために努力している。間違っていないませんか？」

「はい。今でも変わっていません」

「率直に言つて、その状況を変えるのは難しいでしょう」

「……何故でしょうか？」

「それは、貴方がシンボリドルドルフだからです」

禅問答のような回答にオグリキヤップは小首を傾げるが、気にせずパーガトリーは続けた。

「日本が誇る名家であるシンボリ家の最高傑作。幼い頃から英才教育を施され、頂点に立つことを義務付けられたウマ娘。それがシンボリドルドルフです。これが何を意味しているか、分かりますか？」

「……皆が私をそういう風に認識している、ということですか？」

「違います。原因は皆ではなく、貴方にあります」

「ここまで来てオブラートに包むような真似はしない。」

パーガトリーは目の前の少女が傷付くことを分かった上で、はつきりと告げる。

「貴方は、人の上に立つことしか出来ないのです。教え導くことは出来ても、寄り添い支えることは出来ない。そういう風に教育されて育ったのです」

「っ！」

「耳障りな言い方をすると、貴方は無意識に上から目線の発言や振る舞いをしています。それが当たり前だったのでしょう。また、周りも貴方の言動に対して、疑問に思うことはありません。何故なら貴方には、絶対的なカリスマが備わっているから」

「……………」

「そして、そのように長い年月を掛けて完成された性格や言動、カリスマなどは、余程のことが無い限り変わることはありません」

シンボリドルフは黙ったまま俯いている。

心当たりがあつて打ちひしがれているのか、そんなことはないかと反論する為に過去を思い返しているのか。

残念ながら、パーガトリーはここで手心を加えるほど甘くはない。

「今までは指摘するほどではなかったのですが、先ほどの北原トレーナーに対する発言

は看過できませんでした。あたかもオグリキャップを慮った助言の体ていをしていましたが、あれの本質は印象操作と思考誘導が混ざった脅迫に近いものです。皇帝シンボリルドルフという上位者の立場を利用した」

「——パーガトリーちゃん、そこまでにしてあげて」

玲瓏な声が室内に響き渡り、その場にいた全員の動きが止まる。

はつ、とパーガトリーは顔を上げて、シンボリルドルフを挟んで反対側にいたマルゼンスキーを見ると、眉尻を下げた表情で胸の前で指を重ねてばつ印を作っていた。

パーガトリーが視線を下げれば、威厳ある姿とは程遠いシンボリルドルフが俯いたまままでいる。

後悔の念を滲ませつつも、パーガトリーは思考を切り替えて最後に伝えるべき言葉を整理し、穏やかな声音を心掛けて口を開いた。

「シンボリルドルフ。勘違いしてほしくはないのですが、私は貴方の生き様を否定しているわけではありません。むしろ、貴方のような存在は必要です。比類無いカリスマと善性の心を持った貴方のような存在がいなければ、組織は腐っていきます。旧URR Aのように」

旧URR Aという言葉は大きく響いたのか、シンボリルドルフのウマ耳がぴくんとだけ跳ねた。

パーガトリーはその様子を観察しながら、最終的に伝えたかった言葉を慎重に紡ぐ。「そして、貴方の努力を否定するわけでもありません。ですが、貴方が歩もうと決意したその道は、貴方が思っている以上に困難が多い道であることを知っておいてほしかったのです。でなければいつか、貴方自身と、貴方の周りを不幸にすると思いました。私からは以上です」

「……はい。ありがとうございます」

絞り出すようにして溢れた謝意を受けて、パーガトリーは穏やかに微笑んで手を動かす。

優しく、手のかかる妹を慰めるように、初めてシンボリドルフの頭を撫でた。

「頑張りましょう、シンボリドルフ」

さらさらと流れる髪に合わせて数度だけ撫でてパーガトリーは手を離し、マルゼンスキーにアイコンタクトを送る。

微笑みで応えたマルゼンスキーは、小さく手を打って注目を一身に集めた。

「さて！ 急にごめんさいね。オグリキャップちゃん、最後にパーガトリーちゃんからお話があるから、今日はそれでお終い。あたしとルドルフちゃんは先に席を外しちゃうわ。北原トレーナー、それで大丈夫かしら？」

「え、ええ。分かりました」

終始押されっぱなしの北原はなんとかそう答え、オグリキャップも別に構わない態度で示して同意する。

二人の返答を受けてマルゼンスキーは立ち上がり、シンボリルドルフの肩へと手を置いた。

「ルドルフちゃん、行きましょう」

「……ああ、分かった」

よろよろ、とまではいれないが、普段を知っている者なら体調不良を疑う足取りでシンボリルドルフは立ち上がり、マルゼンスキーに連れられてドアまで歩いていく。

ベルノライトはここまでずっと固まっていたが、視線だけはちゃんと動いていた。気まず過ぎてそれ以外にやる事が無かったとも言える。

だからこそ、シンボリルドルフの様子に気付いたのかもしれない。

(……あれ？ シンボリルドルフさん、顔がちよつと紅い……う?)

もしかしたら本当に体調不良だったのかも、と自分は何もしていないのにベルノライトは申し訳なきで一杯になる中、シンボリルドルフは一度だけ振り返った。

「先程の失言、大変申し訳ありませんでした」

最後に頭を下げながらそう言い残して、シンボリルドルフとマルゼンスキーは退室した。



「「「……………」」」」

沈黙、圧倒的沈黙……っ!! ざわざわ、ざわざわという音が聞こえてこないのに頭の中で響き渡っているようだ。

うん、余裕あるわ。私の心は多分、反省してない。

とはいえあーあ、またやっちゃったよまた。いつつもこう、我慢できずに言っちゃやうんだよあ。見敵必殺というか、目には目を歯には歯をというか、そういうのが心根まで染み付いて取れないのだ。……もしかして私ってヤバい奴？

いや、そんなことはない。極めて常識的な感性を持つているはずだ。マルゼンスキーと比較しよう。……うん。問題児と問題児を比べても良いことなんてないわ。

冷静になってきた。

とりあえずこの場をどうにかしよう。

「みなさん、申し訳ありません。空気を悪くしてしまいました」

「衝動で動くお前さんの悪い癖だな」

「六平トレーナーにもご迷惑をお掛けしました」

えっ？ 私ってそんなふうに使われてたの？ 小気味良く返してくれた六平トレーナーはありがたいのだが、衝撃の事実にもメンタルダイレクトアタックなんですけど。

……この風評被害、きつとたづなさんの所為だ！ 私は悪くないのにいつつもたづなさんが説教ばかりするからだ、そうに違いない！

どこまでも追ってくる緑の悪魔と同じ性質を持ったある意味で学園最高権力者に責任転嫁して、私はかろうじて平静を取り戻した。

「まあ、お前さんの言葉には概ね同意できる。お前さんが言わなければ、俺が東条の小娘に小言を言っていただろう」

それ絶対小言じゃ済まないやつ。この人なら東条トレーナーに「お前、担当ウマ娘にどんな教育してるんだ、ああ？」くらい普通に言いそう。てか多分、この後本人に言うと思う。南無……。

過ぎたことは置いといて。六平トレーナーも同意見だと判明し、それでも俺は、間違えてなどいかなかった！ とメンタルが完全回復したので本題を終わらせよう。

何の為に此処に来たのか。

オグリキヤップのスカウトである。

「オグリキヤップ、最後に私からよろしいでしょうか？」

「答えは変わらないと思うが」

「これはあくまでお願いです。私は貴方の選択を尊重しますが、私個人としても、オグリキャップが中央で走っている姿を観たくなりました」

視た感じ、才能は申し分ないのだ。できれば強者と切磋琢磨してほしい。

「お願いは三つです。一つ目は、よく相談して決めてほしいこと。北原トレーナーやベルノライト、お母様とも改めて話してみてください」

「分かった。あとの二つは？」

「オグリキャップは日本ダービーというレースを知っていますか？」

「知らない。東海ダービーの親戚か？」

そうだと思った。

自分で言うのもなんだが、私たちの日本ダービーは伝説扱いだからね。私たちが知らないなら、日本ダービーも知らないだろう。

ベルノライトがまた異星人を見る目でオグリキャップを凝視しているが、ちよつと無視させてもらおう。

「名前の通りです。その世代における日本一のウマ娘を決めるレースですよ」

「日本一……」

「ちなみに私は、その日本ダービーで勝っています」

「つまり君は日本一なのか？」

「ふふっ、それはどうでしょう」

やっぱり食い付いてきた。

オグリキヤップは典型的なウマ娘だ。走りたいという本能が誰よりも強い。

故にこの子は、友情や仁義よりも、最終的には強者を求める。

そんな気がする。

「二つ目のお願いは日本ダービーを観てほしいこと。あと、東海ダービーのレースも観てほしいです。レース映像なら、学園にあるでしょう」

「分かった。最後の一つは？」

最後は駄目押し、魔法の言葉。

「二つ目のお願いと矛盾するかもしれませんが……」

一呼吸だけ溜めて、オグリキヤップの瞳を真っ直ぐに見詰める。

「オグリキヤップ。心のままに決めてください。自分が走りたいと思ったレースを走ってください」

「——分かった」

この子はとても素直で助かる。どこかの皇帝とは大違いだ。

シンボリルドルフももちろん良い子だし、粉骨碎身滅私奉公の精神としか思えない働きでレース業界に尽くしていることは重々承知している。

ただ、あの子は色々と面倒くさいのだ。

今回みたいに庶民の気持ちは理解できないところとか、私に変な理想像を押し付けている気がするところとか、親しまれたいからダジャレを極める（一）という頓珍漢な方向に努力し始めるところとか。……シンボリドルフのダジャレを聞いた後輩の子たちに、体調が悪いのではないかと相談されたことは両手の指の数では収まらない。

手にかかる妹分的な気持ちで見守れないのはあれだな、第一印象が悪過ぎたからだろう。傲慢着飾った貴族のクソガキというイメージがどうしても離れない。このご時世でまだこんな子がしかも日本に存在しているのかと初対面の時には思ったものだ。

なお、マルゼンスキーにその所感を伝えたところ、絶対に本人には言わないであげてねと苦笑しながら釘を刺されたので黙っている。

長居し過ぎた。そろそろお暇しよう。

だが、ここまで迷惑をかけておいて即退散は少々心苦しい。

「私からは以上です。何か質問はありますか？ お詫びも兼ねて、なんでもお答えしますよ」

オグリキャップは絶対興味無いだろうが、これでも私とマルゼンスキーは生きる伝説と呼ばれるスターウマ娘だ。誰か一人くらいは釣れるだろう。

「私は特に無いが」

「パーガトリー様に質問なんて、畏れ多いです」

「俺も遠慮しようかなー……」

「なら、俺から聞きたいことがある」

六平トレーナーが釣れるんかいっ。

まあいい、私に二言は無い。

「何でしようか？」

「お前、なんでドリームシリーズに出ないんだ？」

……………それかあ、それを聞いちやうかあ。

「これまで明確な理由を濁し続けてきたそれを。」

「キタハラ、ドリームシリーズとはなんだ？」

「簡単に説明するなら、中央でも特に優秀な成績を残したウマ娘だけが出られる、ファンにとつては文字通り夢のようなレースだな。パーガトリーなら絶対に出られるし、なんなら出てほしいと思っているファンは山のようにいるだろう」

「その話題になるとのらりくらりと逃げているから、理由が気になってな」

成程、ただの興味本位か。もし出ると説得されようものなら、全力で拒否していたと

ころだ。

心無しかベルノライトの瞳が輝いている。……やめてくれ、そんな目で見ないでく

れ。私にとっては断固拒否に値するが、ごく普通のウマ娘からしたら、「え、そんな理由で?」と言われかねないくらいには自分勝手な理由なのだ。

「……オフレコで頼みますよ?」

「任せろ」

「皆さんもよいですか?」

「誰にも言わなければいいのだな? よく分からないが分かった」

「はいっ!!」

「俺も約束する」

これはマルゼンスキーとトレーナーしか知らないから、全集中の呼吸に並ぶトツプシークレットのだが、出血大サービスで本音を明かそうじゃないか。

ポケットからウマホ（スマホでよくない? と何度でも思う）を取り出して、とある動画を検索。どうせならオグリキャップでも知っている子がいいだろうと、シンボリルドルフのそれを探してみる。

「オグリキャップ、ウイニングライブはご存知ですよね?」

「ああ、私も踊ったことがある」

ちよつと胸を張るオグリキャップ。

え、こんな子でもウイニングライブって肯定派なの? 否定派のウマ娘と出会ったこ

とがないんだけど。

「ノルンが教えてくれたから、私もちゃんと踊れるぞ」

「オグリちゃん、最初は盆踊りだったもんね」

なんだ、ただの友達自慢か。オグリキャップのような世間に全く興味が無いウマ娘ですらウイニングライブ大好きだったら、私に心から共感してくれるウマ娘は存在しないだろう。

おつ、動画見つけ。

「ドリームシリーズでも、当然のようにウイニングライブがあります。ご覧ください」
ウマホをオグリキャップの正面に置いて、私は全力でウマ耳を畳む。

地獄だ、ここからは地獄である（※個人の見解です）。

『位置について、よーい……どんっ♪』

やたらと耳に残るキャッチーなメロディの後、手を繋いだウマ娘三人がステージから駆け下りた。

センターにいたシンボリドルフは、お前本当にシンボリドルフ？ と思わんばかりの澀刺とした笑みを浮かべ、自前のウマ耳があるのに頭上へと両手を運んでそして

……

『うーうー、うまびよい、うまびよい♪』

——耳と脳と精神が破壊されるっ!!

もはや画面すら見たくなくなったので、私は窓から覗く青空へと視線を集中させた。誰だよこんな電波ソング作った奴っ!! 一体どれほどのワインを空にすれば、これほどの曲をつっ!? ……いや、この曲自体に罪は無い。許せんのは過去のURR A上層部だ。お前らも絶対酒飲みながら選曲会議してただろ! なにを歌わせようとしとるんじやい。赤チン知ってる現代っ子なんてマルゼンスキーしかないだろーがッ!! 改革派もそのままにしてるんじやないっ!

狂気の数分間を罵詈雑言で乗り切った私は、そそくさとウマホを回収した。

「オグリキャップ、どう思いました?」

「なんだそれは?」

眉間に皺を寄せて、困惑と羞恥が入り混ざった顔のオグリキャップ。

……どうやら俺達は親友のようだな。

「これがドリームシリーズのウイニングライブに採用されている曲、『うまぴよい伝説』です」

「うまぴよい伝説……」

「私はこの曲を歌って踊りたくないから、ドリームシリーズへの参戦を断固拒否します」

「それが理由だったのか……」

ドリームシリーズのウイニングライブに立ちたいと憧れているちっちゃなウマ娘たちには大変申し訳ないのだが、うまぴよい伝説は人の尊厳を削る大変危険な代物である（※しつこいようだが個人の見解です）。優勝賞金は1億円と中々だが、私はたとえ10億出されてもあれは歌って踊らないと心に決めていた。マルゼンスキーも一度だけ駄々を捏ねたが、私のガチ具合にすぐ諦めたほどである。

ベルノライト的には衝撃の事実だったのか目を丸くしているが、北原トレーナーは苦笑いしか浮かんでいない。そうだろうそうだろう。ウマ娘ではないまともな感性なら、あれは罰ゲーム以外のなにものでもないだろう。

その点シンボルドルフはすげーよ、完璧な振り付けと歌声でやりきるんだもん。……やつぱり皇帝のキャラ付け崩壊してない？

「オグリキャップ。走るレースの決め方はこのように単純で良いと思います。自分が走りたいか、それだけです」

日本に戻ると晒されるストレスの原因を吐き出せて少しスッキリした。

最後の最後で思いつきり空気が弛緩したが、せつかくなので良い話ふうにつけていこう。

「では、私はこれで。オグリキャップ、悔いの無い選択をしてください」

「ああ、分かった。今日はありがとう」

見送りは不要と言って立ち上がり、私は一礼して退室する。

さーて、帰ろう。



「マルゼン、一ついいだろうか？」

「何かしら？」

「マルゼンは私の振る舞いや言動で、無意識なうちの上から目線を感じたことはあるだろうか？ できれば遠慮はしてほしくないんだ」

「んー、……あるかないかと言えば、あるわ」

「例えばどんなものだろうか？」

「そうね。印象的なのは……ルドルフちゃんって「相手の視座に立って考える」ってよく言うじゃない？ これって自分が上だと思っただけで絶対に出ない言葉だから、その、ね……」

「……そうか」

カサマツトレセン学園の校門近くで、シンボリルドルフは覇気の薄れた表情で軽く俯

いた。

「滑稽だな。そんなことにも気付いていなかったなんて」

明らかに落ち込んでいるシンボルドルフの顔を、マルゼンスキーは眉尻を下げて覗き込む。

「ルドルフちゃん」

「……なんだろうか？」

「パーガトリーちゃんに頭撫でられて、恥ずかしかったけど嬉しかったんでしょ？」

「なっ!? なんだ突然っ!？」

「うふふー、凶星かしら〜」

「マルゼンツ!!」

くすくすと笑うマルゼンスキーに、シンボルドルフはそれ以上強く出られない。

眼差しが特殊なのだ。マルゼンスキーは後輩に対して、常に慈愛をもつて接している。彼女の瞳に慈愛以外の感情が宿るのは、パーガトリーとレースで対峙する時だけだ。

皇帝シンボルドルフとしてはそのあからさまな後輩扱いは悩みの種ではあるのだが、ただのシンボルドルフとしてはくすぐったい感情が湧き上がって、気分としては悪くはなかった。

だからといっても、今回のからかいは普通に恥ずかしい。本心を見破られた挙句、そんな慈しみに満ちた眼差しを向けられては堪らない。

「落ち込んでばかりなんてノンノンよ。これを糧にして、ルドルフちゃんは成長できる子だもの」

「……全く、敵わないな」

気付けば、心の靄は無くなっていた。

パーガトリーも言っていたではないか。多くの失敗を経験してこそその人生だと。

シンボリルドルフが目指す理想の為に、この経験を糧に前へと進むのみだ。

「心機一転。ここからまた始めよう」

「ふふつ、バッチグーよ」

シンボリルドルフは決意を新たにして蒼穹を見上げる。

晴れ渡る空はまるで祝福のように透き通って眩しく輝いていた。

「パーガトリーちゃんも終わったみたいね」

「そのようだな」

校舎から出てきたパーガトリーを出迎える為に、シンボリルドルフとマルゼンスキーは歩を進める。

その足取りは先程までとは異なって、皇帝に相応しい威風堂々とした歩みであった。